

地域連携共同研究所年報

第7号

(2021年度)

地域連携共同研究所年報 第7号の発刊にあたって	1
地域連携共同研究所 所長 星野 敦子	
地域との連携活動を通じた地場野菜の有効活用 ～持続可能な活動に向けて～	3
曾矢 麻理子、加藤 茂、高橋 憲行、小林 三智子	
小学生を対象にしたオンラインプログラミング教室の実践 (第二報) -電子キットを用いたプログラミングの実施効果を考える-	9
星野 祐子、安達 一寿、塚田 昭一、名塚 清	
子育て支援におけるプレーパークの役割 -地域における「居場所」としての機能-	21
星野 敦子	
野火止用水の自然環境保全における地域ネットワークの役割 -クリーン活動継続とSDGsから考える-	31
星野 敦子、名塚 清、佐藤 弘信	
教職を目指す大学生と表現活動 -総合表現「かたくりの花」収録、手づくり楽器による児童参加型公演の取り組みから-	41
久保田 葉子、狩野 浩二、棚谷 祐一、川瀬 基寛、細谷 忠司、久保 裕子	
コロナ禍における地域との連携によるオレンジカフェのあり方について (第2報)	51
山口 由美、名塚 清、富井 友子、二瓶 さやか、人見 優子	
健康栄養学科で取り組む超高齢化社会への挑戦	59
相馬 満利、若葉 京良、神田 俊平、飯田 路佳、木村 靖子、池川 繁樹、長尾 昭彦、名倉 秀子、 高橋 正人、徳野 裕子、小長井 ちづる、佐々木 菜穂、林 典子、村田 浩子、伊藤 美穂、菅原 沙恵子、 林 綾子、近藤 温紀、小林 亘、木下 瑞貴	
新座市の健康長寿に向けた取り組みとその評価に関する地域連携研究 第3報 コロナ影響下での高齢者の心身の健康 (2)	65
加藤 則子、志村 二三夫、吉田 亨、長澤 伸江、井上 久美子、國井 大輔、布施 晴美、富井 友子、 名塚 清、横山 徹爾、藤田 誠一	
子ども・地域の居場所支援を対象とするサービスラーニングのデザイン ～「しあわせ居場所ネットワーク」の活動と展開 (2期)～	73
大山 博幸、矢野 景子	
健康増進に向けたプラスごはんプロジェクトからの地域への情報発信・交信・共振 第2報 コロナ禍での学生食堂のメニューコンテストの取り組み	87
名倉 秀子、木村 靖子、村田 浩子、佐々木 菜穂、菅原 沙恵子、岡本 節子、中岡 加奈絵、星野 祐子	
高齢者と子ども・青年の多世代交流を可能とする地域の居場所づくり	97
佐藤 陽、山下 倫実、西村 百絵	
知的障害特別支援学校卒業生の生涯学習としてのオープンカレッジ	109
細谷 忠司、中西 郁、岡本 明博	
栄養管理技術の提供による持続可能な開発目標 (SDGs) への試み ～糖質管理スイーツの開発を通じた地域社会との関わりについて～	117
國井 大輔、川崎 涼風、菊池 彩乃、石沢 美和子、吉山 裕子、石井 由紀子	
防災ワークショップとダイバーシティ -大学での防災減災対策の課題を考える-	129
松永 修一	



十文字学園女子大学

JUMONJI UNIVERSITY

地域連携共同研究所年報 第7号の発刊にあたって

地域連携共同研究所 所長 星野 敦子

「地域連携共同研究所年報 第7号」が完成いたしました。プロジェクトリーダーの先生方をはじめとして、地域団体の皆様、学生の皆様など多くの方々のご協力を得て、活動が成り立っております。改めて感謝申し上げます。

「令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」（文部科学省、2022）が10月に発表されました。小・中・高等学校及び特別支援学校における「いじめ」の認知件数は615,351件（前年度517,163件）、また小・中学校における長期欠席者のうち、不登校児童生徒数は244,940人（前年度196,127人）となり、「いじめ」「不登校」とともに、過去最多となっています。

私が直接関わっている子育て支援活動や子どもの居場所づくり活動を通して強く感じるのは、普通に暮らしている人たちが、今の社会において共有している「生きづらさ」であり、「居心地の悪さ」です。「いじめ」や「不登校」の状況が語るのは、こうした声にならない声であり、子どもたちの叫びです。

地域連携共同研究所が目指しているのは、地域における課題解決であり、そのためには、地域団体や民間企業等との連携、学生とともに地域の方々を巻き込んだ活動の実践などが不可欠となっています。そして最も大切なことは、目まぐるしく変容する社会において、「地域課題をいかに的確にとらえるか」という点です。

本年報において掲載されている研究は、いずれも地域をしっかりと見つめて、地域課題を的確にとらえたうえで、実践的な活動を展開しているものです。子どもや高齢者、認知症の方、障がい者など、社会における弱者の支援と居場所づくりをねらいとした活動が多いのも特徴となっています。またSDGsの視点に基づいて、持続可能な社会の実現に向けた研究が展開されていることも、研究所の目的に沿ったものです。

未だ新型コロナウイルスの影響が完全に払しょくされたとは言えない状況ではありますが、人々の意識は「with コロナ」に移行しつつあります。対面での活動も少しずつ増加してきました。学生たちの笑顔が、未来の社会への希望につながるような研究実践を積み重ね、成果を示していくことの重要性を痛感しています。

2022年11月

地域との連携活動を通じた地場野菜の有効活用 ～持続可能な活動に向けて～

Effective use of local vegetables through cooperation activity with region
～For sustainable activities～

曾矢 麻理子¹⁾ 加藤 茂²⁾ 高橋 憲行³⁾ 小林 三智子¹⁾
Mariko SOYA Shigeru KATO Noriyuki TAKAHASHI Michiko KOBAYASHI

1) 十文字学園女子大学・食品開発学科 2) 株式会社フーディング・パス 3) 新座市役所経済振興課

キーワード：6次産業化 地場野菜 ドレッシング 商品開発 地域活性化

要旨：本学は平成26年度に文部科学省の「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」に採択され平成30年度までの5年間、この事業を通して自治体とともに地域社会と連携し、全学的に地域を志向とした教育・研究・地域貢献に取り組んできた。本研究では5年間地域志向教育プロジェクトの研究助成を受け、地産地消の商品開発を目指し、6次産業の一環として地場野菜を活用したドレッシングの開発・販売に取り組んだ。令和3年度は、すでに販売している3種類の野菜畑ドレッシングに加え、「いちご畑ドレッシング」を開発し、野菜畑ドレッシングシリーズを4種類完成させた。さらに同年、新座市のふるさと納税返礼品に登録されたことで、多くのマスメディアから取材を受け反響を呼んだ。今後の課題として、事業者側のニーズと大学側のシーズをマッチングさせるため、事業者と研究者間での総合的な演出や、全体の計画推進機能が必要と考え、コーディネーターを交えた取り組みを進めていくことで持続可能な活動を目指す。

1 はじめに

食料生産を担う生産者の減少・高齢化、それに伴う地域コミュニティの衰退は、我が国において、昨今の克服すべき課題である。農林水産省では、農林水産業の生産力向上と持続性を実現するために、「食料システムの構築」が急務であるとし、2021年、日本の農業の30年先を見据えた「みどりの食料システム戦略」を政策として掲げた。農業の成長産業化に向けて、生産の現場では、農産物を始めとした地域資源を有効に活用する6次産業化の取り組みが進んでおり、現在、事業者数は2,500件を超え、その売上高は増加傾向にある¹⁾。この背景の一つに、農林水産省が「6次産業化プランナー」を各都道府県に派遣し、6次産業化の事業拡大や、発展に向けた支援を行ってきたことが挙げられる。

本学の食品開発学科では、授業のカリキュラムに「食農体験」や「食品加工学」、「フードマーケティング論」などが組み込まれており、「食の6次産業化プロデューサー」の資格を取得することができる。この資格を活かして、生産（1次産業）、加工（2次産業）、流通・販売（3次産業）の連携を図り、地域の農林水産物を活用した加工品の開発、消費者への直接販売など、食分野での新たなビジネスを創出することが可能となり、将来、食のプロデューサーとしての活躍が期待できる。

また、大学が地域と関わり、産官学連携のプロジェクトを実施する動きも盛んである。多くの地域で、大学が知の拠点として機能し、地域のニーズと大学のシーズをマッチングさせ、地域の活性化を目的とした社会貢献が展開されている。

このような社会動向も踏まえ、本研究では本学の立地する新座市において、地域農業を持続可能なものにし、さらに地域の活性化に貢献することを目指した6次産業化の取り組みとして「地場野菜の加工食品の開発」を進めてきた。本稿では、取り組みを継続したことにより得た、6次産業化を持続可能にするための課題と、参画した学生の社会人教育の側面について考察する。

2 新座市の農業及び、ドレッシング開発に至った経緯とそのシリーズ化

本学の立地する新座市は東京都に隣接する都市農業地帯で農業の盛んな地域である。関東ローム層で覆われた水はけのよい土壌は根菜類を栽培するのに適しており、冬ににんじんにおいては、国の指定産地に認定された一大生産地である²⁾。新座市で収穫された農産物の大半は生鮮食品として販売されており、加工食品として展開の余地があったため、調理の必要性がなく、簡単に使用でき、新座市の土産物になるような商品として「ドレッシング」に着目した。平成29年度に開発した地場のにんじんを用いた「にんじん畑ドレッシング」を皮切りに「ごぼう畑ドレッシング」、「ブロッコリー畑ドレッシング」と展開し、令和3年度には「いちご畑ドレッシング」が商品化され、これまでに4種類のドレッシングをシリーズ化した。現在は新座市役所、丸広百貨店（季節商品）、本学のフジショップにて販売をし、さらに、ナチュラルポークリンクが経営する店舗「君に、焼いて揚げる。」にてサラダ用ドレッシングとて食事と共に提供された。



写真1 シリーズ化した野菜畑ドレッシング



写真2 いちご畑ドレッシング

3 学生による「いちご畑ドレッシング」の開発及びレシピの考案

食品開発学科の学生は「食の科学」をベースに、安全・安心、機能性、おいしさに優れた食品を開発し、「食のトータルプロデューサー」になることを目指している。その一環として行う食農体験では、学内にある圃場（十文字畑）で野菜の種まきから栽培、収穫までを地域農家の指導の下で行い、その作業の労力から1次産業の大切さを知る貴重な経験を得ている。また、市内にある「いちごさんぼ園」にて地場産のいちごの収穫体験や、農業に関する講義を受け、「6次産業化プロデューサー」に向けた専門的知識を習得した。2021年度に商品化した「いちご畑ドレッシング」は、「いちごさんぼ園」から依頼を受けて開発を行った。いちごは鮮度を保つことが難しく、生鮮食品として保存が効かないことから、余剰に収穫した分は冷凍保存されていた。これを活用し、これまで行ってきたドレッシングシリーズの一つとして、代々受け継がれてきたレシピを基に、学生たちが試作を繰り返して商品化を行った。これまでの経験を通して、「ノンオイル」、「食品添加物不使用」であることは消費者側のニーズとして、また、「常温保存」「賞味期限の長さ」は販売者側のニーズとして重要であることが分かったため、「いちご畑ドレッシング」の商品コンセプトも同様に開発を行った。学生たちは、製造のノウハウ、商品のコンセプトなど、商品開発に必要な知識を体得することができた。また、「いちご畑ドレッシング」を用いたレシピを作成し、販促のツールとしてリーフレットを配布した。



写真3 地域農家の方から指導を受ける様子



写真4 十文字畑での食農体験



写真5 農業について講義を受ける様子
(いちごさんぽ園)



写真6 収穫体験 (いちごさんぽ園)



写真7 いちごドレッシングの試作の様子



写真8 いちごドレッシングの試作品



(表面)



(裏面)

写真9 レシピのリーフレット

4 ふるさと納税返礼品への登録とマスメディア取材

令和3年12月に新座市のふるさと納税返礼品としての採用が決定した。本研究を説明するため新座市長の並木傑氏を表敬訪問し、新座市シティプロモーション課の協力の下、にんじんとごぼうのドレッシング各2本セット、納税額11,000円で採用される運びとなった。これを契機に、食品新聞、埼玉新聞、毎日新聞、東京新聞等、多くのマスメディアから取材を受けた。このようにマスメディアの注目を集めたことは、大学COC事業の掲げる目的を果たした成果として捉えている。本事業において大学の位置付けは、「地域に密着した研究活動や教育を主体的に行い、地域再生や地域活性化を行う中心的な役割」とされている。地場野菜ドレッシングの開発は事業が掲げている大学の位置付けに沿っており、大学の地域貢献活動としてマスメディアの目に留まることになったといえる。地域の活性化は経済的な側面だけではなく、学生が参画することによる地域の賑わいの創出や話題性の側面もある。本事業を通して本学も地域密着型の取り組みをアピールできたといえる。



写真10 並木傑新座市長（右から2番目）を表敬訪問



写真11 ふるさと納税返礼品として登録されたドレッシングセット

5 本事業を通して得た6次産業化の課題と展望

本事業は開発に着手してから7年になる。まずは、商品を製造することを目的に取り組み、商品化の目途が立ってから販路を探すことを行ってきた。毎年、製造するたびに販路を探すことは大学側に経験がなく、大変困難なことであった。当初、6次産業化は、1次産業から3次産業へと進めていくものとして実施してきたが、7年に渡る活動を通して販売を見据えた事業計画、ひいては3次産業の視点から進めていくことが必要であることが分かった。多くの6次産業化を進める団体においても、販売への取り組みやレストラン等、他サービスへの展開は弱く、異なる業種との連携形成

のためには計画を推進するコーディネーターの支援が必要である（櫻井, 2014）。今回のドレッシングの取り組みは大学が学生と共に 6 次産業に介入したケーススタディの一例として捉え、今後は、大学の役割を見直し、地域や企業との連携を再考することが事業の継続に繋がるといえる。そのためには、事業者側のニーズと大学側のシーズをマッチングさせ、事業者と研究者及び学生での総合的な演出を、コーディネーターを交えて進めていくことで、持続可能な活動に繋がると考えている。

また、今回は 1 次産業（農業）への経済的な貢献度について触れていない。農研機構が開発した 6 次産業化シミュレーター「LASTS」は、6 次産業化での商品開発の取り組みの経済的評価・売上予測・課題解決策の提示を行うことができる。今後は「LASTS」を利用した経済的な効果もシミュレーションし、農産物にどのくらい付加価値がついているかも分析、評価していきたい。

6 おわりに

7 年間に渡る活動を通して、大学の地域での役割や、学生の教育的な側面は充実してきているものの、商品化以上に販売することの難しさを痛感している。所（2015）も「6 次産業化の主な障がい販売先の確保であることは明らかである」と述べている。著者が 2018 年に報告したように、

- ・関連者が意欲的に取り組めるような組織の構築（魅力的な取り組みの創出）
- ・推進機能となるコーディネーターの創出
- ・各分野が事業内容を十分に理解し、目的の方向性を揃え、役割に責任を持って協同する

以上の事が異業種間での連携には不可欠であり、販路拡大の鍵になると改めて実感している。すなわち、事業を「自分事」として捉え、積極的に協同するステークホルダーを集めることが最も重要である。大学が介入した 6 次産業化の取り組みは、大学の知見を地域に貢献できる良い機会であるが、その事例はまだ少ない。地場野菜の有効活用は、1 次産業の支援と共に食の安全・安心に繋がる、今後の発展が期待できる取り組みである。事業を継続してきたことにより、賛同する「仲間」が増えてきている今、大学を拠点とした事例を増やしていくことも今後の課題である。

謝辞：野菜畑ドレッシングシリーズの完成には、須田健治客員教授ならびに地域連携推進センターの名塚清地域連携コーディネーター、一般社団法人すこやか食育エコワークの藤田誠一氏に大きなお力添えを頂きました。ここに心より御礼申し上げます。

注

- 1) 農林水産省, 2021, 「食料・農業・農村白書」, p74-75.
- 2) 農林水産省, 2021, 野菜指定産地告示, p25.

<参考文献>

- ・櫻井清一, 2014, 6 次産業化の発想を活かした地域活性化に関する資料, 1-3.
- ・所吉彦, 2015, 6 次産業化の現状および課題解決に向けた一考察-九州ブロック熊本県を事例として-, 尚絅大学研究紀要, 47:73-88.
- ・曾矢麻理子, 小林三智子, 2017, 地場野菜を活用した加工食品の開発-新産産にんじんを用いたドレッシングの商品化-, 十文字学園女子大学紀要, 48, 1:269-276.
- ・曾矢麻理子, 小林三智子, 2018, 地域との連携活動を通じた地場野菜の有効活用, 十文字学園女子大学地域志向教育研究プロジェクト研究成果論文集, 2014-2018:89-97.
- ・大西千絵, 2020, 6 次産業化シミュレーターLASTS を用いた 6 次産業化の課題の解明, 農業経済研究, 92, 1:82-87.
- ・常清秀, 2022, 「6 次産業化」の戦略と戦術について考える, 農林金融, 75, 3(913):46-47.

小学生を対象にしたオンラインプログラミング教室の実践(第二報) —電子キットを用いたプログラミングの実施効果を考える—

A Report on the Online Programming Classroom for Children by University Students
(Second report)

—Considering the Effect of a Programming Lesson using Electronic kits—

星野 祐子¹⁾ 安達 一寿²⁾ 塚田 昭一³⁾ 名塚 清⁴⁾
Yuko HOSHINO Kazuhisa ADACHI Shoichi TSUKADA Kiyoshi NAZUKA

1) 十文字学園女子大学・文芸文化学科 2) 同・社会情報デザイン学科 3) 同・児童教育学科
4) 同・地域連携推進センター

キーワード：プログラミング 電子キット embot オンラインイベント 地域活動

要旨：2020年度に引き続き、地域活動に取り組む学生が、電子キットを用いたプログラミングイベントを実施した。実施形態はオンラインで、対象は小学2年生から6年生である。使用した電子キットはダンボールロボットの「embot」で、グループ活動をしながら「embot」にプログラミングを施していく。ここでは、実施の振り返りにあたり、保護者の感想と運営側の学生の感想を参考にす。まず、保護者の感想では、配信方法や資料の活用に関して改善点の指摘がみられたが、児童に対する学生の対応は概ね好評であった。また、「embot」に初めて触れた児童に対して、知的好奇心を促すことができた点も評価された。学生の感想からは、イベントが成功したことの達成感、運営メンバーの一体感などが、良かった点として挙げられた。その一方で、リーダーやサブリーダーへの負担を指摘する声があった。2022年度はおそらく対面での活動が増えることだろう。メンバー間の負担の偏りを解消しつつ、地域に根ざした活動に取り組んでいきたい。

1 はじめに

2014年10月10日に誕生した本学マスコットキャラクター「プラスちゃん」は、十文字の「十」を「プラス」に見立てることで名づけられたキャラクターである。そのネーミングには、学生や地域に「プラス」の価値をもたらすこと、学生と地域が「クロス」することへの期待が込められている。そんなキャラクターと共に地域活動を推進するのが「プラスちゃんくらぶ」である。しかし、2021年度も2020年度と同様に、地域に「プラス」の価値をもたらし、地域と直接「クロス」することはなかなか難しい状況にあった。

振り返れば、2020年度は、新型コロナウイルスの感染状況に配慮しながら、どんな活動ができるかを模索した1年であった。従来のミーティング方法・活動内容に固執せず、ICTを積極的に取り入れ、「今できること」に取り組んだ。学生たちは、現状を悲観することなく、しなやかな感性をもって、活動を推進していった。2021年度は、前年度の成果をふまえて、できることの幅を広げた1年だったといえるのではないだろうか。その1つが、2020年度に行ったプログラミングイベントの第2弾である。プログラミングイベントは、「プラスちゃんくらぶ」内で組織されたプロジェクト「プラぐらみんぐ隊」の活動成果である。

本稿では、第2弾となったプログラミングイベントの成果とその課題を、当日の様子や学生ミーティングの記録を振り返ることで、明らかにしていきたい。

2 小学校でのプログラミング教育

2020年度より小学校ではプログラミング教育が本格実施となった。その導入のねらいを「小学校プログラミング教育の手引（第三版）」の記載から引用する。

- ① 「プログラミング的思考」を育むこと
- ② プログラムの働きやよさ、情報社会がコンピュータ等の情報技術によって支えられていることなどに気付くことができるようにするとともに、コンピュータ等を上手に活用して身近な問題を解決したり、よりよい社会を築いたりしようとする態度を育むこと
- ③ 各教科等の内容を指導する中で実施する場合には、各教科等での学びをより確実なものとする

上記のように、小学校では、まず、プログラミング的思考を育むことが第一のねらいとされている。もちろん、コンピュータを実際に扱うことも重視されているが、コンピュータを扱うことで鍛えられる論理的思考力の育成や、コンピュータを活用することでの学びの広がりが、その積極的な導入で期待されていることがうかがえる。

そのため、各教科における導入ならびに活用にあたっては、プログラミングを行うことが目的とならないよう、効果的な学びに資する活用となることが明記されている。

また、小学校段階のプログラミングに関する学習活動の分類として、次の6分類が提示されている。

- A 学習指導要領に例示されている単元等で実施するもの
- B 学習指導要領に例示されていないが、学習指導要領に示される各教科等の内容を指導する中で実施するもの
- C 教育課程内で各教科等とは別に実施するもの
- D クラブ活動など、特定の児童を対象として、教育課程内で実施するもの
- E 学校を会場とするが、教育課程外のもの
- F 学校外でのプログラミングの学習機会

今回、「プラスちゃんくらぶ」が第2弾として主催したプログラミング教室はFに分類される。E分類及びF分類について、先の手引では「地域や企業・団体等においてこれらの学習機会が豊富に用意され、児童の興味・関心等に応じて提供されることが期待される場所であり、各学校においても、児童の興味・関心等を踏まえ、こうした学習機会について適切に紹介するなど、相互の連携・協力を強化することが望まれます」との記述がある。

プログラミング教育必修化に加え、GIGAスクール構想による1人1台端末環境の実現により、コンピュータは、児童にとって筆記用具と同じくらい身近なツールとなった。さらには、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、学校現場におけるデジタル化は加速化している。

その結果、地域においても、子どもたちの学びの変化に対応すべく、新しい学習機会を提供することが望まれている。地域で提供されるプログラミングの学習機会、特に大学生が地域活動の一環として実施するプログラミング教室の実態については、星野他（2021）を参照されたい。

3 電子キットを用いたプログラミング教室

プログラミングの学習方法を、扱う教材で分類すると次のようになる。

- (1) パソコンやタブレットを用いてビジュアルプログラミングを体験するもの
- (2) 電子キットの教材を使ったり、場合によってはPCやタブレットを併用したりしながらプログラミングを体験するもの
- (3) アンプラグド型の教材を用いてプログラミングの考え方を学ぶもの

2020年度は(3)に相当するアンプラグド型のイベントを実施したが、2021年度は(2)に相当する電子キットを用いたプログラミング教室を企画することになった。その理由には、2020年度のイベント参加者から、今度は実際にロボットを動かしてみたい、との感想が寄せられたことが挙げられる。さらに、イベントに携わった学生たちからも、アンプラグド型プログラミングイベントに続

く発展形のイベントとして、電子キットを用いたプログラミングイベントを実施したいとの声が挙がっていた。また、第1弾のプログラミングイベントを終えた直後には、次年度は対面でのイベントが実施できるかもしれない、という淡い期待も抱いていた。

結局、対面での実施は叶わなかったが、当初のねらいを変えることなく、電子キットを用いたイベントを実施することになった。近年、プログラミングを体験できる電子キットは多く販売されており、比較的廉価で入手できるようになったのも、本イベントを実施する要因となった。

さて、今回のワークショップでは、embot と名付けられた電子キットを用いた。embot とは、ダンボールが素材のロボットをプログラミングによって動かすプログラミングキットである。ロボットの本体はダンボールパーツを組み立て、自由に着色することでオリジナリティを出すことができる。embot の企画、研究、開発などは、株式会社 e-Craft が行い、「e-Craft シリーズ embot スターターキット」の開発、製造、販売は、株式会社タカラトミーが担う。

今回は、参加者は Zoom によるオンライン参加で、embot はプラスちゃんクラブの学生が大学にて操作する、という形態での実施であったため、embot の組み立て、着色は学生が事前に行った。以下は、実際に用いた embot7 体である。



図1 作成した embot

4 実施の準備

プログラミング教室を実施するにあたっての準備過程を述べる。

4.1 対象の設定と参加者の募集

実施にあたっては、第1弾と同様の手続きを取った。イベントにあたって用いたツールは Zoom である。Zoom を選んだ理由は、本学でも導入して2年目となり、学生もその使用に慣れてきたこと、一般の方にも、オンラインミーティングのアプリケーションとして一般的になったことが挙げられる。

プログラミング教室の告知に関しては、本学の地域連携コーディネーターが、新座市教育委員会と調整を行い、市内の小学校4校にチラシの配布することとなった。加えて、志木市の公民館3館にチラシを置いていただき、2020年度よりも広範囲で参加者を募集することにした。

チラシは、2020年度に引き続き、学生が作成した。参加者の学年は、2年生から6年生までとした。当初は、4年生から6年生を対象としていたが、集客が芳しくなかったことより、2年生、3年生も対象とした。また、2020年度と同様、保護者同伴であることを条件とした。保護者は、児童の隣で、ビデオやマイクの



図2 募集チラシ

ON・OFF、ブレイクアウトセッションの入室など、Zoom 操作のサポートを担う。

募集期間は、1月28日から2月17日で、応募者は30名となった。

4.2 配布資料

2021年度は、以下の資料をメールにて配布した。いずれも、学生たちが分担して作成したものである。

図3はロボット、図5はブロックの説明の一部である。ロボット・ブロックいずれについてもイベント中に説明は行ったが、参加者の学年が2学年から6学年と離れていることにより、補助資料として以下の資料を用意した。図4は、ワークショップの後半に実施した embot とのじゃんけんゲームに用いた資料である。

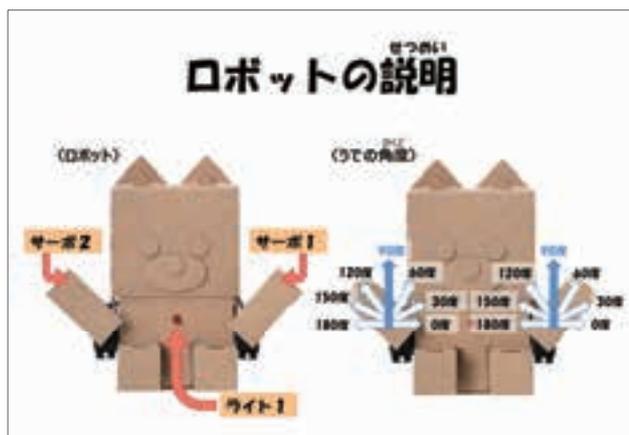


図3 ロボットの説明



図4 じゃんけん対決の説明シート

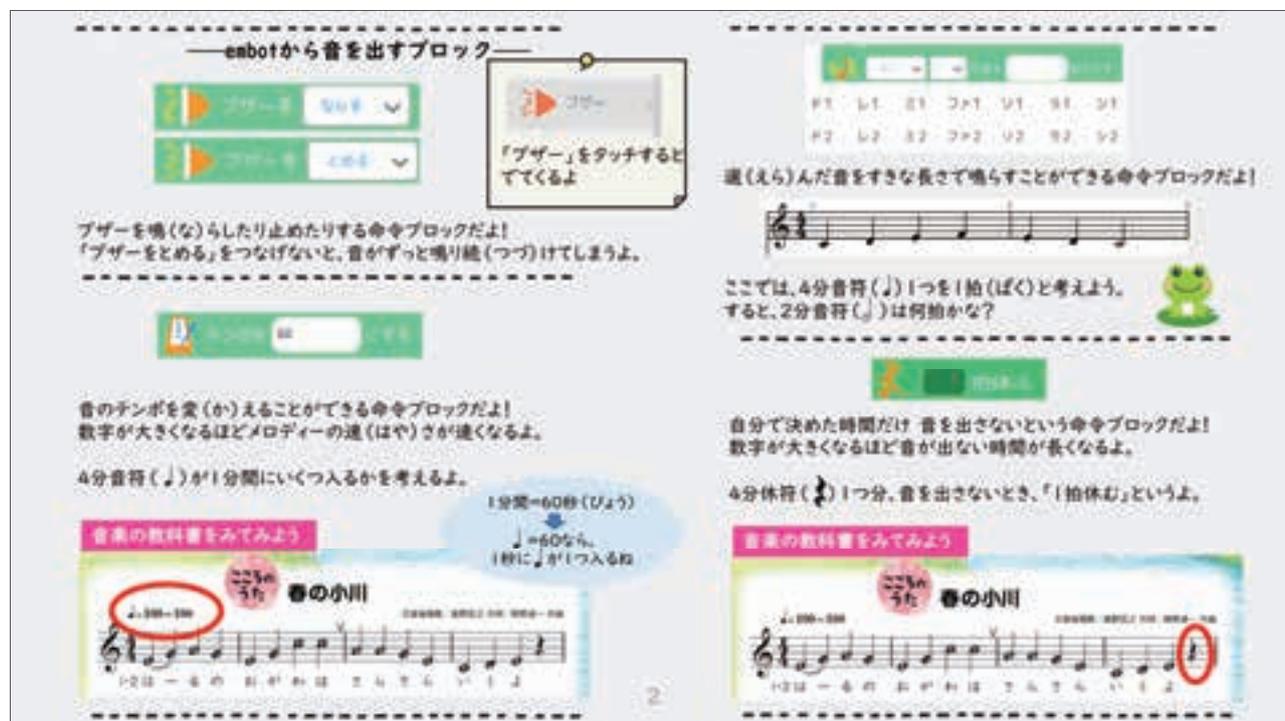


図5 ブロックの説明

図6は、embotのシミュレーション機能のダウンロード方法を解説したものである。イベント中に、シミュレーション機能に十分触れる時間はなかったため、イベント終了後の自宅学習に活かすことをねらって配布した。

その他、2020年度に実施した資料を事前学習用として配布した。YouTubeに掲載した動画（2020年度に作成したオンデマンド教材）URLも合わせて提示することで、子どもたちが楽しんで予習をしてくれることを期待した。



図6 embot シミュレーション機能について

5 当日の進行

当日の進行と工夫した点について述べる。

5.1 当日の進行

2021年度のプログラミングイベントは、アイスブレイクを含めて100分で構成した。小学校で受ける授業とは異なり、子どもたちにとっては長時間の活動となるため、間に休憩を設けている。以下がイベントの進行表である。

なお、当日は、アイスブレイクとして「プラスちゃんと学ぼう SDGs」を実施した。本編と同じメンバーでグループ活動を行うことで、本編での活動をスムーズに行うことをねらった。「プラスちゃんと学ぼう SDGs」は、今回プログラミングイベントを企画した「プラぐらみんぐ隊」とは別のプロジェクト「学ぼうプロジェクト」のメンバーが進行を務めた。

表1 当日の進行

第1部 アイスブレイク —プラスちゃんと学ぼう SDGs— (30分)		
準備	5分	イベント参加の注意点
導入	5分	SDGsについて紹介・ミニクイズ
展開	13分	グループで問題にチャレンジ
まとめ	7分	答え合わせ・解説
休憩 (10分)		
第2部 プログラミングワークショップ (60分)		
導入	10分	embot の紹介・制御の説明
展開	25分	【ブレイクアウトセッション】グループワークで5つのミッションにチャレンジ
	15分	【全体】じゃんけんゲーム、変数・乱数について説明
まとめ	10分	まとめ・シミュレーション機能紹介・アンケート

60分のプログラミングワークショップを「導入」「展開」「まとめ」の3区分に分けて実施することにした。2名の学生がメインファシリテーターとなり、全体説明の役割を担った。ブレイクアウトセッションでは10名の学生が5グループに分かれ、サポート役を務めた。

5. 2 工夫した点

ワークショップを実施するにあたって、以下の点を工夫した。

(1) 学年別のグループ編成

参加者の年齢差を考慮し、同学年または年齢の近い学年でグループを編成した。アイスブレイク活動では、グループの学年に合わせて、難易度の調整をした（低中学年向け・高学年向け）。

アイスブレイクの後に実施したプログラミングワークショップでは、アイスブレイクの効果もあって、スムーズに活動に移行することができた。前半・後半とも、同じ大学生がサポートとして関わったことも、活動が順調にいった理由であろう。

(2) ミッションカードの使用

学年差がある参加者が、同様のタスクを一様にこなすのは難しい。同一課題を取り組む際も、学年により進度に差が生まれるだろう。そこで、時間を区切りミッション形式にすることで、活動にゲーム的な要素を付与した。ミッション形式にすれば、最後までミッションが達成されなくても、参加者はそれほど不満を抱くことはない。

実際、ミッションカードは5枚準備したが、全部のミッションに答えられたグループはなかった。もともと、5枚目をクリアするグループはないことを想定していたので、5枚目は自宅学習用として、後ほど配布した。

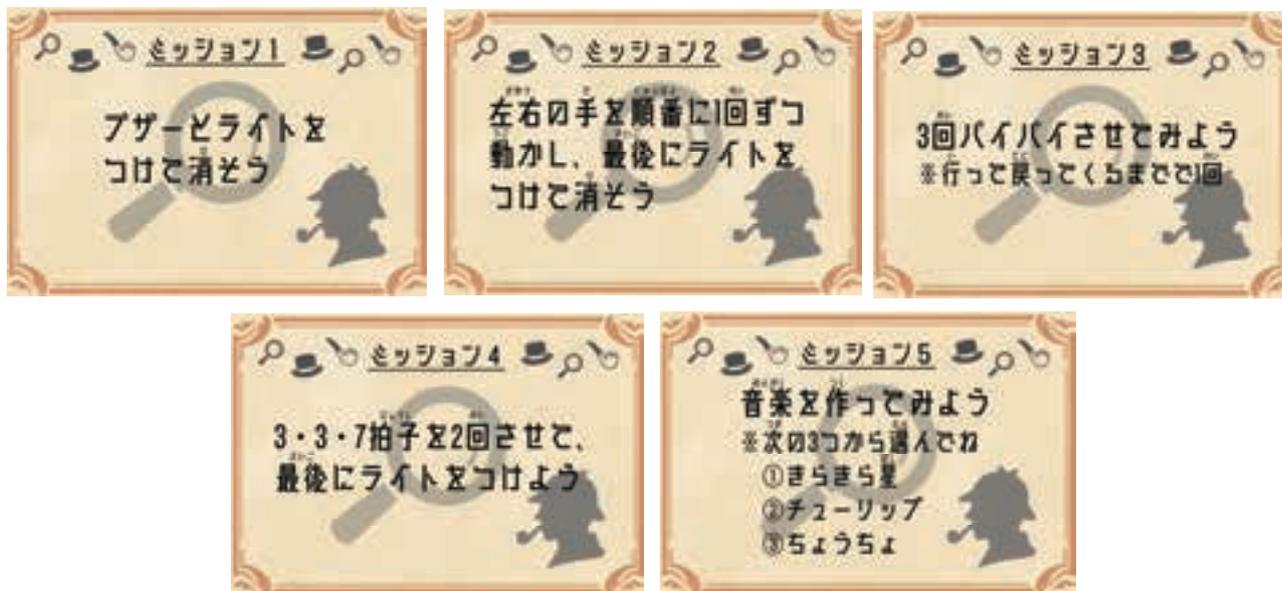


図7 ミッションカード

(3) 発展的な学習

プログラミングの基本概念としては、「順次実行」「くり返し」「条件分岐」が挙げられる。2020年度に実施したプログラミングイベントは、プログラミングの考え方を学ぶことをテーマにしたので、これらの概念を丁寧に取り上げることができた。しかし、今回のイベントでは、ビジュアルプログラミングの体験をテーマにしたため、一つひとつの概念に触れる時間的余裕はなく、操作方法を説明することが多くなった。

そこで、発展的な学習として、高学年の参加者も満足できるような内容を取り上げることにした。それが「embot とじゃんけんで対決しよう！」である。ちなみに、高学年の参加者は、抽象的な思

考ができるようになる形式的操作期にあたるため、「変数」「乱数」といった概念も、学生の説明である程度理解できたものと推察される。以下、実際に用いたスライドを抜粋する。

図8で示したスライドは、後日、参加者に学習プリントとして配布した。イベント終了後も、embotに親しんでほしいと考えたからである。

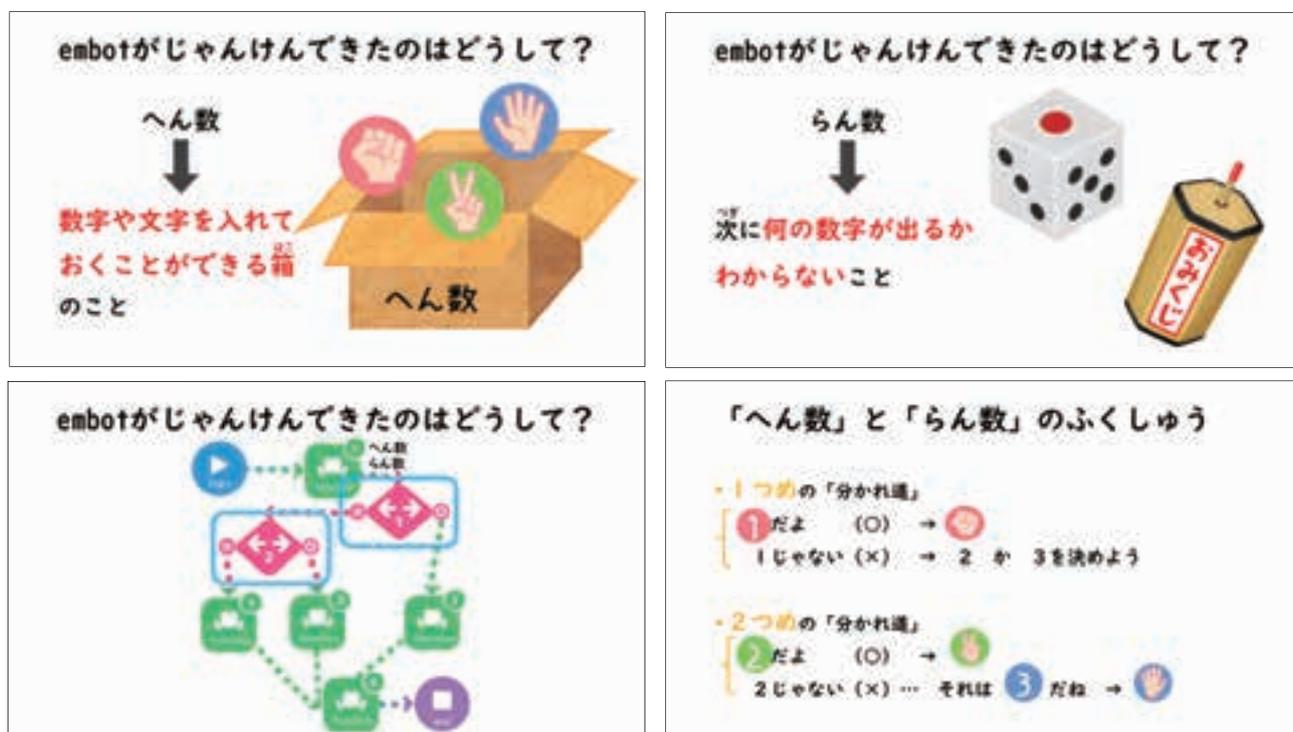


図8 「embot とじゃんけんで対決しよう！」で用いたスライド（一部）

(4) シミュレーション機能の紹介

シミュレーション機能は、端末に専用アプリケーションをダウンロードすることで楽しむことができる。embotを持っていなくても、プログラミングを体験できるので、イベントの最後にその紹介を行った（図6）。学校や家庭でプログラミングに親しむ機会は増えているが、その体験に費用がかからないという点で、embotのアプリケーションはプログラミング体験のハードルを低くする。

6 イベント実施の成果を振り返る

イベント終了時に保護者に行ったアンケートと、参加学生の振り返りの記述から、イベント実施の効果を検討する。

6.1 保護者の感想より

11名の保護者より回答があった。アンケートは任意回答であり、なおかつ回答数が少ないことから、以下の結果が参加者全体の意見を反映しているとは言い難い。ただ、ある程度の傾向はみられるので、参考程度に紹介する。

(1) 児童の満足度について

保護者が感じた参加児童の満足度の分布は、「満足した」が8名、「どちらかといえば満足した」が2名、「満足しなかった」が1名であった。ここでは、embotに関することと、学生の対応に関することに分けて記述する。

① embotに関すること

- ・ロボットを欲しいと言っている
- ・ロボットが可愛いと言っている

- ・ embot でいろいろなことができることがわかったようだ
- ・ もっと長い時間学んでみたいと話していた
- ・ embot のアプリケーションのダウンロードをせがまれた
- ・ 実際に自分で動かせなかったのは残念なようだった

② 学生の対応に関すること

- ・ グループのお姉さんが子どもの独り言を取り上げ、聞いてくれたのが良かった
- ・ 分かりやすく説明してくれたのが良かった
- ・ 優しく教えてくれたのが良かった

embot に関することでは、学びの意欲を感じさせる記述が多く挙げられた。だからこそ、子どもたちが直接 embot を操作できなかった点が、不満として挙げられた。また、保護者の観察より、子どもたちは日頃接する機会が少なくであろう大学生、または初めて出会った子どもとの関わりを、グループワークを通して楽しんでいたことが推察される。

(2) 保護者の満足度

続いて、ワークショップへの参加を申し込んだ保護者自身の満足度について記載する。「満足した」が4名、「どちらかといえば満足した」が7名であった。

① 配信環境・資料の扱いについて

- ・ ブザーの音が聞こえなかったり、画面の操作がおぼつかなくなったりするところがあった
- ・ ハウリングや周りの音（他のグループの担当者の声）が雑音となっている部分があった
- ・ 資料が丁寧でわかりやすかった
- ・ パワーポイントで示した資料が大きな字で見やすく低学年でも理解できるようになっていた
- ・ 事前に配布した資料をもっと講座内で活用してほしい

② 展開について

- ・ ミッション形式にしたことに工夫が感じられた
- ・ 子どもが楽しく興味を持っていた
- ・ 双方向的な活動を取り入れていた点がよかった
- ・ 内容が様々で飽きさせない工夫があった
- ・ 優しい教え方のおかげで落ち着いて学べていた
- ・ 子ども意見について「そうだねー」としか返しておらず、もっと次の意見へと発展させる進行をしてほしい

配信環境・資料の扱いについては、多くの課題が挙げられた。まず、embot のブザーが参加者には聞こえづらかったことが指摘された。集音マイクの性能にもよるが、ブザーの音質を保ったまま、先方に音を届けるのは、配信環境を考えると難しさがあった。また、ブレイクアウトセッションを行う際、学生たちは同じ教室で活動を行ったため、指向性マイクを使っても、一部声が重なりあうところがあった。これらは、今後改善したい点である。

当日上映した資料については、丁寧でわかりやすかったと評価された。その一方で、事前配布資料の活用については課題が残った。配布資料と実際にイベント内で扱う内容のバランスについては、今後は十分意識していきたい。

イベントの構成や展開については、学生が主体の手作りのイベントということで、概ね好印象であった。保護者の方が、学生の活動を好意的に捉えてくださったことがわかる。一部、学生の対応・返答に関して、物足りなさを感じる部分もあったようだが、今後は、臨機応変に対応できるよう、事前準備を念入りに行いながら、子どもたちと関わる経験を増やしていきたい。

6. 2 学生の振り返りより

ここでは、イベント実施後、学生が自主的に行った振り返り活動の記録を参照する。9名の学生が振り返りのミーティングに参加した。振り返りのテーマは、自分自身の関わりのこと、チームとしての活動のこと、今後の活動に向けての3点である。

(1) 自分自身のこと

プログラミングイベントは、2020年度も実施したが、継続して関わったメンバーは多くなかった。そのため、まずは、自分自身がプログラミングを学べたことがよい経験として挙げられていた。そのうえで、オンラインイベントの実施、小学生との関わり方について、新たな学びを得たことが印象的なこととして挙げられている。

特に、小学生に対する言葉遣い、説明の仕方については、日頃意識することがないからこそ、難しさを感じたり、工夫を施したりした点であったようだ。

- ・ 普段は同年代の人と話すことが多いので、あまり話し方に意識を向けませんが、子どもと接するときには、言い方や声の高さ、速さ、説明の仕方にも意識を向けました。
- ・ 子どもたちにプログラミング的な考え方を伝えるために、どのように伝えれば分かりやすいか、また楽しみながら取り組めるかを考えることができました。

また、グループ活動の進行において、消極的な児童の対応に苦慮したという声が挙がった。

- ・ 積極的に手を挙げて発言してくれる子ばかりに意見を聞いてしまい、消極的な子がグループワーク中一言も話さなかったことがありました。話を振って意見を聞いてみたらよかったと思います。しかし、こういう場合は積極的な子にどんどんチャレンジしてもらったほうがいい気もしていて、正しい対応が未だにわからずにいます。
- ・ イベント本番のグループワークの際に、発言の多い子どもと少ない子どもがいる中で、発言の少ない子どもに話し合いに参加している実感を持ってもらえているか気がかりでした。話し合いの進め方にさらに工夫が必要だと思いました。

アイスブレイク活動があったとはいえ、わずかな時間で、学生が参加児童の個性をつかむのは難しい。しかし、消極的な子どもの存在やサポートの難しさ気づいたところに、学びの出発点があると思われる。このように、地域連携活動は、異なる立場・異なる年齢の他者と交わることで、日頃気づかないことに意識を向けるきっかけを与える。

(2) チームとしての活動のこと

2021年度は、プロジェクトリーダーのリーダーシップのもと、グループミーティングや講習会を多く開くことができた。それは、2020年度の実施において、グループミーティングやスキルの共有が十分行えていなかったという反省に基づく。そのおかげもあり、2021年度は「Zoomを活用したり、実際に顔を合わせたりして、準備をしっかりと行うことができた」、「事前に日程が組まれていたので、見通しをもって行動できた」、「先輩後輩関係なく、たくさんコミュニケーションが取れた」など、一体感をもって計画的に活動できたことを評価する意見が挙げられた。

ただ、以下のように、リーダー、サブリーダーなど、プロジェクトを率いたメンバーの負担を指摘する声もあった。

- ・ リーダーやサブリーダーへの負担が大きかったと思うので、申し訳なく感じます。一人ひとりがもっと役割を担えばよかったと思います。
- ・ なるべく均等に役割分担をする方法を検討するとともに、メンバー同士の不安解消するための定期的なミーティングを行うことが大切だと思います。

継続的にイベントを実施していくには、一部のメンバーのリーダーシップに頼るのではなく、それぞれが組織として成長することを目指す必要がある。そのためには、それぞれがイベント実施に至るまでの見通しをもち、役割意識をもってイベントに携わることが大切となる。

(3) 今後について

プログラミングイベントでの経験を、他の企画やプロジェクトに活かしたい、という意見が多くみられた。また「プログラミング」初挑戦の学生は、以下のように「自分でもできたこと」についての達成感を述べていた。

- ・機械が苦手と挑戦してこなかった私でも何とかしてembotを動かせるようになったことがとても嬉しく思います。
- ・プログラミングの経験がなく、活動をうまくやれるか心配でしたが、当日は試行錯誤しながらもグループでの活動を進めることができ良かったです。

2022年度より、データサイエンスの授業が本学でも導入されることになったが、やはりプログラミングになじみのない学生も少なくない。苦手と感じる領域でもチャレンジできたこと、小さな「できた」を積み重ねていくことが、学生の自己肯定感を育み、次の活動への原動力となる。

7 おわりに

2020年度に引き続き、2021年度もオンラインでプログラミング教室が実施できたことは、学生たちにとっても大きな自信になったようだ。継続して実施するということで、イベント実施のスキルや知恵が引き継がれていく。また、実施日は2月であったが、実は、それまでに多くの学生が集う機会はなかった。そのため、コロナ禍であっても、学科や学年を超えた交わりができたことが、学生たちにとって意義深い体験となった。

2022年度も、先輩から引き継がれてきた企画に加え、新たな企画がスタートすることだろう。プラスちゃんクラブの良さである「できることを できるときに できる人が できる範囲で」無理なく活動が展開されることを願っている。



図9 当日の写真

付記

本活動は、十文字学園女子大学地域連携共同研究所の研究費により実施した。「プラスちゃんくらぶ」の学生に活動の場を提供していただき、その成長を支援して下さった全ての方に感謝申し上げます。

<参考文献>

- ・文部科学省（2020）『小学校プログラミング教育の手引（第三版）』
https://www.mext.go.jp/content/20200218-mxt_jogai02-100003171_002.pdf
（2022年6月30日参照）
- ・星野祐子・安達一寿・塚田昭一・名塚清（2021）「小学生を対象にしたオンラインプログラミング教室の実践—アンプラグド型プログラミング教育の実施効果を考える—」『地域連携共同研究所年報第6号（2020年度）』 十文字学園女子大学 pp.11-23

子育て支援におけるプレーパークの役割 —地域における「居場所」としての機能—

The Role of Play Parks for Child-rearing Support
—Functions as a "place to belong" in the community—

星野 敦子¹⁾
Atsuko HOSHINO

1) 十文字学園女子大学・児童教育学科

キーワード：子育て支援 子どもの居場所 プレーパーク 地域共生社会

要旨：「プレーパーク」の子育て支援における役割について、2015年から2021年までの自然体験活動やプレーパークの活動を分析した結果、4点が明らかとなった。①「子育て支援」という目的を設定することで、子どもがのびのびと主体的に遊びが展開できるだけでなく、保護者にとっても居心地のよい居場所づくりを目指すことができる。②保護者にとっての居心地の良さは、そこに集うすべての人にとっての居心地の良さにつながり、結果として運営スタッフや地域ボランティアが活動を通して生き生きと動くことができる。③メンバーが子育てをしながら活動を展開している団体や、子育て支援に関わる団体が運営スタッフや地域ボランティアとして参画しやすい。④他の子育て支援活動において支援対象となっている方たちが、支援する側に入る、参加者が他の子どもの支援にあたるなど、支援する側とされる側の区別がなくなっている。参加者と運営スタッフ等とのつながりは、「子育て支援」という目的を軸とした地域ネットワーク、そして「地域共生社会」構築の可能性を示唆するものである。

1 はじめに

近年、地域社会における子どもの居場所づくりのニーズが高まっている。代表的な「子どもの居場所」としては、「子ども食堂」「学習支援（無料塾）」「プレーパーク」があり、近年ではこれらの機能を組み合わせるなど、多様化が進んでいる。またこれら以外に、「フードパントリー」（無料の食料品、日用品等の配布）も急増しており、新型コロナウイルスの影響により、食事の提供が難しい子ども食堂でも、代わりにお弁当の配布等のパントリー活動を行っているところも多い。

本論文では、「プレーパーク」の子育て支援における役割について、自然体験活動との比較を通して、「地域の居場所」としての機能に着目し、実践を通じた分析を行う。

2 「地域の居場所」の原点となった「プレプラ」

ヨーロッパで生まれた「冒険遊び場」「プレーパーク」は、自然の中で子どもの外遊びを促し、「感性や想像力をフルに活動させる遊びにより、自発性を持った学びと経験を重ねていく、全身運動により環境及び他者との距離感・リスク感覚が育てられ、自律的に行動する能力が培われる、異年齢との交流を通じて多様な社会グループにおける人間関係形成能力を養成している」（中嶋、2016）などの効果が認められている。2015年度と2016年度には、新座を拠点として「ソトプレプロジェクト」として、冒険遊び場の普及活動を展開していたNPO法人新座子育てネットワークと連携し、十文字の森本学フィールドアスレチック跡地において「プレプラ」（十文字でのソトプレ）事業を展開した。

2015年度は、指導にあたる地域・学生スタッフの研修事業を2回、ならびに近隣の幼児、小学生を対象とした「プレプラ」活動を4回実施し、活動におけるのべ参加人数は、子ども215人、大人125人（うちボランティア44人、学生20人）となった。子どもたちは竹を切ったり、穴を掘った

り、炭火でマシュマロを焼いたり、木に吊ったターザンロープで遊んだり・・・と自由に遊びを展開していた。参加者アンケートから、子どもの変化について、遊びの多様化による想像力の育成、ものづくりの楽しさの実感、コミュニケーション力の向上、自然の中での遊び方の会得などがあげられた。さらに、近隣地域での実践者を招いて「ソトプレフォーラム」を開催した。学生に対する教育効果についての報告を行い、パネルディスカッションでは各団体の活動の経緯や行政との関係などが紹介された。新座市におけるソトプレ活動の展開に対し、大いに示唆を与える内容となった(星野、2016)。

十文字の森で初めて開催されたプレーパークである「プレプラ」では、地域の方が自然とあつまり、焼きおにぎりや豚汁をつくったり、大工さんだった方が子どもたちに木工を教えたり、自然な形で「地域の居場所」が作られていた。「プレプラ」における実践が、2018年以降のプレーパーク活動の原点となっている。



「プレプラ」(2015) 報告資料より

3 自然体験活動の実践

(1) 「ふるさとの緑と野火止用水を育む会」による自然体験活動

「ふるさとの緑と野火止用水を育む会」(以下、HUG ネット)は、十文字学園女子大学が、文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(COC事業)に採択されたことを契機として、2015年3月に設立された地域人材ネットワークである。十文字学園女子大学がプラットフォームとなり、13の地域団体並びにそれらを支援する新座市の関係6課が加盟し、4つのプロジェクトを軸に活動している(星野他、2020)。

表1はHUG ネットが主催となり、2015年から2019年までに実施した子どもの自然体験活動を示している。2015年と2016年には、木の実や竹、松ぼっくりなどを利用した自然工作と雑木林での活動が中心であったが、2017年からは、8月の黒目川での魚とりと川遊び、11月の自然工作と雑木林での活動の組み合わせとなった。8月の活動では水質検査や、捕った魚の観察、指導者による鮎の投網漁などを行い、1回あたり30名から40名の児童または親子が参加している。

11月の活動は、新座市本多児童センターにおいて、自然素材を利用した工作や炭焼きなどを行う

とともに、炭火をつかった竹パンづくりや「流し人參うどん」といった地域の野菜や特産物を生かした食に関わる体験を組み入れているのが特徴である。「木の名札」（ネームプレート）を制作したときは、その後近くの本多の森に移動して、自分が製作したプレートを木に設置した。

表1 HUG ネットによる子どもの自然体験活動（2015-2019）

年	月	活動テーマ	内 容
2015	12	イベント参加	「野火止用水ゆるキャラ®フェスティバル」におけるミニクリスマスツリーづくりと魚の展示
2016	7	子ども自然体験学習	竹ざいくと森のぼうけん
	12	子ども自然体験学習	ミニ正月かざりと落ち葉さがし
2017	8	黒目川体験学習	川ガキの黒目川探検
	11	子ども自然体験学習	雑木林で炭焼き体験
2018	8	黒目川体験学習	川ガキの黒目川探検
	11	子ども自然体験学習	木の名札と竹パンづくり
2019	8	黒目川体験学習	川ガキの黒目川探検
	11	子ども自然体験学習	木の名札づくりと飯ごうご飯カレー

出典：星野他（2020）

HUG ネットによる自然体験活動の特徴は以下の4点である。

- ①自然に親しむとともに、我が国の伝統を継承し、ふるさとに愛着を持つことを目的としている。
- ②内容は、HUG ネットのメンバーが得意なこと、好きなことに基づいている。
- ③綿密に計画され、活動はプログラム化されており、準備もしっかりと整えられている。
- ④時には子どもの数よりもスタッフの数のほうが多いこともあり、子どもたちは完全に管理されている。

HUG ネット主導の自然体験活動を継続する中で、常に課題となっていたのが、「より子どもたちの主体性を生かした活動にしたほうがいいのではないか」ということであった。しかしながら、HUG ネットの「子どもの自然体験プロジェクトチーム」（以下Bプロジェクト）は、むしろ自分たちのために活動を企画しているのであって、「自然に親しみ、我が国の伝統を継承し、ふるさとに愛着を持つ」という目的が最優先となっている。例えば、工作に使う松ぼっくりやドングリなどは手芸屋さんのようにきれいに箱に入れて並んでおり、必要な道具もすべて完璧に準備されている。このように、プログラムを作り、綿密な準備をして子どもたちを迎えて、指導をすることが、メンバーの喜びであり、本当の目的なのである。その意味で、ここは「子どもたちの居場所」ではなく、「(主としてリタイア後の) 大人のための居場所」となっている。

(2) 「炭火でおいしいクリスマス」活動

HUG ネットの活動が、HUG ネットメンバーのための居場所づくりとして機能していることから、別途「子どもの居場所としての自然体験活動」の展開を試みることとなった。2018年と2019年に開催した「炭火でおいしいクリスマス」は、子どもたちのための自然体験プログラムと自由遊びを主としたプレーパークを組み合わせた活動である。

会場である十文字の森は小さな雑木林で、一部竹林となっている。木と木の間をロープをわたし、中央では焚き火を焚いたり、炉をつくったりして手作りピザやバウムクーヘンを焼けるようにした。

大学主体ということで、学生の専門性を生かし、食物栄養学科の学生がピザ生地をつくり、幼児教育学科の学生がこどもの遊びスペースを担当した（星野、2019a）。

プログラムされているのはピザ（2018年）やバウムクーヘン（2019年）づくりと、クリスマスプレゼントとしてのキラビー（クラックビー玉）をつかった飾り物の製作の2つである。それ以外は自由遊びの時間として、プレーパークで主体的に過ごせるようにした。自分でやりたいことを見つけて遊ぶ時間を作ったことで、子どもたちは生き生きと活動することができた。HUG ネットのメンバーでもある「雑木の会」が炭火管理を担当し、和光子育てネットワーク所属のプレーワーカーがプレーパークの設営と安全管理を担当した。さらにオカリナの会も参加したいということで、自由にオカリナ演奏をしてもらったが、子どもたちにも人気のある曲「パプリカ」が始まると、子どもたちがダンスを始めて、結果的に全員がうたいながら踊ることとなった（星野、2019b）。保護者も周りで自由に過ごし、「地域の居場所」としての試行となった。



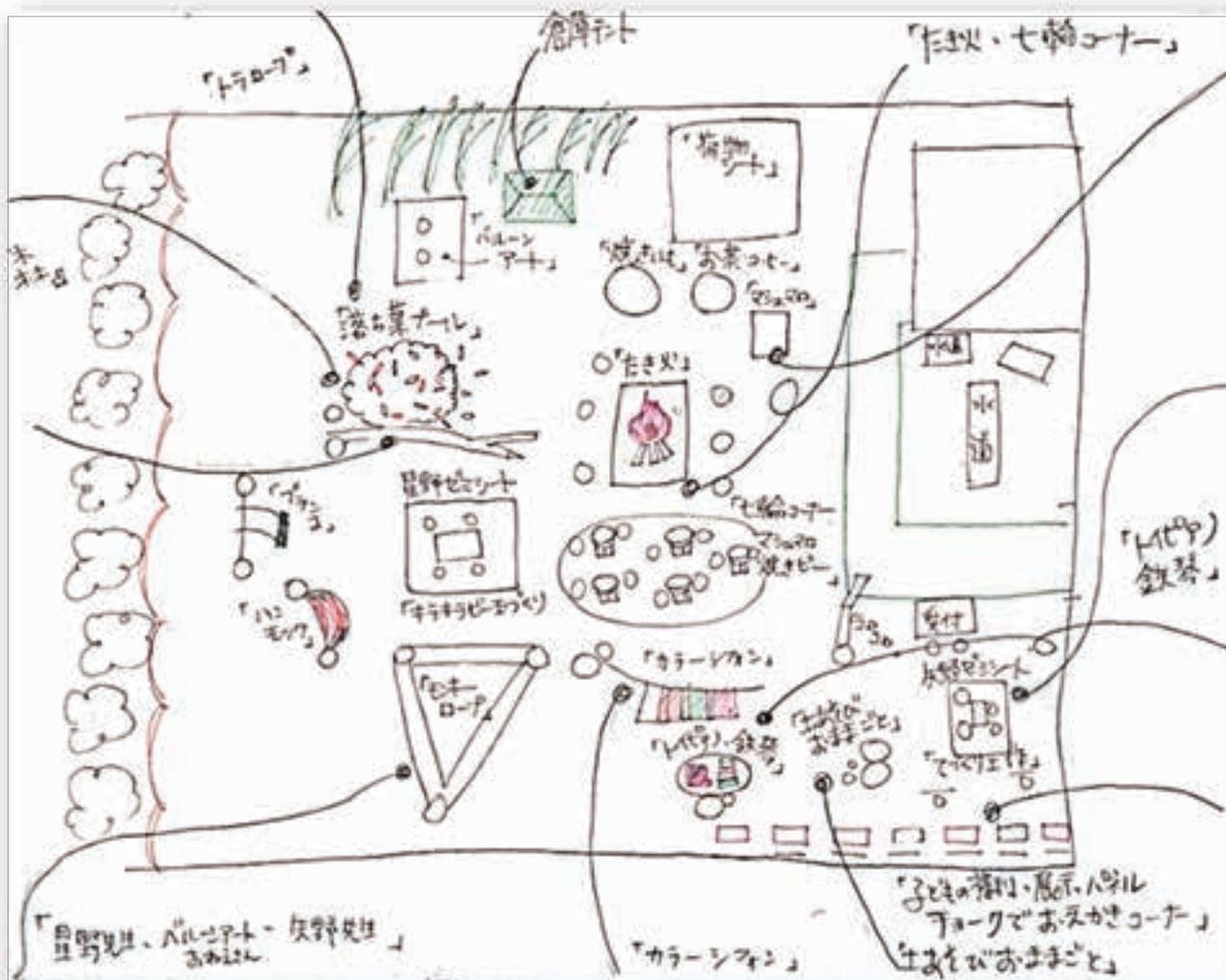
「炭火でおいしいクリスマス」（2019）の様子

4 森のプレーパークにおける実践活動

(1) 活動の概要

2021年11月、12月の最終日曜日に十文字の森において、児童教育学科と人間福祉学科の学生が中心となり、プレーワーカーの指導に基づき子育て支援のための「森のプレーパーク」を開催した。参加者は2回でのべ179世帯、約450人であった。また、2022年1月に予定されていた3回目のプレーパークは、新型コロナウイルスの影響によりリモート研修に変更となった。本研修では、2021年度のプレーパークの振り返りを行い、今後のプレーパーク実践に関する課題とそれに対する取り組みについてのディスカッションを行った。参加者は、プレーワーカー6名、学生3名、教員2名、スタッフ3名、オブザーバー2名の計16名であった。

図1は「森のプレーパーク」のレイアウト図である。焚き火とその周りの七輪コーナーで、焼き芋や焼きマッシュマロ、焼きビー玉などをつくり、2つの工作コーナー、バルーンアートや宝探しなども設置された。森を生かした活動としては、ロープ遊び、ブランコやハンモック、倒れた木から落ち葉に飛び込む「落ち葉プール」など、人気のコーナーがたくさんできて、子どもたちの歓声が絶えなかった。



出典：猪瀬ちゆき（プレーリーダー）制作

図1 「森のプレーパーク」レイアウト図

(2) 活動の特徴

2022年1月に開催した「森のプレーパークリモート研修」において、直接関わったプレーワーカー、学生、ボランティアスタッフから以下のような意見があった。

- ・親のリフレッシュの場になっていた。
- ・子どもがいろいろな世代の人と交流していた。
- ・子どもが主体的に活動に参加していた。
- ・焚き火の周りに集まって、大人も子どももリラックスした様子であった。
- ・1回目と比較して2回目のプレーパークでは保護者も自分の居場所を見つけており、子どもの遊びの本質を理解している様子であった。
- ・大人が遊ぶ姿を見せたり、自らが環境となる意識が必要。
- ・大人の遊び心が発揮できるような環境づくりが必要。
- ・地域の居場所として、(保護者以外の)地域の人も入れるような工夫がほしい。
- ・学生の学びの場、フィールドワークの場としても認識すべき。
- ・イベント的な仕掛けを多くしがちなため、そこからの引き算で遊びが作られる。

また、参加した保護者からは、公式LINEアカウントを通して、以下のような感想が寄せられた。

- ・本日参加させていただきました。子どもたち、とても笑顔で、時間もあっという間に過ぎてしまいました。もしかしたら一生経験できなかったかもしれない、火起こしや焚き火での焼き芋・

マシュマロ焼きなどを経験できたり、落ち葉やどんぐりを拾ったり、秋の素敵な1日を過ごすことが出来ました。特に焼き芋は、「ばばあちゃんのやきいもたいかい」という絵本を何度も読んでいたので、実際に出来て本当に良かったです。本当にありがとうございました。

- ・今日参加させて頂きました〇〇と申します。たくさんのマシュマロやサツマイモや遊びをご提供下さりどうもありがとうございました。初めて参加させて頂いたのですが、とっても楽しくてやばかったです。いまだに子供のテンションが高めです。コロナで2年くらい公園やスーパーにしか行っていなかったもので、こんな楽しいイベントがあるんだとびっくりしました。素敵なお姉さんお兄さんに囲まれ、うちの子供も同じように育ってくれたら嬉しいなと思いました。竹を切って下さったお兄さんやマシュマロを配って下さったお姉さん、寒い中受付して下さったお姉さん皆様本当にどうもありがとうございました。また是非来月も参加させて頂きたいです！楽しみにさせていただきます！どうもありがとうございました。
- ・今日はかなりの寒い中先生方学生さん本当に頑張って下さりどうもありがとう御座いました！子供がとっても喜んでいたので自分もとっても楽しく過ごさせて頂きました！自分は〇〇市が住まいなのですが、このようなイベントはないので新座市がとっても羨ましいです。引っ越したくらいです。お姉さん達が優しく丁寧にお芋を焼いて下さったり、ビー玉を焼いて下さったり、一緒にペンダントを作って下さったり、きっと子供は憧れたと思います。素敵な学生さんばかりで今日は1日ハッピーな気分でした。そしてお昼に伺ったので親も一緒にお菓子やお芋たくさん頂きすみませんでした。また是非来月のプレーパーク楽しみにさせていただきます。今日は本当にお寒い中どうもありがとう御座いました。どうかお風邪などひかれませんように素敵な年を越されることをお祈りさせていただきます。来年も宜しくお願い致します。

図2は、振り返りに基づいてまとめた「森のプレーパーク」の特徴を示している。

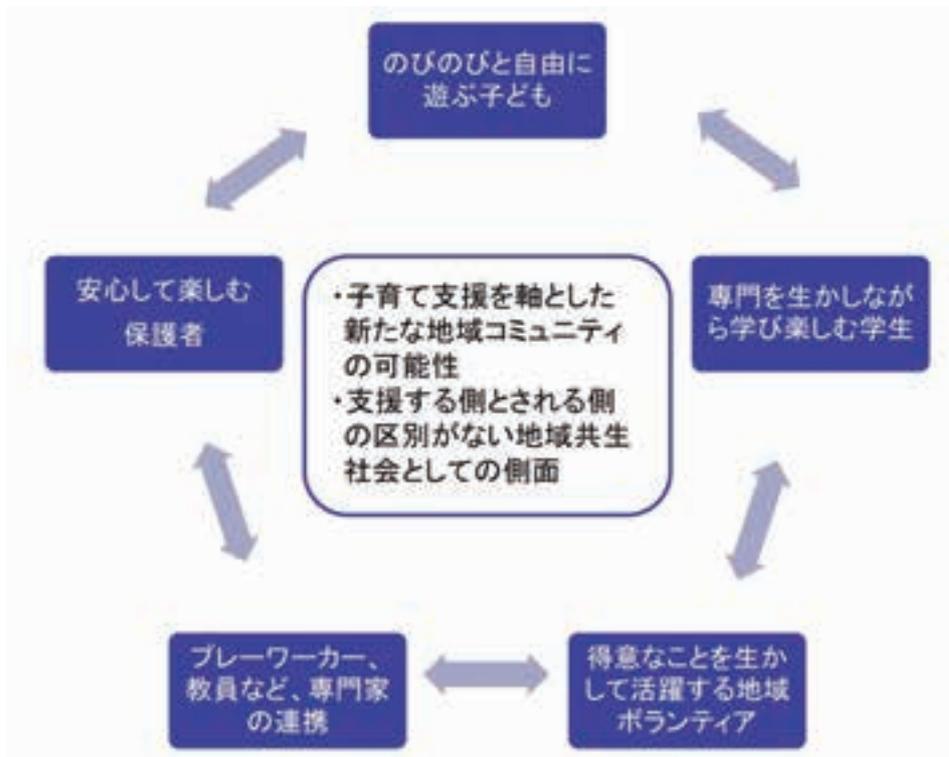


図2 「森のプレーパーク」の特徴

「子ども」「保護者」「学生」「地域ボランティア」「プレーワーカー」及び「教員など」がそれぞれ自らの能力と本分を生かして自然体で活動していることがわかる。「森のプレーパーク」は、子育て支援を目的としており、子どものための遊び場を提供するとともに、保護者が安心して明るい気持ちで過ごせる場を目指している。そのことが、結果としてそこに参加しているすべての人にとっての「居心地の良さ」につながっている。運営スタッフやボランティアが好きなことをしながら心から楽しめる場は、まさに支援する側とされる側の区別がない「地域共生社会」の実現を意味するものである。



「森のプレーパーク」(2021)の様子

5 自然体験から居場所づくりへ

表2はこれまでのプレーパークや自然体験活動の実践を、「居場所」としての機能について整理したものである。「プレプラ」は、地域における子どもの遊び場を作るのが目的であったが、回を重ねるごとに地域の方たちが集まり、自然体で自分たちの居場所をつくっていき、結果的に「地域の居場所」の原点ともいえる活動となった。これに対して、HUG ネットによる自然体験活動は「自然に親しみ我が国の伝統を継承し、ふるさとに愛着を持つ」という明確な目的に基づいて、綿密にプログラムされた活動であり、子どもの居場所というより、むしろ大人にとっても居場所であり、教育（継承）の場となっている。「炭火でおいしいクリスマス」は、「自然に親しむ」という目的を設定したうえで、自由な遊び場を提供し、ボランティアや地域の方を巻き込んだ「多世代の居場所」づくりの実験の場となった。プログラムの提供と遊び場づくりの両方を目指したことから、振り返りにおいて、「時間の余裕がなかった」「位置づけが中途半端であった」などの意見も見られた。

「子育て支援、親子の居場所づくり」を目的として実施した「森のプレーパーク」は、地域共生社会の一端を担う「みんなの居場所」の可能性を示唆するものとなった。視点を子どもだけでなく、保護者にも向けることで、活動主体に子育て団体が積極的に関わり、同時に地域ボランティアとしても、日ごろ子育て支援活動において支援対象となっている方たちが、支援する側として活動に代わることとなった。また、保護者にとっての居心地の良さを目指すことが、その場に集まるすべての人にとっての居心地の良さにつながり、誰もが自然体で生き生きと活動できる場づくりができた。

表2 「居場所」としての自然体験とプレーパーク

活動	プレプラ (プレーパーク)	HUG ネット 自然体験	炭火でおいしい クリスマス	森のプレーパーク
目的	地域における「こどもの遊び場づくり」	自然に親しむ、我が国の伝統の継承、ふるさとに愛着を持つ	自然に親しむ、子どもの居場所づくり	子育て支援、親子の居場所づくり
場所	十文字の森	本多児童センター 本多の森、黒目川	十文字の森	十文字の森
実施年/回数	2015年/4回 2016年/3回 計7回	2015年/1回 2016年～2019年/ 各2回 計9回	2018年/1回 2019年/1回 計2回	2021年/2回 ※3回目は新型コロナウイルスの影響により中止
参加 延べ人数	約600人	約400人	約150人	約450人
活動主体 団体等	新座子育てネットワーク 十文字学園女子大学 あさかプレーパークの会	HUG ネット 十文字学園女子大学	十文字学園女子大学 雑木の会 和光子育てネット ワーク	十文字学園女子大学 和光子育てネットワーク あさかプレーパークの会 柏の葉自然保育の会
主な 活動内容	木工作、木登り、焚き火、ロープ、秘密基地、竹飾り等	自然工作、竹パン、飯ごう炊飯、魚とり、水質検査	ピザ、バウムクーヘン、ロープ、焚き火、キラビー工作等	キラビー、ロープ、落ち葉プール、焚き火、宝探し、焼き芋、焼きマッシュマロ等
居場所としての 機能	多世代の居場所 地域の居場所の原点	大人の居場所 得意分野の継承	子どもの居場所 多世代の居場所の実験	親子の居場所 みんなの居場所（地域共生社会）の可能性

6 まとめ

冒険遊び場としての「プレーパーク」の子育て支援における役割について、2015年から2021年までの活動の分析を通して検討した結果、以下の4点が明らかとなった。

- ① 「子育て支援」という目的を設定することで、子どもがのびのびと主体的に遊びが展開できるだけでなく、保護者にとっても居心地のよい居場所づくりを目指すことができる。
- ② 保護者にとっての居心地の良さは、そこに集うすべての人にとっての居心地の良さにつながり、結果として運営スタッフや地域ボランティアが、専門性を生かしながら、自分の好きな活動を通して生き生きと動くことができる。
- ③ メンバーが子育てをしながら活動を展開している団体や、子育て支援に関わる団体が運営スタッフや地域ボランティアとして参画しやすい。
- ④ 他の子育て支援活動において支援対象となっている方たちが、地域ボランティアとして支援する側に入る、参加者が他の子どもの支援にあたるなど、支援する側とされる側の区別がなくなってきた。

小山（2018）は、世田谷区の羽根木プレーパークを事例とした分析において、プレーパークの機能が拡大し、多様な人びとの交流の場となるとともに、子どもを見守る重要な機能を担っていることを指摘している。羽根木プレーパークは、2015年4月には屋外型の地域の子育て拠点として認められている。

「森のプレーパーク」参加者からの感想においては、スタッフについて言及するものが多かった。学生やプレーワーカーと参加した保護者とのつながりは、「子育て支援」という目的を軸とした地域ネットワーク、そして「地域共生社会」構築の可能性を示唆するものである。

本活動は十文字学園女子大学地域連携共同研究所の研究費により実施した。

<参考文献>

- ・星野敦子、2016、平成27年実績報告 プレプラ@十文字の森、『地（知）の拠点性に事業平成27年度実績報告書 新座市をキャンパスに！+（プラス）となる人づくり、街づくり』、p46
- ・星野敦子、2019a、地域環境を生かした子どものための自然体験活動の実践と評価、十文字学園女子大学地域志向教育研究プロジェクト研究成果論文集、pp135-144
- ・星野敦子、2019b、自然体験活動が子どもの表現力に与える影響について ―エピソード記述による分析を中心として―、児童教育実践研究 第12巻第1号、pp35-43
- ・星野敦子、星野祐子、名塚清、佐藤弘信、2020、地域人材育成と地域環境保全を目指したネットワークの構築、地域連携共同研究所年報 第5号、pp39-48
- ・小山弘美、2018、ネットワーク型コミュニティの成立とその機能―世田谷区プレーパーク活動を事例として―、日本都市社会学会年報 36、pp114-129
- ・中嶋裕子、2016、子どもの発達を保証する遊び場：プレイパークに着目して、社会事業研究 55、pp104-107

野火止用水の自然環境保全における地域ネットワークの役割 —クリーン活動継続とSDGsから考える—

The Role of Local Networks in Protecting the Natural Environment of Nobidome-river
—The Perspective of Continuation of Cleanup Activities and SDGs—

星野 敦子¹⁾ 名塚 清²⁾ 佐藤 弘信³⁾
Atsuko HOSHINO Kiyoshi NAZUKA Hironobu SATO

1) 十文字学園女子大学・児童教育学科 2) 同・地域連携推進センター
3) ふるさとの緑と野火止用水を育む会会長・川爺代表

キーワード：黒目川 体験活動 環境保全 川遊び 生涯学習 COVID-19

要旨：野火止用水の自然環境保全における、地域ネットワークとしての「ふるさとの緑と野火止用水を育む会（通称：HUG ネット）」の役割について、野火止用水の清掃活動の経緯を通して分析を行った結果、以下の4点があきらかとなった。①HUG ネットが環境保全に関わる多様な団体により構成されていることで、用水の清掃だけでなく、樹木の整備や生態系保全の視点から活動を企画し、SDGsの実現に向けた活動を展開することができた。②継続的に観察や保全活動を行っていたため、「野火止用水クリーンキャンペーン」が中断されたとき、用水の現状を踏まえて、対象範囲を縮小しながらもクリーン活動を再開することができた。③新座市内だけでなく、用水流域の地域を広くとらえてきたことから、「クリーンデー」の取り組みに賛同し、「野火止用水サミット共同宣言」の理念を新座市内の活動に生かすことができた。④プロジェクト方式により幅広い活動を展開してきたことから新たな団体が新加入して活動に参加したり、市民有志が賛同して参加するなど、環境保全に対する啓発活動が成果をあげている。

1 はじめに

「ふるさとの緑と野火止用水を育む会（通称：HUG ネット）」は、十文字学園女子大学が文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（COC事業）に採択されたことを契機として2015年3月に設立された。十文字学園女子大学がプラットフォームとなり、市内で活動中の13団体をネットワーク化し、各団体の活動を支援するとともに、5つのプロジェクトチームを作って独自の活動を精力的に展開している（星野他、2020ほか、星野、2018, 2016, 2015を参照）。その活動成果が認められ、令和2年度には「彩の国さいたま環境大賞優秀賞」を受賞している。「川爺」「新座市グリーンサポーター」「雑木の会」などの地域団体とそれらを支援する新座市の関係6課が、それまでは実現できなかった団体同士の横のつながりを作り、連携して地域課題解決に臨むという画期的な取り組みである（星野他、2021）。

本論文においては、プロジェクト活動のうち、「地域環境保全プロジェクト」の活動の中心となっている野火止用水の環境保全活動の役割と意義について、新座市が継続してきた「野火止用水クリーンキャンペーン」ならびに、東京都において実施されている「野火止用水クリーンデー」との関係から検証する。

2 「野火止用水クリーンキャンペーン」の概要

「野火止用水クリーンキャンペーン」（以下「キャンペーン」）は、新座市内の中学校、町内会、市民ボランティアなどが連携して野火止用水の清掃を行う活動である。1995年に新座市立新座中学校の奉仕委員会の生徒たちの発案により始まった。開始当初の野火止用水は、「ペットボトルや空き缶、粗大ゴミが散乱しており、地域住民はゴミ対応に苦慮していた」という。1996年より、市教育

委員会や地域ボランティアなどが参加し、新座市教育委員会主催の「キャンペーン」に発展した（広域社団法人食品容器環境美化協会 HP より）。2013 年には「環境美化教育優良校等表彰」（主催：広域社団法人食品容器環境美化協会）において、「環境大臣賞」を受賞している。

「キャンペーン」は野火止用水を以下の 3 つの地区に分けて実施している。

A 地区：新座中学校体育館集合、野火止用水本流下流域（史跡公園から国道 254 号まで）及び平林寺堀

B 地区：西堀・新堀コミュニティセンター集合、野火止用水本流上流域（都県境から史跡公園まで）

C 地区：第二中学校体育館集合、野火止用水本流、野火止用水の水路跡（国道 254 号から志木駅南口方面まで）、新座中央通り、周辺の公園等

新座市生涯学習スポーツ課によると、目的及び効果は以下の通りである。（新座市 HP より）

【目的経緯】

野火止用水クリーンキャンペーンは、地元中学生が中心となり、埼玉県指定史跡野火止用水の清掃活動を行い、用水への愛護を呼び掛け、「野火止用水管理・活用計画」に定める美化向上の推進を図るとともに、地域ボランティアのネットワークを広げながら、「用水のあるまちづくり」の実現を目指すものである。

【効果】

埼玉県指定史跡野火止用水の清掃活動を通して、用水への愛護を呼び掛けることにつながるとともに、市民同士の世代間交流の場として、地域ボランティアのネットワークを広げる一助となっている。

中学生が主体となり、行政や市民が連携して地域環境保全を推進する「キャンペーン」活動は、毎年参加を楽しみにしている市民や団体も多く、年 1 回ではあるが、野火止用水における環境保全に対する意識の啓発に大いに寄与していた。しかしながら、8 月に実施していたことから、2019 年より 2 年間は猛暑のため中止となり、またその後は新型コロナウイルスの影響を受け、再開できないまま現在に至っている。

3 「野火止用水クリーンデー」への参画

「野火止用水クリーンデー」（以下「クリーンデー」）は、「野火止用水保全対策協議会」により毎年 12 月に開催されている野火止用水清掃活動である。本協議会は、東京都と野火止用水が流れている東京都内 6 市（清瀬市、小平市、立川市、東久留米市、東村山市、東大和市）により構成されている。

新座市は、2011 年に「野火止用水サミット共同宣言」に調印している。「野火止用水サミット」は、新座市の須田健治市長（当時）の呼びかけにより、野火止用水流域の 9 自治体（新座市、綾瀬市、東村山市、東久留米市、朝霞市、志木市、立川市、東大和市、小平市）が参加し、野火止用水とその周辺の環境保全、流域における事業などについて、連携協力を行い、地域活性化を促進することを目的としている。HUG ネットは、「野火止用水サミット」を踏まえて、東京都の「クリーンデー」と連携して活動を実施するべきであると提言していた。

2018 年 12 月 1 日に開催された「クリーンデー」に合わせて、新座市内の野火止用水においても清掃活動を行った（主催：新座市シティプロモーション課、共催：HUG ネット）。コースは以下の 2 つを設定した。

A コース：野火止公園～伊豆殿橋（西分集会所集合）

B コース：新座市民総合体育館～史跡公園（新座市民総合体育館集合）

HUG ネットのメンバーのほか、一般参加の市民も加わり、63 名が参加した。紅葉の時期ということで、晩秋の景色を楽しみながらの活動となった。

4 HUG ネットにおける取組の経緯

表1は、HUG ネットの活動のうち、野火止用水の環境保全活動に関わるものについて経緯をまとめたものである。

【表1】野火止用水環境保全に関する活動経緯（HUG ネット）

年	月	活動テーマ	内 容
2015	11	樹木プレートの設置	野火止用水沿いの植生調査に基づいて22種類、計32枚の樹木プレートを設置
2016	8	環境保全活動	アジサイの剪定
	11	樹木プレートの設置	野火止用水沿いの植生調査に基づいて25枚のプレートを追加
2017	8	環境保全活動	アジサイその他の常緑樹の剪定
	11	樹木プレートの設置	野火止用水沿いの植生調査に基づいて10枚のプレートを追加
2018	8	環境保全活動	アジサイその他の常緑樹の剪定
	11	樹木プレートの設置	野火止用水沿いの植生調査に基づいて10枚のプレートを追加
	12	野火止用水クリーンデー	東京都等との連携に基づき、都内の6自治体の活動と連動して実施
2019	8	環境保全活動	アジサイその他の常緑樹の剪定
2020	8	環境保全活動	アジサイその他の常緑樹の剪定
	11	野火止用水視察①	清瀬駅から玉川上水駅まで、野火止用水、小川用水の事態について視察、散策
	11	野火止用水視察②	武蔵砂川駅から羽村取水口まで、野火止用水の源流である玉川上水の実態について視察、散策
2021	8	環境保全活動	アジサイその他の常緑樹の剪定
2022	10	HUG ネットクリーンデー	野火止用水清掃とアジサイ・常緑樹剪定、埼玉県プラゴミゼロウィークを同時開催

HUG ネットのメンバーのうち、野火止用水の環境保全活動を継続的に行っているのは「野火止用水美化・ピカ隊」及び「川爺」の2団体である。表にはこれらの団体としての活動は含まれず、HUG ネットとして独自に活動したものを示している。HUG ネット設立後、最初に計画したのが樹木プレートの設置であり、そのために野火止用水沿いの樹木について植生調査を行った。調査結果に基づいて、必要なプレート数と種類を決定し、また継続的にメンテナンスならびに実態に合わせた変更を行っている。さらに、調査の結果を形にしたほうが良いということになり、「野火止用水樹木マップ」を制作した。これを見ると、どこにどのような樹木があるか、またどの樹木にプレートがかけられているかがわかるようになっている。初版は2016年に制作され、その後2018年には改訂版を制作している。

アジサイその他常緑樹の剪定は、HUG ネットの「自然環境保全プロジェクトチーム」が中心となり2016年から継続的に実施している。アジサイは鑑賞するには美しいが、もともと野火止用水にあったものではなく、いつの間にか増えてしまい、手入れをする人もいないことから葉が茂り用水に入る日光を遮っていた。そのため用水内の魚や水性生物、昆虫などに影響が出て、さらにそれらを餌としている野鳥の生態にも影響を及ぼしていた。プレートのための植生調査の際に、こうした課題が明らかになったことから、新座市と協議を行い、2016年から新座市シティプロモーション課のご協力を得て剪定を続けている。

2020年11月に2回に分けて開催した野火止用水の視察事業は、「野火止用水の源流をたずねて」

をテーマに清瀬から玉川上水の始点である羽村取水口までを徒歩で散策し、自治体による用水の管理状況の違いや、野火止用水の現状を視察した。2日間の主な経路は以下の通りである。

- 1日目（2020年11月6日）野火止用水、小川用水の散策（約12km前後）
清瀬駅～松山2丁目（用水沿いに）～東村山運動公園～九道の辻公園（昼食）～
処理用水放流口～小川用水方面～小平監視所～玉川上水駅
- 2日目（2020年11月24日）玉川上水羽村取水口までの散策
武蔵砂川～伏越（玉川上水と残堀川の立体交差点）～拝島駅～水食土公園～
武蔵野台地の西縁崖線～羽村取水口

5 「HUG ネット野火止用水クリーンデー」の概要

(1) 目的

2021年10月7日、HUG ネットは、初めて会主催の「HUG ネット野火止用水クリーンデー」（以下「HUG ネットクリーンデー」）を開催した。2020年にも同様の企画を計画していたが、新型コロナウイルスの影響により中止となった。開催の目的は以下の3点である。

- ①従来より実施されていた「キャンペーン」が中断されており、市民が野火止用水の保全に関わる機会がなくなってしまうことから、そのような機会を復活させたい。
- ②継続して行っているアジサイ・常緑樹の剪定作業を合わせて行うことで、作業の意義を広く知ってもらいたい。
- ③「埼玉県秋のプラごみゼロウィーク」の時期に開催することで、新座市内の野火止用水にどのくらいプラスチックごみがあるのか明らかにするとともに、プラスチックごみ削減に対する市民の意識向上を図りたい。

以上の目的に沿って、「クリーン班」と「剪定班」の2つに分かれて活動を行った。

① クリーングループ

「HUG ネットクリーンデー」と「埼玉県秋のプラごみゼロウィーク」を併せて実施。伊豆殿橋からニトリ前（国道254手前）までの用水の流れ、法面、敷並びに遊歩道に放棄されたごみ類の収集、分別を行う。3班に分けて分担する。プラスチックは、県から配布されたごみ袋を利用する。

A班 伊豆殿橋～西分橋 B班 西分橋～ニトリ（国道254手前）

C班 ふるさと新座館横～川越街道手前～新座駅に通じる水路（の一部）

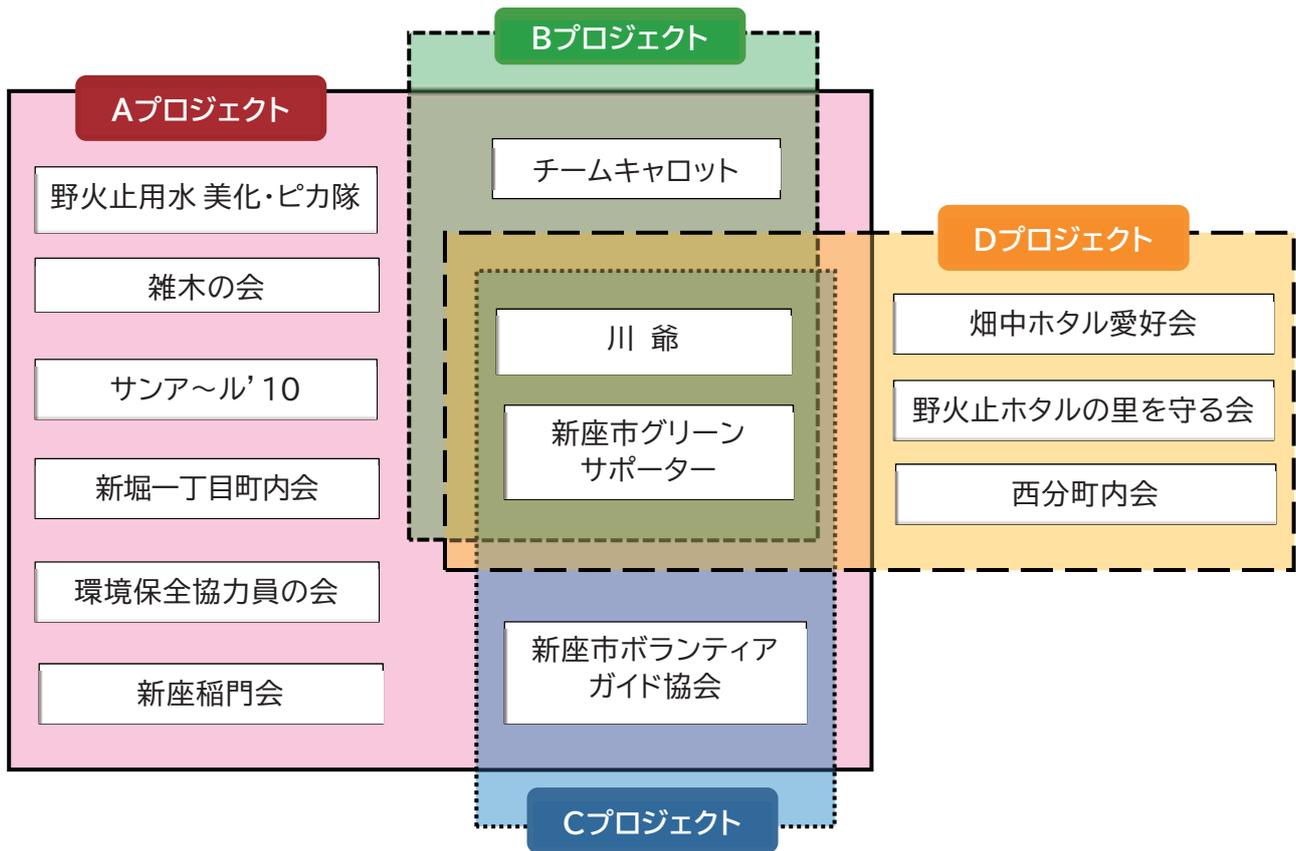
② 剪定グループ

伊豆殿橋から金木犀（現在、ひこばえ観察中）までの用水沿いの紫陽花剪定及び常緑樹の伐採作業を行う。伐採した枝などは、袋にまとめ、新座市が手配した処理業者に渡す。伐採者に数名の補助（枝の袋詰めや周囲の清掃などを担当）がつき、数班で実施する。

(2) 参加団体等の構成

図1は2022年4月現在のHUG ネットの加入団体と各プロジェクトの構成を示している。HUG ネットは2016年度から、4つのプロジェクト（A：自然環境保全 B：子どもの自然体験 C：地域環境に関わる研修事業 D：ホテル再生）により活動を遂行している。プロジェクト方式を採用した狙いは以下の4点である（星野、2019）。

- ①毎年継続的に実施する活動の成果を向上させる。
- ②プロジェクトリーダーや主担当となることで、メンバーの活動に対する主体性を高める。
- ③リーダーやサブリーダーが責任をもって人選を行い、活動に中心的にかかわるメンバーを増やすことで、組織や活動に対する責任感を高める。
- ④HUG ネットの活動をプロジェクトで表すことにより、活動内容や組織の特徴に関する情報発信を活性化させる。



【図 1】 HUG ネット加入団体と各プロジェクトの構成（2022 年）

「HUG ネットクリーンデー」においては、太枠で囲まれた 10 団体、ならびに十文字学園女子大学の学生、教員が参加し、新座市シティプロモーション課の協力をいただいた。また HUG ネットに参加していない一般市民有志が 2 名参加している。特に市民からの参加を募ることはしていないが、日ごろ野火止用水沿いの清掃活動をしていて HUG ネットの今回のクリーンデーのことを知り、参加申し込みをしてくれた。参加者 53 名の内訳は以下の通りである。

- ①HUG ネット団体（10 団体）46 名
- ②十文字学園女子大学（教員、学生）5 名
- ③一般市民有志 2 名



学生が受付を担当し、検温チェックもしっかりと行った。50 人以上の参加者があり、受付業務も多忙を極めた。

野火止用水からごみを引き出しているところ。予想以上にゴミが多く、特にプラスチックごみやペットボトルが多く見られた。



学生は「剪定グループ」に入り、伐採した枝を束ねて袋に入れる作業を行った。見かけよりも体力が必要で大変な作業であったが、地域の方とコミュニケーションを図れる貴重な機会となった。



作業が無事終了したあとの集合写真。お天気にも恵まれ、けがもなく、充実した活動ができた。

(3) プラスチックごみ回収成果

図 2 は、2021 年埼玉県秋のプラごみゼロウィークの成果である。



【図 2】秋のプラごみゼロウィーク（2021）の成果 出典：埼玉県水環境課 HP より

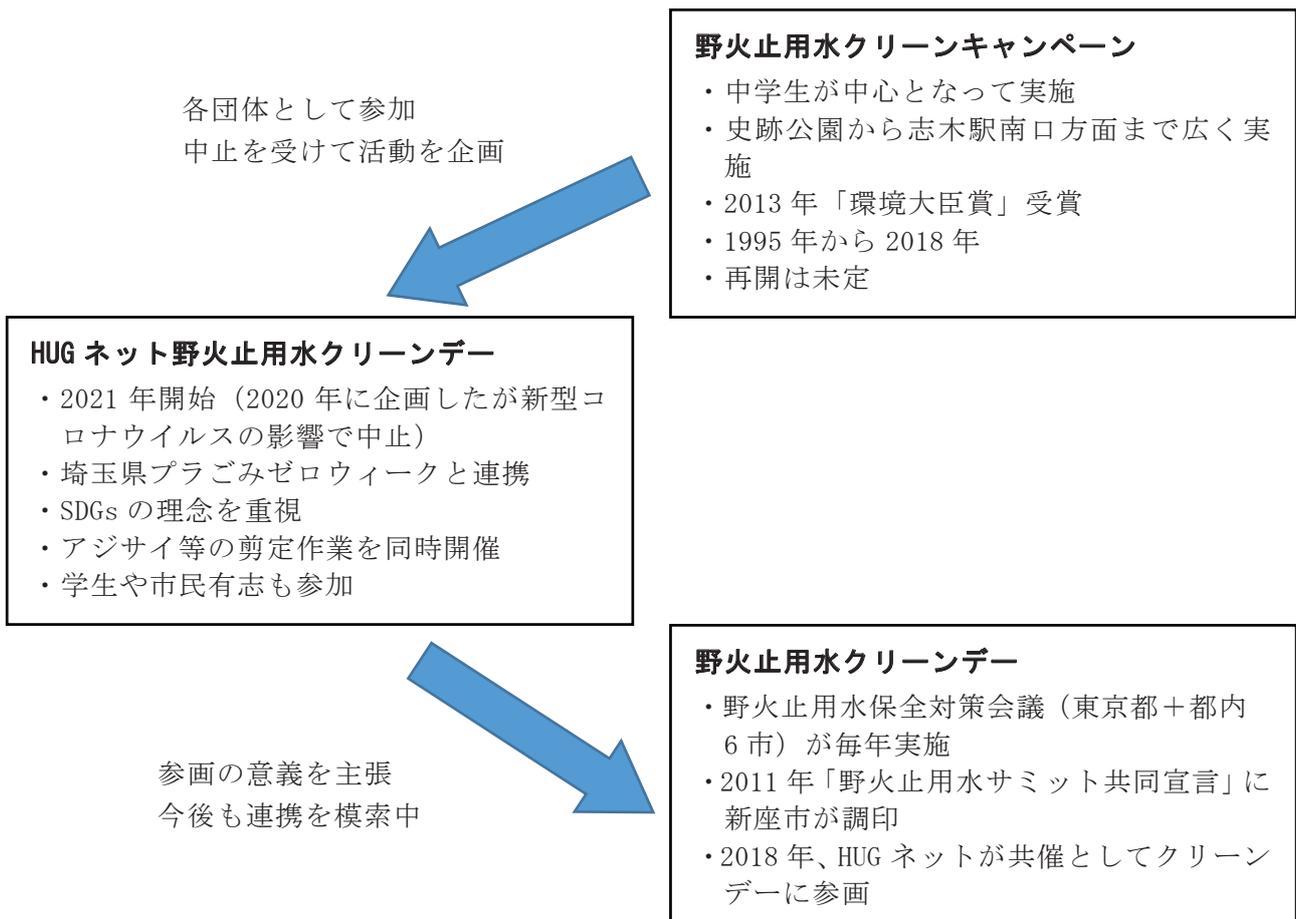
「HUG ネットクリーンデー」の成果は、プラスチックごみ 8 袋、プラスチック以外ごみ 16 袋、不燃ごみ 6 袋、計 30 袋であった。なお、県への登録は HUG ネットとしてではなく、「川爺」として登録している。

6 野火止用水の環境保全における HUG ネット活動の意義

図3はHUGネットの活動と「キャンペーン」「クリーンデー」との関係を示している。HUGネットの各団体は、これまでキャンペーンに積極的に参加していた。その一方で、野火止用水保全対策会議との連携を模索し、クリーンデーに参画すべきであると提案していた。そのような状況において、猛暑やコロナの影響もあり、キャンペーンが中止される事態となった。

HUG ネットは継続的に環境保全活動を実施しており、アジサイ等の剪定やホテルの放流事業に加え、定期的に野火止用水の現状調査を行ってきた。キャンペーンが中断され、野火止用水の環境保全に対する市民の意識が低下すると、ごみが増えるなど環境の悪化傾向も見られたことから、2020年に、市に働きかけを行い、「HUG ネットクリーンデー」開催のための計画を進めていたが、新型コロナウイルスの影響により実施不可となった。このような背景を経て、ようやく2021年に「HUG ネットクリーンデー」が実現したのである。

「クリーンデー」は毎年12月に実施されているため、当初は2021年の「HUG ネットクリーンデー」も、これに参画するかたちで12月開催を予定していた。しかしながら、あえて10月に実施したのは、県のプラごみゼロウィークとの連携をより重視したためであり、またアジサイ等の常緑樹剪定を早めに行い、生態系の保護を図りたかったためである。野火止用水の環境を守ることは、川や海、そして地球の環境を守ることにつながる。これはSDGsとして掲げられた持続可能な開発目標の中の「14 海の豊かさを守ろう」「15 陸の豊かさを守ろう」を意識したものである。



【図3】HUG ネットの活動と「キャンペーン」「クリーンデー」との関係

7 まとめ

野火止用水の自然環境保全において、地域ネットワークとしての HUG ネットの役割は、以下の 4 点にまとめることができる。

- ① HUG ネットが、環境保全に関わる多様な団体により構成されていることで、用水の清掃だけでなく、樹木の整備や生態系保全の視点から活動を企画し、SDGs の実現に向けた活動を展開することができた。
- ② 継続的に観察や保全活動を行っていたため、猛暑や新型コロナウイルスの影響により長年継続された「キャンペーン」が中断されたとき、用水の現状を踏まえて、対象範囲を縮小しながらもクリーン活動を再開することができた。
- ③ 新座市内だけでなく、用水流域の地域を広くとらえてきたことから、「クリーンデー」の取り組みに賛同し、「野火止用水サミット共同宣言」の理念を新座市内の活動に生かすことができた。
- ④ プロジェクト方式により幅広い活動を展開してきたことから、「新座稲門会」のようにこれまで環境保全活動に直接関わっていなかった団体が新加入して活動に参加したり、市民有志が賛同して参加するなど、環境保全に対する啓発活動が成果をあげている。

今後は「HUG ネットクリーンデー」に対し、さらに多くの市民や子どもたちが参画できるように工夫をしながら、SDGs の視点からさらなる活動の展開を図りたい。

本活動は十文字学園女子大学地域連携共同研究所の研究費により実施した。

<参考文献>

- ・埼玉県環境部水環境課、2021「埼玉県秋のプラごみゼロウィーク」
- ・新座市 HP、2019「【記者発表資料】野火止用水クリーンキャンペーンの参加者募集」
<https://www.city.niiza.lg.jp/site/kisyahappyou/kisyah310606.html>
- ・公益社団法人食品容器環境美化協会 HP、2013、第 14 回環境美化教育優良校等表彰
<https://kankyobika.or.jp/env-study-support/hyoushou/no14/saitama>
- ・星野敦子、星野祐子、名塚清、佐藤弘信、2020、地域人材育成と地域環境保全を目指したネットワークの構築、地域連携共同研究所年報 第 5 号、pp39-48
- ・星野敦子、2018、新座市における地域人材育成のための生涯学習制度と地域ボランティアの展開、十文字学園女子大学紀要 48-1、pp255-268
- ・星野敦子、2016、新座市における大学との協働による人材育成— 地域に貢献する人材を育てる—、産学官連携ジャーナル Vol. 12 No. 2、pp20-22
- ・星野敦子、2015、大学と行政の連携による地域人材育成制度の評価、地域活性学会 第 7 回研究大会年会論文集、pp219-222

教職を目指す大学生と表現活動 —総合表現「かたくりの花」収録、手づくり楽器による児童参加型公演の取り組みから—

Arts-based educational research for students, who aim to be a teacher
A recording project of music and lyric expression (at Niiza city),
the concert activities with children by use of self-constructed musical instruments (at Wako city)

久保田 葉子 ¹⁾ Yoko KUBOTA	狩野 浩二 ¹⁾ Koji KARINO	棚谷 祐一 ²⁾ Yuichi TANAYA
川瀬 基寛 ²⁾ Motohiro KAWASE	細谷 忠司 ¹⁾ Tadashi HOSOYA	久保 裕子 ³⁾ Yuko KUBO

1) 十文字学園女子大学・児童教育学科 2) 同・社会情報デザイン学科 3) 同・学生支援課

キーワード：総合表現 ことば 音楽教育 手づくり楽器 打楽器アンサンブル指導

要旨：令和3年度に公開された映像作品「かたくりの花—歌唱・ピアノ伴奏・朗読の構成のための詩—」の制作を通して、教職を目指す学生が表現者・演出家としての視点を育み、詩に登場する言葉やアイヌ語の発音を調べ、総合表現の教材としての魅力を発信した。大学教育に表現活動を取り入れることにより、大学生自身が自己の成長を図り、同時に児童生徒の指導者としての力量を形成することができる。大学敷地内の木材等を再利用した楽器製作（木琴、ケーナ、ウッドブロック、カホン、ウィンドチャイム）及び児童への指導、公共ホールにおけるコンサートの実践においては、児童の意思を尊重した個別最適な指導と、楽器の特性を生かすことを心がけた。企画に携わった教員の立場から、手作り楽器によるコンサートのアンサンブル指導、とくに打楽器アンサンブルの指導における課題とソリューションについて述べるとともに、企画制作に携わった学生、来場者それぞれの視点で地域連携による音楽教育活動を振り返る。

1 はじめに

本学は、包括連携協定を締結している近隣自治体の協力を得て、地域を志向した教育・研究・社会貢献の取り組みを展開している。令和3年度には地域連携共同研究所「音楽による地域文化の活性化」事業として、本学児童教育学科の学生と教職員が、新座市において総合表現「かたくりの花」（よこすかかおる作詩、梶山正人作曲）の収録と動画公開、和光市において楽器製作ワークショップの開催と、手づくり楽器を用いたコンサートの企画制作を行った。教職を目指す学生が作品や素材に向き合い、児童や学内外の人と共に地域文化の創造にかかわることにより、表現力のみならず教科を横断した探求的な学習を構成する力をつけることができた。本研究では、新座市と和光市における二つの取り組みから、教職を目指す大学生が「ことば」「音」「からだ」を用いて他者に自らの考えを伝える表現活動に取り組む意義と、複数の種類の手づくり楽器を用いたアンサンブルを通して学んだ演奏上及び指導法の工夫について報告する。

2 新座市と連携した研究の概要

本学は、平成26年度に文部科学省の「地（知）の拠点整備事業（COC事業）」の採択を受けた。代表研究者の久保田は、この事業の一環として平成27年度からふるさと新座館ホールにてクラシック音楽の演奏と学生による総合表現の発表で構成された「ふるさとにいざ✦オータムコンサート」の企画・演奏に携わってきた。地域を志向した表現活動を継続する中で、地域の歴史や人の活動をテーマに総合表現「野火止の水と緑と」（よこすかかおる作詩、久保田葉子作曲）の創作や、本学が教職を目指す学生のために独自に設定した科目「表現活動（基礎）」の授業（担当：狩野浩二、久保

田葉子)の履修者が、「利根川」(斎藤喜博作詞、近藤幹雄作曲)を発表する機会も得た。表現活動では、学生が自分の個性を知り、他者の良さを見つける力を養い、人と協力して一つのものをつくり上げる過程で成長できるため、筆者は全ての学びの基礎となる活動であると位置づけている。新型コロナウイルスの影響が続き、感染防止の観点からホール使用の際に人数制限等があった令和3年度は、「表現活動(応用)」の授業(担当:狩野浩二、久保田葉子)の履修者を中心とする4名の学生とピアノ伴奏を担当する久保田葉子が、ふるさと新座館ホールで総合表現「かたくりの花」(よこすかかおる作詩、梶山正人作曲)を収録し、動画作品として公開することにした。動画作品の制作は、本学と新座市教育委員会の共催で行われた。

3 研究目的と方法

目的は二つある。一つは「かたくりの花—歌唱・ピアノ伴奏・朗読の構成のための詩—」を大学生が読み込み、解釈し、内面的な美しさが現れる朗読・歌唱・身体表現として記録することで、教材としての魅力を広く伝えることである。「かたくりの花」は、小学校高学年ぐらいの児童にも取り組める作品である。動画を通して児童が表現活動に親しみ、挑戦するきっかけになれば嬉しい。動画を発表するという目標に向かって詩の中身や音楽を研究する過程で、プロジェクトの参加者が成長・変容していく過程の中に表現活動の教育的な意義があると考え、完成作品としての動画の公開だけでなく、探求の過程での気づきや当事者の具体的な行動に注目することにした。

二つ目の目的は、地域に根差す大学の一員として、活動を通して新座市の魅力を発信することである。公共ホール「ふるさと新座館」には美しい音色のSteinway C型のピアノがあり、客席と舞台の一体感が心地よい。また、新座市野寺三丁目には野寺カタクリ山と呼ばれる保全緑地があり、3月末から4月にかけて可憐なかたくりの花を見ることができ、新座市シティプロモーション課が所有する野寺カタクリ山の写真と、個人で撮影した花の写真を用いて、かたくりの花の命をテーマとした映像作品として新座市公式チャンネルと大学ホームページで公開し、ホールに足を運べない方にも見てもらうことは、コロナ禍の文化活動の一つの方法であると考えた。

4 結果と考察

総合表現「かたくりの花」の動画は、ふるさと新座館ホールの技術者曾山一峰氏(舞台)、及川曜子氏(照明)、ピアノ調律師 青木正人氏、録音技師 古山俊一氏、学内関係者の協力を得て令和3年10月2日に収録され、公開することができた。

新座市公式チャンネル(QRコード参照)と本学ホームページにおける再生回数は、令和4年6月28日時点で合計570回である。参加した4名の学生は、「かたくりの花」に取り組む中で、作品に出てくるアイヌの言葉の発音を正確に知りたいと考えようになった。詩の中では生活に使う道具の名前やかたくりの花に関連するアイヌ語のアクセントを平仮名と片仮名を使い分けることで表しているが、正確な発音はネイティブの方かアイヌ語の専門家に音声として教わらないと分からない。そこで、学生の一人が民族共生象徴空間ウポポイ(北海道白老町)に問い合わせ、学芸員である矢崎春菜氏の協力を得ることができた。オンラインを用いた指導で、アイヌ語の音韻や語尾の発音、音節の区切り方、方言、参考となる文法の資料や辞典・図鑑についての助言をいただき、学生は学んだことを自分たちの作品に反映させようと誠実に取り組んだ。新型コロナウイルスの影響で、遠隔授業を取り入れねばならない時期もあり、日常生活で不便を強いられることも度々あったが、学生は進んで遠方の専門家とコンタクトを取って助言を求め、多様なコミュニケーションツールを駆使して学びを深めていた。作品が力を持ち、探求する価値があれば、人はもっと知りたいと思うようになるのだと思うが、学生が真実を知りたいという気持ちを実際の行動に移し、新しい知識を吸収して作品に生かし、仲間と共有できたことに感銘を受けた。ピアノ伴奏を担当した久保田は、動画の撮影を終えた後、かたくりの花への関心が高まり、令和4年4月に、東北(岩手県安ヶ沢、秋田県西木町八津)を訪れ、かたくりの花を撮影することができた。かたくりは種から発芽して花を咲かせるまでに8年ほどの歳月を必要とし、花を咲かせ



るのは一週間ほどの短い時間である。雪解けの北の斜面に健気に顔を出すかたくりの姿、一面に紅紫の可憐な花の群落が現れる様子は、はっとする美しさであった。そして、この景色を前に「かたくりの花」の詩が口から自然と出た時、よこすかかおる氏の詩が事実をそのまま述べているからこそ力を持つのだと理解した。



動画撮影に向けた練習では、言葉の解釈や発音・発声、イメージを育むことに加えて、身体による表現、演出家の視点を持って舞台の空間の使い方を工夫することにも取り組んだ。これは歌唱や朗読よりも学生にとって難しかった。はじめは説明的な動きになり、学生それぞれが似た身体の動きを用いるため単調になりがちであったが、「かたくりの花」で表現したい内容について語り合い、互いに持ち寄った身体表現のアイデアから学び合うことにより、抽象度が高く、見る人が自由にイメージをふくらませることができる表現へと変容していった。大学生のしなやかな美しさ、一生懸命な姿が作品の本質と重なり、魅力的な映像作品となった。今回の取り組みを通して久保田が教員としてまたピアニストとして学んだことは、伴奏者として自分が物語を描写しようとするのではなく、作品自体が語るのを信頼して味わうことであり、共演者である学生の背中を押したりリードしようとしたりするのではなく、学生を信頼して共に呼吸し、音楽と詩の世界をイメージすることである。総合表現「かたくりの花」は、何度取り組んでもその度に新しい興味や学びをもたらしてくれる優れた教材であった。（1－4章 久保田葉子）

5 総合表現「かたくりの花」をめぐって

（作品の成立）

総合表現とは、群馬県島小学校（旧佐波郡島村、現伊勢崎市にあった公立小学校）の校長であった斎藤喜博が、同校において展開した学校づくり運動に端を発するものである。その内容は、主として、身体表現活動の追究にあった。

身体表現とは、学校教育活動の教育課程において取り込まれる朗読や歌唱、ダンスなどのことである。教科目でいえば、国語科、体育科、音楽科などの教科目ごとの教育内容として取り込まれる。その内容を斎藤は、子どもの可能性を開花させるための教育方法として総合的に取り立てた。

斎藤が着目した当初は、リズム表現とか、演劇とか、従来からある表現活動への取り組みによって、小学校の教育課程において、子どもの学習活動を充実させるために取り込まれる¹⁾。それが、次第に従前からの芸術活動の援用では飽き足らずに、教育活動における表現活動の追究へと展開していく。今日では、それらを総称して総合表現と呼称している。

（作品の特質）

総合表現作品「かたくりの花」は、宮城教育大学で教師教育の仕事に従事していた横須賀薫と、同大学附属小学校の音楽専科教員として勤務していた梶山正人によって創作された作品である。横須賀が詩を作り、梶山が作曲をしている²⁾。

特徴の第一は、日本語の詩によって、作品全体が形づくられているということである。短い言葉の中に凝縮された世界が表現される。したがって、この作品を教材化した際には、詩の解釈が必要になる。説明を排した、象徴的な表現によって描かれている作品を具体的な世界として読者は自らの内的イメージとして再構成する。その作業自体が学習となる。国語科でいえば読解である。ある

種の読解作業を必要とするのが総合表現の特徴のひとつである。

第二には、詩を基盤としつつも、そこに音楽が盛り込まれているということである。ピアノによる演奏や歌唱(独唱、二重唱、二部合唱、三部合唱、斉唱)による音楽的な表現が可能になる。詩の朗読として取り扱うこともできるし、あるいはまた音楽的な表現作品としてみることもできるし、その両者の統合された表現作品としてみることもできる。

第三には、詩を基盤とし、音楽が盛り込まれることによって、加えて身体的な表現活動の可能性をひらく。ウォーキング、ステップ、身体の動きなど、表現者が自己の身体を活動させ、それによって表現することを可能にする。詩のことは、音楽の旋律、リズム、ハーモニーなどを手がかりとして、それらに触発されて、身体を十分に動かすことができる。

このように、人間として可能となる表現活動のうち、特別な道具を必要とせずに一身ひとつだけで一取り組めるのが総合表現の特質のひとつである³⁾。

さらには、指導する教師の側にも、上記のさまざまな表現活動に対する“演出”を可能とする。これは、一般的には指導と呼ばれるものである。斎藤喜博はあえて、“演出”と呼ぶ。それは“演出”という芸術活動上の概念を援用することによって、今までにない教育活動の指導展開を期待したからである。いかにすれば子どもが実感をこめた表現活動に取り組めるのか、そのために教師はどうあれば良いのか、そのことの追求の中で導き出したのが演出という概念である。

(表現活動とは何か)

総合表現は、このように洗練され、定式化される芸術活動とは一線を画するものである。特別な訓練を受けていなくともよい。むしろ専門家としての芸術家から特別な訓練や稽古を受けていることはあだになる。例えば、小学校高学年の児童に頭声発声を強制する。これなどは、特に声楽を学んだ教師に多い指導である。例えていえば、ウイーン少年合唱団の声を想像すればよい。表面的には美しい。しかし、本当に実感のこもった表現は出来にくい。

それに対して、まったくの素人でも取り組めるのが表現活動である。むしろ、そうした専門家ではないものが、心をひらき、自己を作品に投影し、自らの意思によって作品を解釈し、表現していくものである。つまり、作品を表現するのではなく、自己を表すのである。

児童生徒は、専門教育を施される対象ではない。あくまでも普通教育の中で表現活動を学ぶ。極端なことをいえば、歌唱においては音程が定まらなくてもよい。音程を気にするあまり、萎縮したり、緊張したりするのは本末転倒である。音程の正確さよりも、その作品を解釈し自己を表現することが重要である。作品を表現するものが、いかに自己をひらいていくか、いかに作品と正対するかということが問題とされるのである。

それが教育活動としての表現活動である。表面的、形式的に、作品の完成度や出来映えを求めることはしない。荒削りであっても、そこに表現者が存在することに意義を見いだす。そして、その作品を表現することによって、表現者自身の成長を促すことにもっとも意を注ぐのである。いわば、教育的な表現活動なのである。

大学生がこの作品に取り組む際には、自らが学習者、表現者として臨むということと同時に、自らが児童生徒の指導者として演出する立場に関わることを想定する。大学生自身が自己の成長を図り、同時に児童生徒の指導者としての力量を形成する。

それに相応しい作品が「かたくりの花」である。例えば、小学校低学年向けに創作された作品には、具体的な場面の描写がリアルに描かれる。それは、小学校低学年の児童が具体的なモノやコトの世界で生きているからである。まだまだ抽象的な世界には入り込めないからである。

それに対して、「かたくりの花」は、全体を通して、抽象的、象徴的な世界として描かれる。具体的なモノやコトではなく、象徴的な世界である。したがって、作品の解釈にあたって、高度な読解力や表現力が必要となる。時には、アイヌ語の表現を解釈するにあたって、専門家の指導をうけるなど、大学生らしい取り組みが生じるのである。(5章 狩野浩二)

6 和光市と連携した研究の概要

平成 28 年に本学と公益財団法人和光市文化振興公社が締結した相互協力協定に基づき、令和元年以降、和光市民文化センターサンアゼリアや小学校、学童クラブ等で児童教育学科久保田ゼミの学生が地域連携による児童参加型の音楽プログラムを企画・発表している。これは地域の児童に音楽の魅力を伝えると共に、教職を目指す大学生が自ら選択した研究テーマで児童への指導法を研究するものである。令和 3 年度には、身近な素材を用いた楽器製作と、手づくり楽器による児童とのアンサンブルに取り組み、令和 3 年 3 月 30 日に和光市民文化センターにてコンサート形式で成果を発表した。

7 研究目的と方法

児童と大学生が器楽アンサンブルで共演するにあたり、楽器や音への愛着を育み、音を聴く/聴き分ける力を伸ばし、音楽に主体的にかかわる場を共に創造する経験ができるように心がけた。教職を目指す大学生には、楽器の特性と参加者それぞれの個性を尊重したアンサンブルの実際を学び、指導者として児童に教える際の工夫や、地域連携によるコンサートの企画制作の力をつけることも目的とした。楽器や音への愛着を育むために自分で楽器をつくることにし、素材は身近な環境から探すことにした。学内外の方の協力を得て、大学敷地内の木材や、ピアノの修理の際に出る廃材等を活用して試作を繰り返し、令和 3 年 10 月 9 日に和光市立広沢小学校にて手づくり楽器のワークショップを開催した。コンサートに向けたリハーサルは令和 3 年 11 月 13 日、令和 4 年 3 月 26 日の 2 回、和光市サンアゼリア企画展示室・展示ホールにて行われた。参加児童は学年も音楽歴も様々であり、複数の楽器（木琴、ケーナ、ウッドブロック、カホン、ウィンドチャイム）を効果的に用いたアンサンブルを目指したことから、選曲、アレンジ、指導法の工夫が必要であった。学生が児童のために作成した資料（楽器製作のための手順書、複数の難易度から児童が演奏するパートを選択できるよう配慮された楽譜、運指表、パート練習用の動画）については本学児童教育学科『児童教育実践研究』第 15 巻第 1 号に掲載されている。本稿では手づくり楽器を用いたアンサンブルの工夫と応用の可能性について、学生と指導に携わった教員両方の視点から記述する。



和光市民文化センター サンアゼリア
イベント案内 2022 年 1・2・3 月号



コンサートのライブ映像
(大学ホームページに掲載)



コンサートのチラシ (表面)
デザイン担当: 川瀬基寛

8 結果と考察

コンサートでは「宝島」の他、ウッドブロックやウィンドチャイムなどを用いた「シンコペイテッド・クロック」、木琴やカホンが活躍する「道化師のギャロップ」、ケーナアンサンブルによる「マリーゴールド」、十文字学園女子大学の学生・府川千紗さんの独唱で「いのちの歌」が演奏された。

「聖者の行進」では、楽器製作ワークショップに参加した児童、本学学生と教職員、来場者が一体となり公演を賑やかに締めくくった。参加者は114名だった。来場者からは、「手づくり楽器の音色の良さにびっくりしました」「参加者が生き生きしていた」「すべての曲目、楽しく自然にリズムに乗っていました。いのちの歌は涙が流れました」「学生から子供への思いやり（かわいいという気持ち）と子供から学生への信頼（安心してついていく気持ち）が溶け合って、楽しい、温かい音が出ていたと思う」「大学の竹を使った楽器。何でも工夫すれば使えるのですね。すばらしかったです。まさに命を吹き込んだという感じです」との感想が寄せられた。



楽器製作とコンサートに参加した学生の感想は以下の通りである。

- ・子供や関係者の皆さんとの関わり方や自分がどうしたいのか、思考を言語化することの難しさを知り、相手の思いや考えを読み取り考えることの成長があった。
- ・子どもには素の自分で接することだと思う。飾って頑張っているというのが子どもにはすぐわかってしまう。素直に自分の気持ちを伝えたり、話すことが大切だと思う。
- ・地域連携による教育プログラムの企画制作で大切なことは、『もしも』を考えて準備をして資料を作ったり、下見をすることだと思う。
- ・地域の協力してくれる人たちの大切さを知った。子供達へのメッセージ性はあったほうがいい。
- ・1つのプロジェクトを数回の打ち合わせや練習によって成功させたことがなかったので、とてもいい経験になった。自分達だけが頑張るのではなく、小学生にも頑張ってもらわなくてはいけないということで、小学生との関わりも重要な点だった。全体を通して誰がどのような動きをするか把握することが出来た。
- ・小学生は楽しいこと、興味があることにはのめり込んでくれるが、逆だと集中力が続かない。どうしたら小学生に楽しんでもらえるかを考えながら企画していった方が上手くいくと思う。
- ・1から作った手作り楽器で演奏を披露して、こんなにもお客さんが笑顔で手拍子してくれる姿を見てこのゼミに入ってよかったと思える日になった。
- ・私たちのやりたいことだけでなく周りの意見を聞いて考えるようになった。音を出す幅が広がったのでもっと音に深みを出すことができると思う。
- ・今回、小学生と共演して、楽器のつくり方やアンサンブルの指導だけでなく、どうしたら分かりやすい説明ができるかを考えながら取り組んだので、人の身になって考えることができるようになったと思う。教職に就いて担任を持ったときに、身近なもので簡単にできる楽器をつくって、アンサンブルをしたり、音楽でいっぱいクラスづくりができるように、今回の経験を生かしていきたい。

学生たちが手づくり楽器で児童や教職員と共演し、一つの舞台をつくり上げたことで達成感を得ただけでなく、教職を目指す学生の視点で語っていることが分かる。地域連携による教育活動の特徴・優れた点として、以下の三つの点が挙げられる。

第一に、学生の「予想する力」が鍛えられることである。教師は児童の発言や発想を予想して授業や教育活動の準備をしていくが、今回のように自然素材でできた楽器の製作とアンサンブルでは、工具を用いるため安全面への配慮が欠かせない。また、複数の楽器・楽曲のリハーサルを同時に行い、参加児童の学年も音楽歴も様々であることを考えると、個別最適な指導のシミュレーションの細やかさが時間内に成果を上げられるかを左右する。楽器にかなりの個体差があり、天然素材が変化することも学生にとっては新鮮であり、予想する力をさらにつける必要性を自覚させた。

第二に、活動にコンセプトとメッセージ性があれば、細部は自ずとついてくるということである。今回の企画名「命を吹き込み響かせよう～My 楽器でつくる音の調和～」は、年度初めに学生全員が案を持ち寄って議論を重ねて選んだが、そこには、身近な人や物を大切にしたい、自分でつくった楽器を演奏することで命を吹き込みたい、周りの人と協働してハーモニー（調和）を生み出したいという願いや意思が込められている。協働主催者、児童、保護者、来場者をはじめ全ての関係者に伝えたいメッセージを持つこと、そしてそれを一生懸命に表現することが活動の推進力となり、学生の自信へとつながる。

第三に、地域の小学生が参加・共演することにより、学生が楽器製作とアンサンブル指導を児童の身になって考えるようになることである。言語/非言語によるコミュニケーションを重ねるうち次第に学生と児童の距離が縮まり、互いの演奏や望みを理解できるようになり、信頼感や親しみが演奏にも現れていた。

次に、楽器製作とアンサンブルの指導者・演奏者としてかわり、学生や児童の活動を支えた特別支援教育専門の細谷忠司教授、編曲・作曲専門でプロデューサーとしても活躍している棚谷祐一教授より、本企画の公演に向けた準備過程と、具体的な仕事の数々を記述してもらうことにする。

（6－8章 久保田葉子）

9 児童教育学科の学生・小学生とケーナアンサンブルを経験して

久保田准教授から手作り楽器演奏の依頼があり、受けたところまでは良いのだが、まだまだ作成も演奏も未熟なため、ケーナの師匠である清水康之氏に指導の依頼をすることにした。ケーナ奏者の清水氏は演奏活動や指導者として活躍するだけでなく、ケーナの製作も行っており、こちらからの依頼を快く引き受けてくれた。

製作の工程は、清水氏が竹を切り、指穴をあけるところまで準備してくださったので、最後に一番重要な歌口の部分を子どもたちが作成することにした。やすりがけは初めての様であったが、見本を見ながら一生懸命に削る子どもたち。楽器というデリケートなものを作るので、腕に力は入りながらもとても慎重であった。0.1 ミリ単位の削りを調整し、見本と同じようになったときには、かなり汗をかいていた。

いよいよ、音を出してみる。すぐ出るわけではないと思っていたのだが、女の子が「ふー」と吹いたら、Gに近い音がいきなり出てみんなで拍手。小6の男の子も張り切るが、こちらは力が入りすぎて、かえって音が出ない。30分以上練習して、酸欠で頭がくらくらするころに力が抜けたのか、音が出始めた。数回の練習では、基本の音出しが中心だったが、少しずつ指使いも覚え、ゆっくりとではあるが、メロディーも吹けるようになってきた。コロナ禍でもあり、吹奏楽器はなかなか練習が進まなかったが、各自が家で少しずつ練習を進め、リハーサルでは、パートを決めてみんなで演奏することができた。

本番当日の朝はかなり緊張しているようであったが、リハーサルを続けることで落ち着いてきたようであった。本番直前、こちらとしては、ドキドキであったが、子どもたちは楽しそうにステージ袖で待っている。「ステージに上がったら、どうやって手を振ろう？」「カメラはどっちかな？」と、発表の機会を楽しみにしているようであった。無事に発表が終わって、お辞儀をした時には、とても良い笑顔が出ていた。秋に作成したケーナが乾燥して、本番の数日前に割れてしまったようである。子どもたちは、慌てずにキラキラしたテープをたくさん張って、オリジナルのかわいいケーナを作っていた。子どもたちのたくましさを感じた体験であった。（9章 細谷忠司）

10 個体差の大きい楽器、学生・児童の音楽歴が様々な本企画で打楽器アンサンブルを魅力的なものにするための工夫について

10.1 活動内容

(1) 活動参加の目的

筆者が「命を吹き込み響かせよう！My 楽器でつくる音の調和」コンサートにおけるアンサンブルの指導に加わったのは令和3年12月からだった。その頃にはすでに廃材等を再利用した打楽器や木管楽器も用意されており、またコンサートの曲目、曲順、各曲での参加メンバーや担当楽器等もほぼ確定した状態であったため、筆者に課せられた役割は私の専門であるところの作曲および編曲の知識・技術を活かしてアンサンブルをブラッシュアップし、よりよい音楽的結果に導くことであった。

(2) 使用打楽器

用意されていた打楽器は以下に記すとおりである。

【A群 廃材等の再利用による手製の打楽器】

A-1. カホン (Cajón) A-2. マラカス (Maracas⁴⁾) A-3. ウィンドチャイム (Wind chime)
A-4. 木琴 (Xylophone) A-5. ウッドブロック (Wood block)

【B群 既成の打楽器】

B-1. アゴゴ (Agogô) B-2. タンブリン (Tambourine) B-3. エッグシェイカー (Egg shaker)

上記のうち、A-4. 木琴は旋律を演奏するため、今回の指導の対象外とする。

(3) 個々の打楽器の特性をアンサンブルに活かすための指導

A-1. カホン

カホンは通常木製⁵⁾の立方体で中空構造になっており、楽器自体に跨って演奏するのが特徴的である。この楽器はドラムセットの簡易的な代替品として用いられることが多い。打面の中心部を叩けば低音が、周辺部を叩けば高音が出せるというカホンの特徴は、低音がドラムセットにおけるキック (バス・ドラム) の役割を代替し、高音が同じくスネア・ドラムを代替し得る。つまりバンドアンサンブルの基本構造を保持しつつアコースティック編成にふさわしい素朴さや、手のひらで叩かれることによる音色の柔らかさをもたらすことがその可搬性と相まって、近年のカホン普及の最大の要因であると筆者は考える。カホンを担当した久保田ゼミの学生、EさんとYさんは (当然であるが) そのようなカホンの特性に対する理解が乏しかったため、当初は楽曲のビートに合わせてなんとなく叩いていた。それでも決して悪くはないのだが、筆者は上記の特性を説明し、ドラムセットをイメージすること、また低音楽器であるチューバとのコンビネーションも意識して低音と高音を叩き分けるよう指導した。加えて、打楽器は発音しようとする音色のイメージが結果を大きく左右することを伝えた。つまり、自分のほしい低音、高音をしっかりとイメージすることによって、自ずと適切な叩き方 (叩く場所、手の使い方、スピード、強さなど) が導かれるということ、これは打楽器に限らずピアノ演奏などにおいてもいえることではあるが、筆者がもっとも強調したかった点でもある。また、適切なリズムパターンについても助言を行った。

A-2. マラカス

マラカスについては教員 (久保田准教授) が演奏し、おおきな問題はないものと判断したためとくに指導を行わなかった。

A-3. ウィンドチャイム

ウィンドチャイムははっきりとしたアタックを持たない連続的な持続音で、楽曲にきらびやかなアクセントを付け加えることができる。一方、曲中で濫用すると飽きが生じやすく、その効果は半減するという特性を持つ。当初、この楽器を担当したYさんは、楽曲構成上のBセクションのなかで演奏していた。これも場面のコントラストを強調するという意味においては正しい使い方であるが、ウィンドチャイムの効果は、たとえばAからBに移行するときの場面転換の瞬間におい

て最大化するため、演奏する位置を B のなかではなく A の最後尾から B の頭にかけてという具合に変更した。それにより、場面転換の効果がはっきりと得られ、より構築的なアンサンブルとなった。

A-5. ウッドブロック

決められたパターンを演奏するだけということもあり、特に問題を感じなかったため指導を行わなかった。

B-1. アゴゴ

アゴゴのような、いわゆるラテンパーカッションは、それらが用いられる中南米のいわゆる「ラテン音楽」のスタイルと強く結びついている。アゴゴもまたそのような楽器のひとつであり、限定的な一定のパターンを演奏することが多い。今回は久保田准教授が担当したが、筆者は演奏パターンについての提案を行った。

B-2. タンブリン

ゼミ生の M さんが担当。当初は曲中でパターンに変化を与えずに演奏されていた。タンブリンは曲中のシーンに合わせて演奏する、休む、パターンを変えるなどの使い分けをすることで楽曲の構造をより明確化することができる楽器であることを説明し、パターンについての提案を行った。

B-3. エッグシェイカー

筆者が担当した。16 分音符のパターンをステディに演奏することで、アンサンブルにおけるテンポの維持、およびビートにおける打点の指標を明確化するという役割を担った。

10. 2 成果

以上の指導により、各自が楽器の機能性を理解し、適切な演奏を心がけることが立体的なアンサンブルを成立させ、より質の高い結果を導くために重要であることが教員と学生のあいだに共有された。各楽器が適切な効果を発揮することは、音楽的成果の向上のみならず参加学生のモチベーションを高めることにも貢献し、学生たちにとっても極めて創造的な体験へとつながった。そのことはコンサート本番におけるいきいきとした演奏、および会場の好反応からも十分に伺うことができる。今回の演奏経験が、彼女たちが社会に出てからのさまざまな困難、課題における『創造的問題解決』への布石となれば幸いである。（10章 棚谷祐一）

11 おわりに

大学キャンパスの竹や附属幼稚園の壊れた椅子など、身近な素材を大切に再利用して楽器としてよみがえらせ、常に児童の身になって楽器製作と演奏の指導にあたり、コンサートで楽器に命を吹き込んだ久保田ゼミの学生を称えたい。

総合表現「かたくりの花」の動画制作と、手づくり楽器を用いたコンサートの開催にあたり、新座市教育委員会、公益財団法人和光市文化振興公社、和光市立広沢小学校、ふるさと新座館ホール、和光市民文化センターサンアゼリアをはじめ学内外の関係者の皆様、参加児童とご家族の皆様より多大なご協力を賜りました。心より御礼を申し上げます。

本活動は十文字学園女子大学地域連携共同研究所の研究費により実施した。

注

- 1) 島小学校の記録によれば、学校公開研究会においてプログラムとして取り上げられており、昭和 31 (1956) 年ころ、同校教師だった船戸咲子によって発案され、児童に指導されたのが、管見の限りにおいて、^{こうし}嚆矢である。
- 2) 昭和 58 年 11 月、一莖書房から、梶山正人オペレッタ曲集として刊行された『かたくりの花』に作品が収められている。あとがきには以下のような解説がある。〈『かたくりの花』は、附属小学校の同僚であった及川勝さんに、クラスの子どものために『利根川』のような朗読と合唱の

入った教材で表現の追求をしたいから、という依頼を受け、横須賀薫氏の詩に、私が作曲をすることになった。昭和 54 年の夏から秋にかけて作曲したものである。及川さんの指導の良さもあって、この作品の追求を通して、子どもたちは、人間として生きていく上での大切なものを獲得しながら、内面的に高まっていった。その指導過程をつぶさに見ながら、私自身、学んだものが大きかった。詳しい解説は、「第Ⅱ期教授学研究 1」に修めている）、同書 108 頁。

- 3) 文章表現活動は、重要な表現活動であるが、しかし、幼児や小学校低学年では、取り組むことが難しい。書くことの指導には、相当な時間と労力が必要であるし、個別的な指導が必要となる点で、総合表現としては取り上げられないことが通常である。教授学研究会が編集した『表現活動』（全 3 巻）教育出版、1998 年においても、わざわざ断り書きをした上で、文章表現活動以外の取り組みを紹介している。
- 4) 単数形では Maraca。通常 2 個を一对として両手に持って演奏するため、複数形の Maracas が呼称として一般化した。
- 5) 木製が一般的ではあるが、使用する木材によっても音色が異なるほか、打面がカーボンファイバー製のものも存在する。また、内部の響き線の種類によっても音色が異なる。今回は参加児童用として代替的に手作りのダンボール製カホンも使用された。

コロナ禍における地域との連携によるオレンジカフェのあり方について(第2報)

About the ideal way of orange cafe in collaboration with the community
under the spread of COVID-19 infection. (Second Report)

山口 由美¹⁾ 名塚 清²⁾ 富井 友子¹⁾ 二瓶 さやか¹⁾ 人見 優子¹⁾
Yumi YAMAGUCHI Kiyoshi NAZUKA Tomoko TOMII Sayaka NIHEI Yuko HITOMI

1) 十文字学園女子大学・人間福祉学科 2) 同・地域連携推進センター

キーワード：地域 高齢者 認知症 つながり カフェ

要旨：2016年度から始めた「地域との連携によるオレンジカフェ（以下、カフェ）実践」に関するプロジェクト研究は、新座市、高齢者相談センター（地域包括支援センター）、薬局、高齢者施設、町内会長、学生との協働により、介護相談もでき、誰でもが参加できる高齢者と介護者の居場所づくりを意識して行ってきた。「認知症カフェ」という言葉を前面には出さずに、高齢者が集える「カフェ」として年2回のペースで継続してきた。2019年度は「カフェ」を開始して4年目を迎え、実行委員が入れ替わったこともあり、「カフェ」のあり方を確認し、①「認知症」について楽しく学ぶ、②地域の方が主体的に行う、ということを確認して2020年度のカフェを開催する予定であった。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大により、カフェを開催することができない状況となったため、リーフレットを作成した。2021年度も2020年度と同様にコロナ禍であり、「カフェ」の開催が困難であったため、「ほっとカフェ」運営委員と協議し、「カフェ」を通してできたつながりを継続していくために、「リーフレット」を作成し、大学近隣の町内会や施設に配布することにした。リーフレットの内容については、学生たちがテーマを決めて地域の方から取材し、執筆した。完成したリーフレットを配布後、リーフレットを読まれた地域の方から学生たちがお話を伺い、感想を得ることができた。

1 はじめに

2016年度より地域連携共同研究所の研究プロジェクトとして「地域との連携におけるオレンジカフェ実践への取り組み」として研究を継続してきた。「カフェ」は大学近隣の自治会会長、薬剤師、管理栄養士、高齢者施設職員、高齢者相談センター職員、新座市職員、学生が協働し運営してきた。

2021年度については、新型コロナウイルスの感染が拡大している状態であり、カフェを開催することができない状況を、メンバーで確認した。

2021年度については、コロナ禍における「カフェ」のあり方及び、どのようにつながりを継続していくのかについて明らかにすることを目的とする。

2 活動内容

（学内会議・運営会議の開催及び、リーフレットの作成）

日 時	会議・作業	内 容
2021年8月	第1回学内委員会会議	・今年度の方向性（リーフレット作成） ・学生スタッフを中心にリーフレット作成を進めることを確認
2021年9月	第1回運営会議（Zoom）	・今年度の方向性及び、学生が取材・執筆等を行うことを確認

日 時	会議・作業	内 容
2021年9月	ほっとカフェ学生募集	・メールで学生スタッフを募集する。
2021年10月	学生との顔合わせ及び勉強会	・学生スタッフの顔合わせ ・「ほっとカフェ」のこれまでの経緯の説明 ・3つのグループ（食事チーム、運動チーム、健康チーム）に分かれ、それぞれがテーマを決定
2021年12月	第2回運営委員会	・リーフレットの部数や大きさ等の確認 ・健康チーム、運動チーム、食事チームから記事にしたいことや協力を得たいことについて報告
2022年1月中旬	原稿提出	
2022年1月下旬	業者との打ち合わせ（教員）	・提出された原稿をもとに、リーフレット印刷用の原稿を作成
2022年2月上旬	原稿入稿	
2022年3月	リーフレット配布	

学生たちがそれぞれで原稿を作成していたため、編集担当教員とデザイナーが、メールで目的や内容について確認しながら原稿を作成してもらうことにした。デザイナーには、統一感を持たせて原稿を仕上げてくださいと依頼した。

3 成果物及び配布先

リーフレットは、B2サイズをMAP折りとし、出来上がりサイズB5判で500枚を作成し（図1参照）、市役所及び協力いただいた施設、町内会に配布した。

図1 完成リーフレット
【表面】



【裏面】



4 成果

リーフレット配布後に、研究メンバーにリーフレットを受け取られた人の反応及び、作成時に関わられたメンバーに意見を聞いた内容は以下の通りである。

Q. 生活に役立つ内容であったか

- ・地元でも知らないこともあり、参考になりました。
- ・お散歩マップが役に立ちそうです。
- ・散歩コースはよかった。散歩道のベンチのある場所を知りたい。
- ・誤嚥予防、食品など役にたった。
- ・お散歩マップが役に立ちそうです。
- ・富士見市から仕事で新座にきています。新座のお散歩マップを見て時間のある時にいろいろと行ってみようと思います。
- ・お散歩マップは写真付きで分かりやすく、新座を知らない方でも「今度行ってみよう」と思ってもらえる内容だったと思います。
- ・安全に食事がとれる体勢や食材がとても役に立つと思いました。身の回りの高齢者の人に教えてあげようと思います。自分もいつか役立てようと思います。
- ・薬剤師さん、管理栄養士さん、歯科医師からの話がとても参考になります。
- ・「お散歩マップ」の「おすすめお散歩コース」の①～⑭平林寺総門までの実際の「お散歩」の記事が役立ちます。
- ・とても役立ちました。地域の方がこんなことに取り組んでいるのだと感心しました。
- ・身近なところから健康のことなどいろいろと知ることができて良かったと思います。
- ・多方面にわたっての記事とても分かりやすく良かったです。
- ・年を取ると食事中よくむせるのは、誤嚥性肺炎の予備群だと思うので注意します。
- ・お散歩マップに参加させていただき、とても楽しかったのでまたよろしくお願いします。
- ・誤嚥性肺炎の予防の記事
- ・口腔ケアの件で、私事ですが偶然歯磨き粉を変えたら歯垢が大変よくなり、歯科医さんにほめられました。ほめられるともっと歯磨きを頑張れるようになりました。
- ・でうら先生の誤嚥性肺炎について 8020運動が推奨されているので、普段のケアの仕方などを教えてもらいたい。
- ・全体的によくまとまった内容でした。
- ・よく目や耳にするワードや内容でしたが、改めてリーフレットとしてまとめてもらえると見やすく参考になりました。

Q. どの記事に関心をもったか

- ・高齢なので健康について興味があります。農家さんの情報にも興味有
- ・お散歩コースに沿って写真などがあり、ちょっと歩いてみようかなという気分になれるのではないかと思います。
- ・平林寺周辺はよく散歩するので参考になりました。
- ・野菜や果物などのお店の紹介
- ・誤嚥を防止する記事。とろみ剤は知らない方も多いと思うので役立つと思います。
- ・おいしいお手頃レシピ 簡単そうで作ってみようと思いました。防災時食も甘いものを食べられるのはありがたいと思います。農家さん、近場にキウイを作っているところやいちご狩りのできる場所があるのは知らなかったの近くにあるんだなあとうれしくなりました。
- ・お散歩マップの記事 普段何気なく歩いたり利用している路にも知らなかったスポットがいくつもあったので、地図・写真をしばらく見ていました。散歩してみたくなりました。

- ・「十文字学園女子大学周辺の農家さんにお邪魔しました」の記事に関心を持ちました。「お散歩マップ」にそれらの場所がイラストされていて、ぜひ行ってみようという気分になりました（歩数が5000～10000歩となるでしょうから）。
- ・ウォーキングマップ
- ・「お散歩マップ」写真付きでとても分かりやすかったです。四季折々の写真もあるともっと興味を持ってみていただけるかもしれませんね。
- ・お散歩マップ わかりやすく参考になりました。
- ・お散歩マップ 自分も新座駅から平林寺まで歩き、ガイドさんのご説明も聞き、地域の良さを知りました。
- ・おいしいお手頃レシピ 簡単プリン 家ですぐに作りたい。
- ・おいしいお手頃レシピ よかったです。
- ・お散歩マップ 高齢者なのでNO.1～NO.14まで1回に行動するのは無理と感じました。半分くらいに分けていただくと参加しやすいと思います。
- ・お散歩マップ 地域の再発見ができました。
- ・「農家さんにお邪魔しました」です。もし購入できるなら収穫時期も知りたかったです。

Q. 今後とりあげてほしい内容

- ・自然関係の情報も
- ・おすすめの飲食店を紹介してもよいのではないのでしょうか。
- ・大学周辺で歩いて回れる場所が知りたい。今回の地図は範囲が広すぎた。
- ・四季それぞれの散策スポット等
- ・新座のおしゃれなカフェや古くからある食堂などの紹介
- ・簡単な手話などとりあげたら、いつかどこかで役立つときがあるかなと思います。
- ・レシピや近場のおすすめスポットを知りたいなあと思います。
- ・高齢の方に役立つ生活しやすくなるようなこと
- ・実際に市民・地域の人が困った体験。それに対してどういう解決策があったのか等
- ・十文字近くの（株）岩崎商店（コンニャク、コンニャクラーメンが注目）の商品が面白いです。ふるさと新座館でも買えますよ。
- ・お食事のお店や栄養について
- ・お散歩のときに立ち寄れるカフェなど飲食店を取り上げてほしいです。
- ・新座市はとても面積が広いので、地域別の記事を載せてほしい。
- ・おいしくて簡単にできる（できれば、高血圧、糖尿病、骨によい）料理の作り方
- ・（地域に）ひとり暮らしが多く、これからは訪ねる予定です。
- ・「にいバス」をつかっていける施設 乗り換え方法など調べて利用方法など調べてほしい。
- ・少子高齢化問題、地域の見守り
- ・地域を運行するバスを利用して市内観光や穴場スポット巡りの案内等はいかがでしょうか。

Q. 今後「ほっとカフェ」で行いたいこと

- ・SNSの予定はありますか。
- ・ゲーム、レクなど
- ・今、料理や何か作るのは無理。目的集れる、日向ぼっこひろばみたいな、懇談するみたいな、入っていくことに意義がある。

Q. その他

- ・リーフレット作成ご苦労様でした。健康・食事・運動をテーマに当地域住民との交流を図るとのことうれしく思います。他地域から通学されている若い学生さんと当地に住む十人が一緒に活動することで相互に活力が湧いてくることを期待しています。

- ・過去の活動にはユニークなものもあり、わかっていれば参加したかったものもありました。今後もユニークなイベントがあればぜひ参加したいと思います。
- ・食事についても記事も自分だけでなく身内や仲間の人たちにも伝えたいと思います。
- ・お散歩マップは、われら住民ならほとんどの人が知っている内容で新鮮味がないですので、参考まで市の観光課が発行している観光ガイドマップ、新座市文化マップ、農産物直売所発見マップ、魅力発見の旅、新座の四季を同封いたします。
- ・旅行や遠出がむずかしい中、身近な興味を持たせる情報をいかに提供するかで外に出てみようと思うきっかけになるのではないのでしょうか。
- ・若いころはいろいろやっていたが今は、指も不器用になるし、頭も回らなくなるが、一緒に何かやりたい。
- ・長年介護に携わっている方の介護についての話を聞いてみたい。
- ・高齢者の方も若い方も子どもたちも年齢関係なく、仲良く楽しく触れ合えたらいいだろうなあと思います。とても見やすくてわかりやすくてためになりました。学生さんが高齢者さんのためにこういう活動をしてきていること、とても素敵で温かいなあと思いました。応援しています。
- ・農家の方おすすめの、育てている野菜のおいしい食べ方、選び方、試食等
- ・本当にコーヒーが飲める「ほっとカフェ」に参加したい。その時農家さんなどの産物が返ると嬉しいです。
- ・体操やウォーキングなど
- ・ご高齢の方でもできる簡単なスイーツづくりなどはいかがでしょう。
- ・今まで「ほっとカフェ」に参加したことがないので、リーフレットを利用していきたいと思います。高齢者向けの健康の話や体操の記事、若者目線で載せていただきたいです。
- ・専門家（特に歯科医）の話が聞きたい。
- ・頭の体操、クイズ等がいいかなと思います。
- ・学生さんが、高齢者と交わることが楽しいと言ってくださり、とてもうれしく思いました。あまり広範囲の活動はできませんが、参加させていただきたいです。リーフレットが見やすく内容もわかりやすかったです。
- ・体操教室 ハイキング
- ・（十文字学園女子大学には）食物栄養学科もあるようなのでワンコイン弁当を商店会の木曜日などに合わせて販売→会食（ひろばで）
- ・土日を利用して公園等で、子どもや年配の方々が交わって遊べるような集まり

5 考察

2021年度は、2020年度に引き続き新型コロナウイルス感染が継続していることもあり、「カフェ」を開催することができなかった。しかし、学生たちが主体的に取材をし、執筆したリーフレットを作成・配布することができた。メンバーは、大学での学びを生かし、原稿を作成した。印刷会社への入稿原稿は、WEB デザイナーに入ってもらい、統一感をもたせ、高齢者の人たちが見やすいリーフレットに仕上げてもらった。

市内の認知症カフェも開催できていない状況が続いている。また、他の地域の認知症カフェの状況などを把握したところ、自治体からの要請で対面のカフェはできていないところも多かったが、少しずつ再開しようとするところも見られる¹⁾。その中でも「つながり」を大切にするため完全オンラインやオンラインを併用し、接触を減らしてカフェを開催している様子がうかがえた²⁾。また、事業所で「常設型」でカフェを行っているところでは、閉めることなく、訪れる介護者などの相談に耳を傾けていた³⁾。

一方、カフェを休止しているところも介護事業所を通じてカフェ参加者とコミュニケーションをとり、カフェという形ではなくても、そこで生まれたつながりを保つようにしていた⁴⁾。

一例をあげると、あるカフェでは、参加者より「ミニ講話、どんなお話だったか、聞きたかった」という意見に対して「外出自粛でつながりが薄れるなか、今できることはないか」とコアメンバーで考え、「カフェ通信」等を作成し、配布していた⁵⁾。これまでつながっている人たちが「また、行きたい」と思ったり、参加したことがない人が関心をもたれるようなリーフレットや「カフェ通信」は効果的である。今年度のリーフレットを見た方からの感想は、肯定的なものが多かったことから、今後もつながりを維持するために、リーフレットまではいかないにしても新聞のようなものを発行して、地域の方のニーズにこたえることも重要である。

2022年5月から、高齢者は4回目のワクチン接種が始まっている。新型コロナウイルス新規感染者数は、第6波から減少傾向にあったが、2022年6月中旬から徐々に増加傾向にある。リーフレットの感想をいただいた方からは、対面のカフェの再開を望まれていることがうかがえるため、2022年度は、「飲食はなし」「定員の見直し」などを検討し、サロン形式の「カフェ」の開催を計画したい⁶⁾。

2021年度からは継続的に活動してくれる学生が数名いるため、2022年度の活動では、カフェの運営やカフェの記録などに学生に主体的に関わってもらうことを期待している。

また、2022年度からは「健幸づくり協働研究所」のプロジェクト研究となるため、研究所で研究される先生方と「協働」し、プログラムを実施できればと考えている。今後も「カフェ」を通して、地域の高齢者が安心して暮らせる地域づくりを目指したい。

<引用・参考文献>

1) 狭山市 オレンジカフェ

https://www.city.sayama.saitama.jp/fukushi/kaigo/ninchishou/ninchishou_family.html
(20220610 閲覧)

2) 厚生労働省 認知症施策関連ガイドライン(手引き等)、取組事例 認知症介護研究・研修仙台センター 外出自粛時の認知症カフェ継続に向けた手引

<https://www.mhlw.go.jp/content/12300000/000692601.pdf> (20220607 閲覧)

3) なかまある コロナ禍、認知症カフェの“存在意義”問い直した「これから会議」第二弾

<https://nakamaaru.asahi.com/article/13602841> (20220607 閲覧)

4) なかまある コロナ禍、認知症カフェの“存在意義”問い直した「これから会議」第二弾

<https://nakamaaru.asahi.com/article/13602841> (20220607 閲覧)

5) 兵庫県民だより 北播磨 11月号 認知症カフェ ウイズ コロナ

<https://web.pref.hyogo.lg.jp/kk03/documents/kitaharima20-11.pdf> (20220607 閲覧)

6) 岩手県 ちいきでつつむ 第28号

https://www.pref.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/003/648/tiikidetu_tumu.28gou.pdf (20220607 閲覧)

健康栄養学科で取り組む超高齢化社会への挑戦

Challenge to a super-aged society undertaken in the department of health and nutrition

相馬 満利 ¹⁾ Mari SOMA	若葉 京良 ¹⁾ Kyohsuke WAKABA	神田 俊平 ¹⁾ Shumpei KANDA	飯田 路佳 ¹⁾ Roka IIDA	木村 靖子 ¹⁾ Yasuko KIMURA
池川 繁樹 ¹⁾ Shigeki IKEGAWA	長尾 昭彦 ¹⁾ Akihiko NAGAO	名倉 秀子 ¹⁾ Hideko NAGURA	高橋 正人 ¹⁾ Masato TAKAHASHI	徳野 裕子 ¹⁾ Yuko TOKUNO
小長井 ちづる ¹⁾ Chizuru KONAGAI	佐々木 菜穂 ¹⁾ Naho SASAKI	林 典子 ¹⁾ Noriko HAYASHI	村田 浩子 ¹⁾ Hiroko MURATA	伊藤 美穂 ¹⁾ Miho ITO
菅原 沙恵子 ¹⁾ Saeko SUGAWARA	林 綾子 ¹⁾ Ayako HAYASHI	近藤 温紀 ¹⁾ Haruki KONDO	小林 亘 ¹⁾ Wataru KOBAYASHI	木下 瑞貴 ¹⁾ Mizuki KINOSHITA

1) 十文字学園女子大学・健康栄養学科

キーワード：地域貢献 アンケート調査 健康課題

要旨：COVID-19の感染拡大の影響によって、生活環境の変化等によって、我々の抱える健康問題は多様化し、心身両面にわたる健康上の問題も深刻化していることから、今後ますますの取り組みが求められる状況にある。こうした現代的健康課題の解決を図るためには、大学、地域社会が連携して、社会全体で健康づくりに取り組んでいくことが必要である。本事業は、健康づくりに関する課題解決のため、地域の実情など、課題解決に向けた計画の策定や、それに基づく具体的な取り組みなど、現代的な健康課題に対応するための体制づくりを推進する。本研究の目的はシニア世代の実態および健康栄養学科における取り組みの現状を把握し、これらの対象者に対する今後の有効な対応方策を検討するための基礎資料を得るための調査を実施することであった。

1 はじめに

現代社会において、世界の平均寿命、健康寿命とも過去最高となり¹⁾、その中で、日本の平均寿命は84.3歳、健康寿命は74.1歳といずれも世界第1位である。今後も日本の高齢化率の上昇は続くことが予測され、2035年には33.4%、2060年には39.9%となる見込みである。そのため高齢化対策の推進は重要な健康政策上の課題である。

また、COVID-19の感染拡大の影響や、生活環境の変化等によって、我々の抱える健康問題は多様化し、心身両面にわたる健康上の問題も深刻化していることから、今後ますますの取り組みが求められる状況にある。さらに、地域があって暮らしが成り立ち、地域があって健康が成り立つというように、人々の健康状態は、日々生活している地域社会に大きく影響される。個人の健康づくり活動を高めるとともに、家族ぐるみ、地域ぐるみへと健康づくりが広がることが大切であると同時に、家族や地域で取り組める健康づくりの重要性もうかがえる。地域の活動に参加をすることや仲間づくりの大切さなど、地域の「人との関わり」が健康づくりに必要な要素である。「シニア健康教室」では、参加者の視点に立った活動や健康を意識した参加者の自己決定への支援などを大切にしている。個人の健康づくりへの支援と同時に、大学、地域社会が連携して、社会全体で健康づくりに取り組んでいくためにも、シニア世代の主体的な活動が行われるように、今後も学生および組織の育成や交流を図り、参加者の主体的な健康づくりの活動がさらに積極的に進められるよう支援していきたい。

人生100年時代突入に、できるだけ多くの方が長く健康に活躍できる社会を作るため、まずは、十文字学園女子大学の近隣地域から協力して予防・健康づくりを拡大し、地域連携・活性化につな

げたい。また、健康栄養学科の特性を生かして、近隣地域に住む高齢者の食と運動への意識を変え、健康寿命の延伸につなげていくことを目的として、長期にわたって地域の健康づくりに寄与できる事業として、確立していくことを目指していきたい。

「シニア健康教室」の最大のテーマは健康の保持・増進、つまりヘルスプロモーションであり、目的は参加者の方々のQOLを高めることである。そうした思いから始まった「シニア健康教室」での取り組みは「いつまでも若々しく、元気で」をスローガンに健康・栄養・運動などについて一人ひとりの行動変容を支援する環境づくりを推進している。平成27年にスタートし、今年で7年目を迎えた。超高齢化社会を迎える日本で特に運動の促進を進めていく必要があり、十文字学園女子大学発の健康づくりを推進する起点として、健康でいきいきと幸せに、長生きできる社会の実現に少しでも貢献していきたいという思いで今日に至る。本稿では、2021（令和3）年におけるプロジェクト活動について報告するとともに、「シニア健康教室」を通して、参加者の方々に「栄養」・「運動」・「食文化」を3本柱に情報を提供し、人と人がつながり、参加者の主体的な支え合いを育み、暮らしに安心感と生きがいを生み出し、地域社会に豊かさをもたらす「地域共生社会」の実現に向けた取り組みを目指して、参加者同士が支え合い、自信を持って、楽しく健康づくりに取り組めるような「シニア健康教室」を実施していく必要があり、本報告書がその一助となることを願うものである。

2 アンケート調査実施の概要

(1) アンケート調査の目的

COVID-19の感染症拡大による多方面からの制約で、我々も研究・教育・大学運営・社会貢献のあらゆる活動のあり方を再検討し、再構築する必要に迫られた1年であった。不測の事態への対応が常態化する日々のなか、当初は悪戦苦闘していたが、令和4年度に向け、行動が制限され、感染への不安を感じる中、自分や家族・身近な人たちの健康を守るために、いま我々に何ができるのか。どうしたら、運動を楽しく効果的に続けられるか日々模索した結果、「シニア健康教室」をよりよくするため、参加者の実態および健康栄養学科における取り組みの現状を把握し、これらの参加者に対する今後の有効な対応方策を検討するための基礎資料を得るための調査を実施することとした。

「シニア健康教室」はやむを得ずすべて中止としたが、対象者に対する今後の有効な対応方策を検討するための基礎資料を得るために、アンケート調査を実施し、あわせて、自宅でもできる簡単な運動を収録したDVDを同封した。地域の健康問題やそれに対する課題、参加者のニーズ、あるいは既存のデータから読み取れること、調査によって明らかになったことなどから、健康問題を抽出し、「シニア健康教室」の根拠を明確にして、健康課題を設定し、方策を検討し、企画内容を決めていきたい。

(2) アンケート調査の対象および方法

対象は、これまでに「シニア健康教室」に参加していただいた参加者名簿にある50代～80代の近隣地域（新座市民52名、所沢市民20名、清瀬市民7名、練馬区民1名）に住む80名とした。

アンケート調査票を作成し、質問用紙に直接書き込む形式で回答を求め、郵送調査法（郵送配布一郵送回収）により回収した。調査期間は令和4年2月28日（月）より令和4年3月31日（木）までを回答期限として回収した。

(3) アンケート調査の概要（調査項目）

本アンケート調査を通じ、「シニア健康教室」の運営やプログラム内容、またその効果などについて現状を把握しておくことにより、シニア世代のかかえる健康課題に対し、学科としての有効な対応方策の構築を検討するための基礎資料を得る意義がある。アンケート調査票の項目は、「シニア健康教室」に対する意見や要望（健康に関する現状と課題など）について、同封した簡単な運動を収録したDVDの感想などであった。

なお、DVD の収録内容は以下の通りである。

- ① リラックスエクササイズ
- ② ソフトボール体操（スローイング編）
- ③ ソフトボール体操（バッティング編）
- ④ 1分間 わくわく体操
- ⑤ 1分間 脳トレ体操



3 アンケート調査結果

(1) アンケートの回収と有効回答

アンケート調査票の回収状況は以下のとおりであった。80名にアンケート調査票を郵送し、49名から回答を得た。回収率は61.3%であった。なお、昨年度の調査より、0.5%回収率が減少した。

(2) 参加者の方々からの声

以下、毎年参加いただいている参加者のうち、5名のコメントを紹介する。

< A氏 >

DVDを通し、楽しく身体と頭を動かすことができました。ありがとうございます。

DVDは、自分の都合のよいタイミングで観ることができ、また理解できない箇所をくり返し再生し、確認できるメリットがあり良いツールだと思いました。

今回の内容もリラックス・ストレッチ・リズム等の体操と脳トレが盛り込まれていて良かったです。ソフトボール体操は新鮮でした。初めて出会う体操で特に左バージョンが難儀しました。私達高齢者は、体力・認知機能の維持を切に願っています。特にコロナ禍で活動が制限されている昨今、自分も含め周囲の高齢者の体力・気力が落ちていると感じています。そのような折、「健康教室」が実施の方向で検討されている旨をうかがいとても嬉しく、是非実施して欲しいと思います。

< B氏 >

DVDを見る機械がなく、残念です。プログラムは従来通り（コロナ前）、座学と運動をセットでご指導していただきたく思います。座学では「音楽がもたらす体操の効果」、体操では「落ちてきた筋力を少しでも取り戻す運動」、「リンパケア」等を学びたいです。1日も早く開催して下さい。楽しみにしていますのでよろしくお願いします。

< C氏 >

ご丁寧なお手紙、DVD有難うございました。

なつかしい先生方の体操を拝見して楽しく見させていただきました。私は現在、自宅近くで（屋外）毎日行なわれている「中国健康体操」に参加して体を動かしています。コロナ禍ではあっても、やはり体を動かさないと心身共に弱ってきました。参加者の皆様と会えるのが楽しみです。

< D氏 >

家で黙々とストレッチやラジオ体操をやっているのとは違い、一同に会し笑い合いながら動くことがいかにメンタル面にもプラス効果大であったとつくづく感じました。

私共にとって、指導して下さる先生方には申し訳ありませんが、運動の技量を高めるよりも動ける楽しさを共有できることの喜びが大きいのかもしれません。

今後どういう形であれ、また直接お目にかかり、対面でのご指導頂ける日を心待ちにしております。それまでDVDで先生方のお顔を見ながら、お声を聞きながら体操し、フレイル予防に務めていきます。

< E氏 >

「寝たきり」にならずに100才を目指す為に試行錯誤しながら生きています。そこに「栄養の事」「運動の事」を研究して下さいる若い方々に感謝です。この頃では私達は恵まれた老人世代だとさえ思っております。私自身は音楽に合わせて体を動かすことが好きですが、80才の夫は照れ臭いようにエアロビクスのような体操が良いといつも言っております。家以外の場所で体を動かす事を願っています。講義内容はとても役立っています。最後に質問時間が少し欲しいと思います。頭と体も「はじまるぞ!!」と意気込んでおります。よろしくお願い申し上げます。

4 さいごに

「シニア健康教室」の目標は、ひとりひとりが自分の体の状態を知り、自分の健康に関する情報を自らが得て理解し、健康的な生活習慣を身につけ、健康を保持・増進するためにセルフケアとセルフコントロールができることである。また、健康の保持・増進にむけて対象者が行動変容を起こすことにある。そのためには、以下のことを促す必要があると考える。

- ① 知識の習得・理解：対象者が正しい知識や理解をもつこと
- ② 態度の変容：健康行動を起こそうという気持ちになること、起こすこと
- ③ 行動変容とその維持：日常生活での健康生活の実践と習慣化

行動やライフスタイルは個人の考え方や価値観、文化、社会的背景や生活環境などの様々な要因に基づいて長年構築されてきているものであり、行動変容を起こす意志があるうえで、その人の生活に合った条件や環境に沿って実施する必要がある。個人の行動の維持や新しい行動の開始、中断、変化などにはさまざまな要因が影響し合っている。このことから引き続き、地域の健康づくりの核となる人の育成および支援として、健康づくり支援サポーターとしての活動を支援し、育成に努め、地域での健康づくり活動を実践する学生を増やし、実践力を身につけていきたい。また、「栄養」「運動」「食文化」を3本柱に「健康長寿」「生涯活躍」へ繋げていけるよう、超高齢化社会への挑戦を続けていきたい。

新座市の健康長寿に向けた取り組みとその評価に関する地域連携研究 第3報 コロナ影響下での高齢者の心身の健康(2)

The evaluation study of the community activities aiming health and longevity in Niiza City
The 3rd report - Physical and mental health of aged people under COVID-19 (2)

加藤 則子¹⁾ 志村 二三夫²⁾ 吉田 亨³⁾ 長澤 伸江⁴⁾ 井上 久美子⁵⁾
Noriko KATO Fumio SHIMURA Tohru YOSHIDA Nobue NAGASAWA Kumiko INOUE

國井 大輔⁵⁾ 布施 晴美⁶⁾ 富井 友子⁷⁾ 名塚 清⁸⁾ 横山 徹爾⁹⁾ 藤田 誠一¹⁰⁾
Daisuke KUNII Harumi FUSE Tomoko TOMII Kiyoshi NAZUKA Tetsuji YOKOYAMA Seiichi FUJITA

- 1) 十文字学園女子大学・幼児教育学科 2) 同・学長 3) 同・研究担当副学長・人間福祉学科
4) 同・国際栄養食文化健康研究所 5) 同・食物栄養学科 6) 同・心理学科 7) 同・人間福祉学科
8) 同・地域連携推進センター 9) 国立保健医療科学院・生涯健康研究部 10) すこやか食育エコワーク

キーワード：健康長寿 健康づくり教室 効果判定 コロナ影響下

要旨：健康のまちにいざ推進事業「にいざ元気アップ広場」の効果評価のための調査を2018年に行い、コロナの影響を見るための追跡調査を2021年2月に行った。今回2回の調査結果についてID番号をたよりに突合し、変化に影響を及ぼす背景要因を検討した。事業参加によって生活習慣の取り組みがあった例や、事業に毎回参加した例ほどコロナの影響により健康度の悪化が大きく、コロナによる事業の中止による影響が浮かび上がった。

1 背景と目的

地域において高齢化が進む中で、生活習慣病やそれに伴っておこる寝たきりや認知症等の増加が問題となっている。健康日本21(第2次)を背景に、新座市では第2次いきいき新座21プランが策定され、様々な取り組みが精力的に展開されている。新座市健康福祉関連4課の課長・副課長から取り組みの効果についての客観的評価に関するニーズを吸い上げたところ、介護保険課から、介護予防・生活習慣病予防・健康増進のための地域の健康づくりを目指した、健康のまちにいざ推進事業「にいざ元気アップ広場」の事業評価の要望があった。

「にいざ元気アップ広場」は65歳以上で健康増進に関心のある市民を対象とし、内容は新座市民総合大学「健康増進学部健康づくり学科」修了生が「にいざの元気推進員」としてインストラクターを務め、チェアエクササイズを中心に行っている。市内20か所の集会場等の会場で、月1回か2回実施されている。保健師等による健康増進ミニレクチャー(ワンポイントアドバイス)も同時に行う。

2018年から2019年にかけて「にいざ元気アップ広場」参加者に調査票と返信用封筒を手渡し、自宅で回答し、郵送によって返送してもらい総計259例からの回答があった。

参加者のほとんどが女性で、すでに繰り返し事業に参加しているという参加者の特性が浮かび上がった。質問紙調査では、参加によって知識や意識がある程度変容していることも分かった。参加者はそれ相応の健康度であることが示唆された。

259例中196例から追跡調査への同意と、突合のための住所の回答が得られた。本学教員有志が介護保険課課長・副課長を交えて意見交換を行ったところ、追跡調査の了解が得られた。当初の計画では、「にいざ元気アップ広場」に先般の調査後に再び来た人々を対象に追跡調査を行うものであった。追跡調査に協力いただける方に、住所を記入いただき、複数回の調査結果を突合しようとしたものであった。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で 2020 年 4 月「にいざ元気アップ広場」が中止となり、当初の計画が変更となった。コロナ影響下での生活の変化により高齢者の健康状態が悪化し、「にいざ元気アップ広場」の中止がその影響をより大きくしている懸念があった。これに従って企画された追跡調査内容と、住所に調査票を郵送するという調査方式について、2020 年 11 月、市の介護保険課から承諾を得た。

第 1 回調査と第 2 回追跡調査のデータを用い、コロナ前とコロナ影響下の 3 時点の健康状態や行動の推移を集計し、健康度の変化に関連する因子の検討を行った。

2 対象と方法

第 1 回調査は、2018 年から 2019 年にかけて「にいざ元気アップ広場」参加者に調査票を配付し郵送での返信を行い、259 例からの回答があった。

第 2 回調査は、「にいざ元気アップ広場」参加者で追跡調査に対する同意のあった 196 例のうち、重複と住所不明瞭のものを除いた 192 例に対し 2021 年 1 月に調査票を郵送にて配付し、2 月 10 日を投函締め切りとして記入済み調査票を郵送回収した。調査内容は、「にいざ元気アップ広場」中止直前と最近 1 か月の健康状態について、ミニレクチャーの内容のうち、コロナ下で役に立ったもの、「にいざ元気アップ広場」再開の希望とその条件等であった。132 名から返信があり、無回答 2 名、死去 1 名を除いた 129 名から回答が得られた。

第 1 回の調査時点、コロナの影響で「にいざ元気アップ広場」が中止となる直前の 2020 年 3 月、そして第 2 回調査における最近 1 か月の 3 点の状況を連続的に見られる項目は、「健康状態は良好だ」「生活に満足している」「睡眠が充分にとれている」「ストレスは解消できている」「趣味や稽古などの生きがいがある」「毎日 3 食しっかりと食べる」「1 日 1 回以上外出する」の 7 項目であった。

該当の 7 項目すべてが無回答であった 1 例は除いた。分析対象は 128 名であった。

健康度は [健康状態は良好だ]、[生活に満足している]、[睡眠が充分にとれている]、[ストレスは解消できている]、[趣味や稽古などの生きがいがある] の 5 項目への回答に対する得点を「そのとおりが 1、「ややそうだ」が 2、「ややちがう」が 3、「ちがう」が 4 とし、その合計を算出した。

1 項目でも無回答があるものは得点合計処理から除いた。合計得点は高い方が健康度が悪い状態である。

【コロナ前】と【最近】の 2 時点の健康度の差は、【コロナ前】より健康度が減少したのは 4 名、変化なしは 23 名、増加したのは 88 名であった。

健康度が改善もしくは不変だったグループ (27 名)、増加が 1~3 点と少ないグループ (44 名) 及び増加が 4 点以上と多いグループ (44 名) に分け、第 1 回調査の時に調べた背景因子に関する調査項目との関連をみた。

本研究は十文字学園女子大学研究倫理委員会の承認 (2020-014) を得て行った。

3 結果

3. 1 3 時点の健康状態の変化

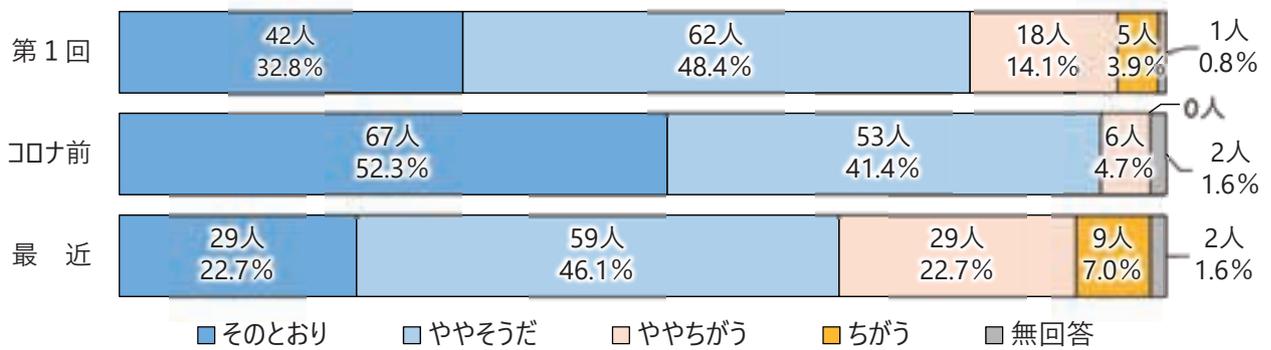
2018 年 3 月頃の調査時点を【第 1 回】、2021 年 2 月の追跡調査項目にある最後に元気アップ広場に参加した 2020 年 3 月頃の時点を【コロナ前】、追跡調査項目にある最近 1 か月間の時点を【最近】とした。健康状態や行動について、「そのとおりが 1」「ややそうだ」「ややちがう」「ちがう」の 4 段階で評価している質問項目から、3 時点で共通する 7 項目で比較した。

(健康状態の変化を比較した質問項目)

No.	質問項目
1	健康状況は良好だ
2	生活に満足している
3	睡眠が充分にとれている
4	ストレスは解消できている
5	趣味や稽古などの生きがいがある
6	毎日3食しっかり食べる
7	1日1回以上外出する

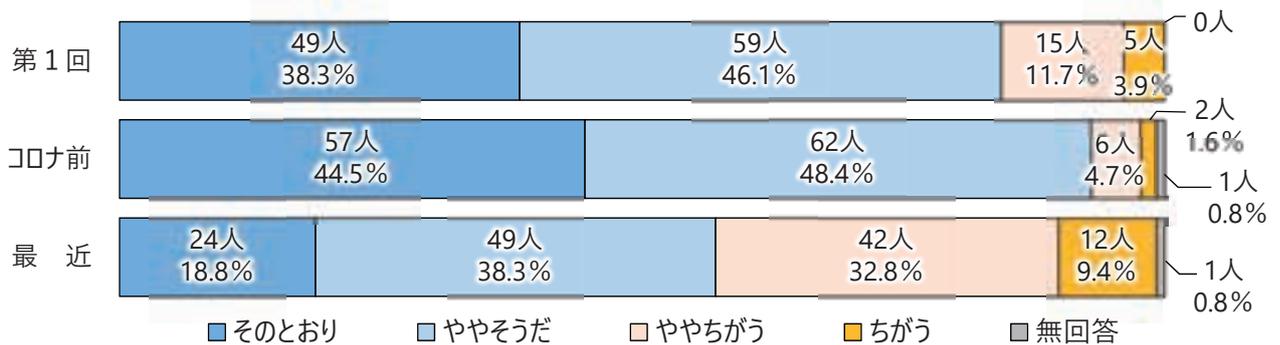
凡 例		
	調査時点	調査区分
【第1回】	2018年3月頃	第1回調査
【コロナ前】	2020年3月頃	第2回調査
【最近】	2021年1月頃	

Q 1. 健康状態は良好だ



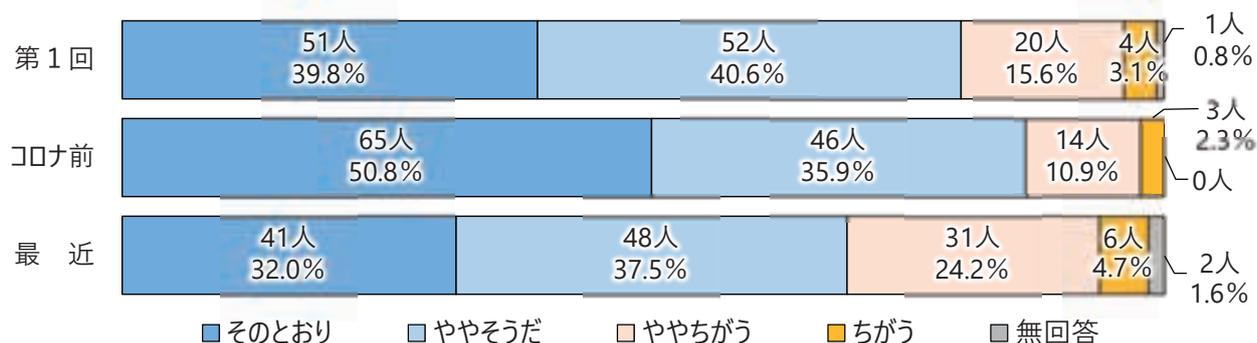
「健康状態は良好だ」という間に、「そのとおり」と回答した人は、【コロナ前】は67名(52.3%)で半数を超えていたが、【第1回】は42名(32.8%)、【最近】は29名(22.7%)であった。

Q 2. 生活に満足している



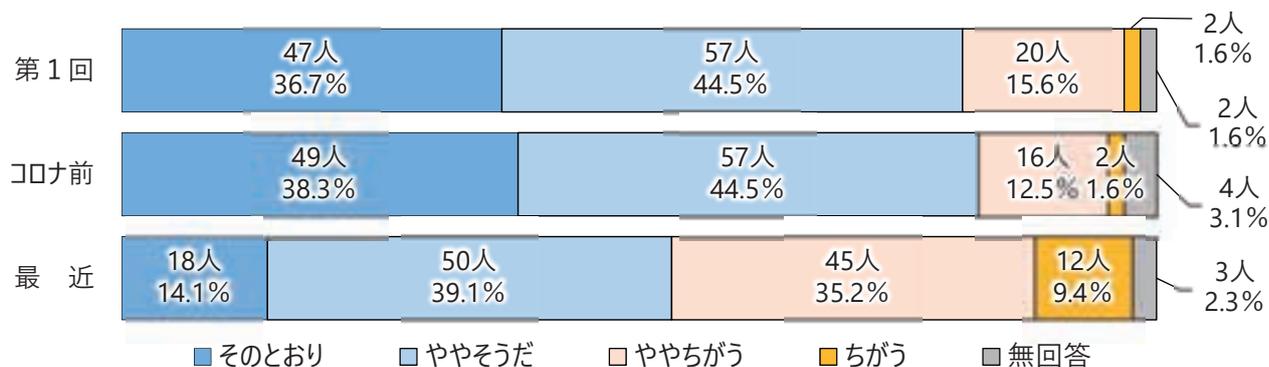
「生活に満足している」という間に、【コロナ前】は「そのとおり」57名(44.5%)と「ややそうだ」62名(48.4%)の回答を合わせると9割を超えていた。【第1回】でも「そのとおり」49名(38.3%)と「ややそうだ」59名(46.1%)の回答を合わせると8割を超えていたが、【最近】では「そのとおり」24名(18.8%)と「ややそうだ」49名(38.3%)で6割に達していなかった。

Q 3. 睡眠が充分にとれている



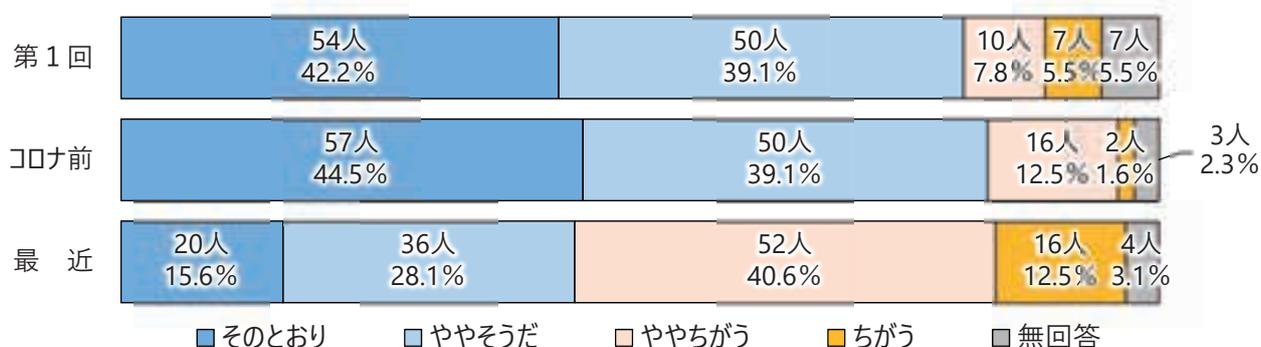
「睡眠が充分にとれている」という問に、「そのとおり」と回答した人は、【コロナ前】は65名（50.8%）で半数を超えていたが、【第1回】は51名（39.8%）、【最近】では41名（32.0%）であった。

Q 4. ストレスは解消できている



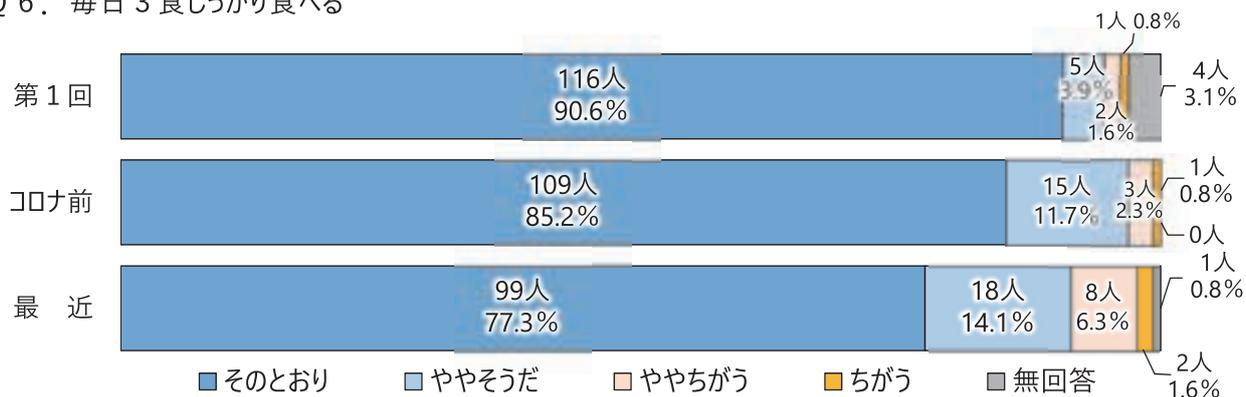
「ストレスは解消できている」という問に、【コロナ前】は「そのとおり」49名（38.3%）と「ややそうだ」57名（44.5%）であり、【第1回】も「そのとおり」47名（36.7%）と「ややそうだ」57名（44.5%）で、どちらも二つの回答を合わせると8割を超えていたが、【最近】では「そのとおり」18名（14.1%）と「ややそうだ」50名（39.1%）で6割に達していなかった。

Q 5. 趣味や稽古などの生きがいがある



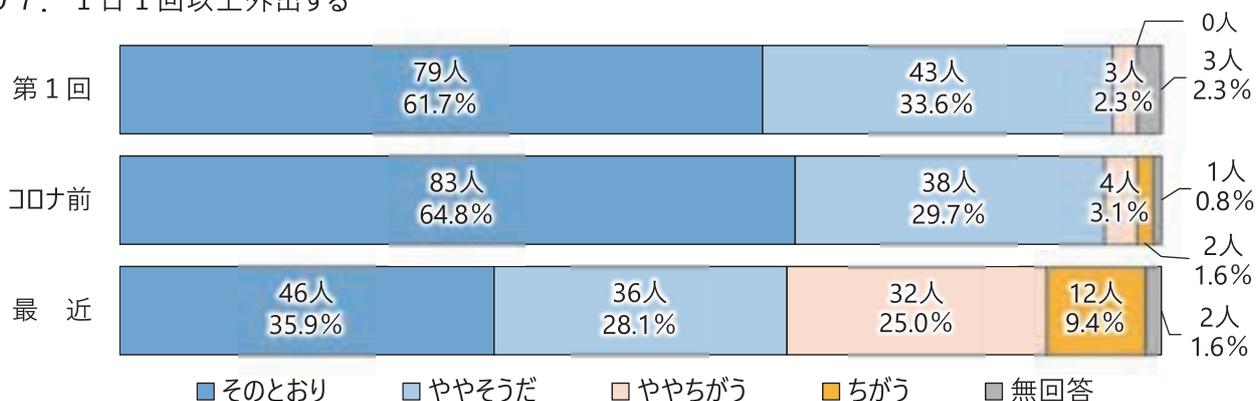
「趣味や稽古などの生きがいがある」という問に、【コロナ前】は57名（44.5%）、【第1回】は54名（42.2%）が「そのとおり」と回答したが、【最近】では「そのとおり」が20名（15.6%）であり、「ややちがう」52名（40.6%）の方が多かった。

Q 6. 毎日3食しっかり食べる



「毎日3食しっかり食べる」という間に、「そのとおり」と回答した人は、【コロナ前】は109名（85.2%）、【第1回】は116名（90.6%）と8割以上であったが、【最近】は99名（77.3%）であった。

Q 7. 1日1回以上外出する



「1日1回以上外出する」という間に、「そのとおり」と回答した人は、【コロナ前】は83名（64.8%）、【第1回】は79名（61.7%）と6割以上であったが、【最近】は46名（35.9%）と4割に達していなかった。

3. 2 健康度の変化と関連因子

健康度合計得点	第1回	コロナ前	最近
平均値	9.15	8.23	11.38
標準偏差	3.12	2.70	3.50
中央値	9	8	11

3時点での健康度合計得点は、平均値、中央値とも【最近】が高い得点であった。

性別	不変・改善	悪化（1～3点）	悪化（4点以上）	計
男性	2（13.3%）	7（46.7%）	6（40.0%）	15（100.0%）
女性	24（24.2%）	37（37.4%）	38（38.4%）	99（100.0%）
計	26（22.8%）	44（38.6%）	44（38.6%）	114（100.0%）

〔性別〕では、4点以上の悪化のある割合に男女差はあまりなく、全体として差は有意でなかった。

年齢	不変・改善	悪化（1～3点）	悪化（4点以上）	計
75歳未満	9（21.4%）	14（33.3%）	19（45.2%）	42（100.0%）
75歳以上	18（26.9%）	25（37.3%）	24（35.8%）	67（100.0%）
計	27（24.8%）	39（35.8%）	43（39.4%）	109（100.0%）

〔年齢〕では、75歳未満に4点以上悪化した場合が比較的多く（45.2%）、75歳以上で不変・改善の場合が比較的多かった（26.9%）。全体として差は有意でなかった。

家族構成	不変・改善	悪化（1～3点）	悪化（4点以上）	計
一人暮らし	5（16.7%）	12（40.0%）	13（43.3%）	30（100.0%）
夫婦二人	12（26.1%）	16（34.8%）	18（39.1%）	46（100.0%）
子どもと同居	8（26.7%）	13（43.3%）	9（30.0%）	30（100.0%）
その他	2（25.0%）	3（37.5%）	3（37.5%）	8（100.0%）
計	27（23.7%）	44（38.6%）	43（37.7%）	114（100.0%）

〔家族構成〕では、一人暮らしで不変・改善の割合が少なかった（16.7%）。全体として差は有意でなかった。

生活習慣の取り組み	不変・改善	悪化（1～3点）	悪化（4点以上）	計
ある	18（18.8%）	36（37.5%）	42（43.8%）	96（100.0%）
ない	6（37.5%）	8（50.0%）	2（12.5%）	16（100.0%）
計	24（21.4%）	44（39.3%）	44（39.3%）	112（100.0%）

〔生活習慣の取り組みの有無〕は、元気アップ広場に参加するようになってからの生活習慣の取り組みがあるかを質問しており、運動面・食事面・健康管理面のいずれかで何か取り組みをした人を有としている。取り組みを行った場合4点以上の悪化が多く（43.8%）、取り組みを行わなかった場合不変・改善が多く（37.5%）、全体として差は有意であった（ $p < 0.05$ ）。

広場 参加状況	不変・改善	悪化（1～3点）	悪化（4点以上）	計
毎回	20（22.0%）	33（36.3%）	38（41.8%）	91（100.0%）
それ以外	7（31.8%）	10（45.5%）	5（22.7%）	22（100.0%）
計	27（23.9%）	43（38.1%）	43（38.1%）	113（100.0%）

〔参加状況〕は、第1回調査（2018年3月頃）から元気アップ広場の開催が中止になる（2020年4月）までの間の参加状況である。毎回参加の場合4点以上の悪化が多く（41.8%）、そうでない場合不変・改善が多かった（31.8%）。全体として差は有意でなかった。

4 考察

生活習慣の取り組みは、第1回調査票で「参加してからの変化について」、元気アップ広場に参加するようになって、生活習慣で何か取り組み始めたかを質問している。具体的な質問項目は、運動面（以前より歩くようになった、新たな運動に取り組んだ）、食事面（間食を控える、塩分を控える、糖分を控える、油脂（油分）を控える、カロリーを気にする、栄養バランスに配慮する、その他）、健康管理面（検診を受けた、体重測定、血圧測定、禁煙、節酒・禁酒、その他）である。元気アップ広場がきっかけで様々な取り組みを始めてきた人ほど、開催されない状況を受け、健康度が有意に低下したのではないかと思われる。元気アップ広場が健康度を保つ役割を果たしていたのだと推察される。

また、有意差は無かったものの、元気アップ広場の参加状況においても、参加が毎回あった場合ほど健康度がより悪化していることが分かり、同様の状況が推察される。元気アップ広場が健康度の改善に有効であったこと、そして中止の影響による悪化が著しかったことが浮き彫りにされた。

<参考文献>

- ・加藤 則子, 志村 二三夫, 長澤 伸江, 井上 久美子, 布施 晴美, 横山 徹爾 地域における健康づくり事業の評価に向けての予備調査結果 第77回日本公衆衛生学会総会抄録集;2018:427
- ・加藤 則子, 志村 二三夫, 長澤 伸江, 井上 久美子, 布施 晴美, 富井 友子, 名塚 清, 横山 徹爾, 藤田 誠一 新座市の健康長寿に向けた取り組みとその評価に関する地域連携研究 十文字学園女子大学 地域連携共同研究所年報 第6号;2020:67-76

子ども・地域の居場所支援を対象とするサービスラーニングのデザイン ～「しあわせ居場所ネットワーク」の活動と展開(2期)～

Design of the service learning for a child, the local place to stay support
～An activity and development of "Shiawase Ibasho Network"～

大山 博幸¹⁾
Hiroyuki OYAMA

矢野 景子¹⁾
Keiko YANO

1) 十文字学園女子大学・人間福祉学科

キーワード：子ども 地域 居場所 サービスラーニング リフレクション

要旨：本研究は、学生のサービスラーニングデザインの機会を通して、卒後福祉と教育に携わる学生の学びの深化を明らかにすることを目的とする。2019年度の「十文字元気プロジェクト」の採択研究を発展させ、2020年度に設立した「しあわせ居場所ネットワーク」の活動と展開の発展的研究(2期)である。地域の子どもの居場所支援活動への学生ボランティアとしての参加及び当該活動に関する継続的な学習活動を通して、学生ボランティア活動経験を対象とするサービスラーニングのプログラムの開発、実施、評価を試みる。また当該サービスラーニングによる学習活動を子どもの権利条約思想及びSDGsと関連づけ、その成果を示し、地域における子どもの権利保障としての場づくりを目指す。また本活動に参加した学生たちを対象としたグループフォーカスインタビューによる調査(研究1)、本活動に参加した学生及び地域の支援者を対象とした対話リフレクションの実施(研究2)を行ったが、これらはサービスラーニングの評価と位置付ける。

1 活動及び研究の目的

地域の子どもの居場所支援活動への学生ボランティアとしての参加及び当該活動に関する継続的な学習活動を通して、学生ボランティア活動経験を対象とするサービスラーニングのプログラムの開発、実施、評価を試みる。また当該サービスラーニングによる学習活動を子どもの権利条約思想及びSDGsと関連づけ、その成果を示し、地域における子どもの権利保障としての場づくりを目指す。

2 しあわせ居場所ネットワークハピネスの組織化と活動

人間福祉学科の学生による本活動主体として2020年に「しあわせ居場所ネットワーク」を設立した。本年度より「ハピネス」の通称をつけた。ハピネスとは「ハ(happy:幸せ)、ピ(place:居場所)、ネ(network:つながり)、ス(三単現のS:みんなで作る)」の意である。本組織において、世話人、会計、活動リーダー、広報、会員担当の役割分担を行い、教員とメンバー(約50名)の学生の連絡調整機能をはかるよう組織体制を確立した。

3 活動概要

3.1 事前学習会の実施

フードパントリー(親子の居場所スペースと装飾の企画・運営)、プレーパーク、子ども食堂の活動に必要な知識・技術を習得することを目的とした勉強会を主に、共同研究者である自然保育おけらっちょ(柏の葉の会)の市川氏、福永氏、滝沢氏、高田氏らを講師とした学習会を実施した(2021年4月17日、5月22日、7月24日、8月18日)。また、あさかプレーパークのスタッフから、「プレーパークの準備をしよう」というテーマで、Zoomによる講義(2021年8月17日)と実地研修(2021年8月18日)を行った。また学内教員の星野敦子教授から「商店街の現状と支える人の思

いを知ろう/私たちができること」(2021年6月12日)のテーマによるトークセッションとワークショップ、片居木英人教授から「子どもの権利について理解しよう」(2021年6月26日)のテーマによる講義、矢野景子講師(本共同研究者)から「子どもの権利：イラストを通して、子どもの権利と私を振り返る」のテーマによるワークショップを実施した。また川名はつ子元早稲田大学教授から「子どもの居場所を考えよう：当事者の話から子どもと食について考える」というテーマによる講義を実施した。

学生は勉強会に参加しながら、実践を行うサービスラーニングの体制を整えた。理論と実践の往還を主とし、活動後に振り返る時間を設け学びあう共同体の形成を確立した。また、富士見市内のNPOが主催するフードパントリーの活動にボランティアとして参加する機会をもった。上記プレーパーク活動及びフードパントリーボランティア活動等の活動終了後に参加した学生及び地域の支援者へ、筆者らが作成した対話リフレクションシートを用いて、活動に対する各自のリフレクション記述及び筆者らと対話リフレクションの実施を試みた。これらの学習会で、ハピネスメンバーの学生8~15名が参加した。

3. 2 活動

年間を通していくつかの活動に参加した。

- 2021年7月18日と12月19日に、星野敦子教授のゼミ活動とのコラボレーションにて、新座市栄四丁目商店街の「街仲マルシェたまりば」にて、フードパントリーと居場所づくりの活動に参加した。(図1：新座栄4丁目「たまりば」における活動の実際)
- 2021年11月28日と12月26日に、星野敦子教授のゼミ活動とのコラボレーションにて、学内における森林スペースで、プレーパークの活動に参加し、同会場で子どもの権利イラスト展を実施した。(図2：プレーパークの活動の実際)
- 2021年10月22日、11月19日、12月6日にNPO法人ポトフ主催のフードパントリーの活動へ参加した。(図3：フードパントリーの活動の実際)

これらの活動にハピネスメンバーの学生5~15名が参加した。

図1：新座栄4丁目「たまりば」における活動の実際



図2：プレーパークの活動の実際



図3：フードパントリーの活動の実際



4 研究1：サービスラーニングの意義ーコロナ禍の地域連携に着目して

しあわせ居場所ネットワーク「ハピネス」の活動はコロナ禍の入学（2020年度入学生）を中心に発足し、感染症対策を考慮しながら2021年の活動を行ってきた。本研究では、活動の初期にあたる2021年4月～10月の活動を学生の体験の意味付けから振り返り、サービスラーニングとしての活動の意義を考察する。※日本乳幼児教育・保育者養成学会（2021年）ポスター発表「保育者養成におけるサービスラーニングの在り方ーコロナ禍の地域連携に着目してー」の内容を一部修正して報告する。

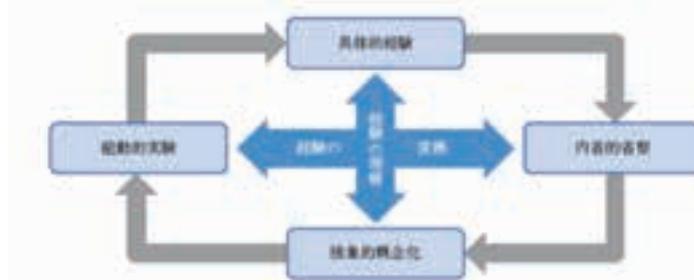
4.1 問題の所在

大学教育において、地域貢献及び地域連携における問題解決への参画が求められている。一方、コロナ禍において、大学教育はオンライン及び学外活動の自粛等の制限となり、学生の教育活動の場にも制限と影響をもたらした。本研究は、入学時からコロナ感染への対策により制限のある学習環境であった学生と教員の実践に着目する。授業ではない主体的な活動と共同体におけるサービスラーニングとして、コロナ禍における地域の問題解決の具体的実践（学内フードドライブ、A商店街におけるフードパントリー及び親子の居場所づくり）に参加した取り組みプロセスを検証する。また、参加学生のグループフォーカスインタビューより、コロナ禍の学習への課題及びサービスラーニングの意義について考察する。

4.1.1 サービスラーニングと学生の経験の理解と変換について

しあわせ居場所ネットワーク「ハピネス」（以下、「ハピネス」と表記）は、サービスラーニング Service Learnig (SL) (Jacoby, 1996¹⁾ ; Furco 1996²⁾) であり、その特徴は、学生が異なる文化を持つ地域社会と協働しながら、地域社会を発展させることを狙いとした、地域密着型経験学習プログラムである。学生が地域に一方的に奉仕するボランティア活動とは異なり、学生と地域社会が対等な関係を維持しながら、異なる文化や知識を持ち寄り、建設的で創発的な協働作業を行うことで、学生の能力を開発することを目的とした活動（中里陽子；吉村裕子；津曲隆, 2015 p. 165³⁾）である。また、「ハピネス」の活動は、カリキュラム外かつ、自主的な組織において行われる特徴をもち、活動の制限下ではあるものの、高等教育における地域と連携した学生の活動としては、コミュニティ・ラーニング (Community-Based Learning : CBL) の導入としての取り組みでもある。また、学生の活動の経験、経験学習理論における経験学習モデル (Kolb, 1984)⁴⁾ によると、経験による学習は、「経験の変換を通して知識が造られる過程である」と定義づけられ、その知識とは「経験の理解と経験の変換の組み合わせによって生じる」ものになる。参加学生による「経験の理解」とは、学習者が情報を取り入れる過程となり、そこで行われる学習者による「経験の変換」は、学習者がどのように情報を理解し、その情報に従って行動するかを示すものである (Kolb & Kolb, 2013)⁵⁾。また、馬場 (2021)⁶⁾ が示すように、経験学習モデルにおける学習の過程は、学習者が循環的過程における4つの要素（具体的経験、内省的省察、抽象的概念化、能動的実験）に触れる学習サイクルとして示され、このサイクルを循環させながら学びを発展させる学習モデルである (馬場, 2021)⁷⁾。つまり、COVID-19による活動制限下においては、この学習サイクルの循環の機会が十分に機能しない状況となったといえる。本研究では、COVID-19の制限下においても「ハピネス」の活動に参加した学生の経験の理解と変換に着目し、その具体から活動の意義を考察することにより、サービスラーニングの活動の意義を検証することとした。

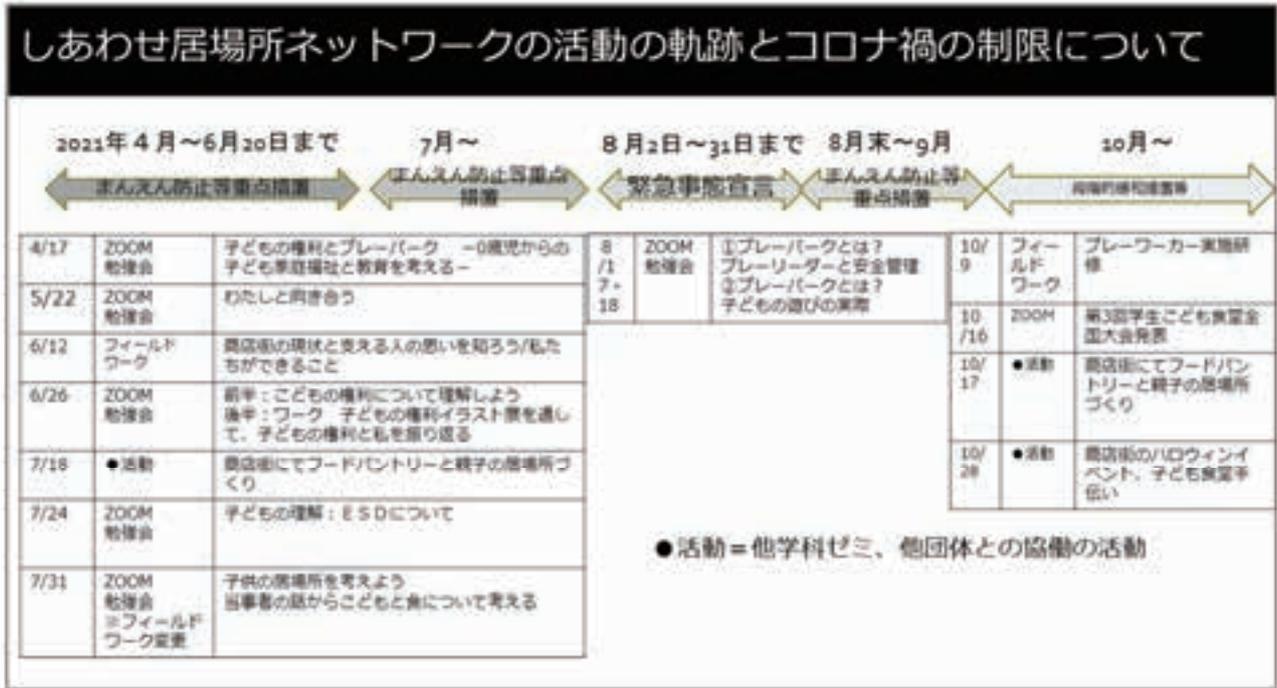
図4：経験学習モデル構造
(馬場, 2021, p. 90)⁸⁾



4. 1. 2 COVID-19 の対策と活動

ハピネス活動の初期（4月～10月）は、国・自治体の制限下の中での活動となった。関連を以下示す。

図5：活動内容とコロナ禍の制限



4. 2 方法

- 対象：2020年に入学し、2年次よりしあわせ居場所ネットワーク「ハピネス」の立ち上げに協力し、活動に積極的に参加しており、かつ、運営委員である5名を抽出し、研究同意が得られた5名を対象とした。5名は2021年10月時点で保育士資格取得及び社会福祉士の受験資格を目指す学生である。
- 対話型リフレクション (Eyler, 1999)⁹⁾ を活用し、グループ・フォーカスによる振り返りをZoomにより実施した。逐語録をデータ化し、テキストマイニング (KHcoder3.0)¹⁰⁾ にて分析を行った。
- 振り返りの項目 ①4月～10月の活動を振り返って思うことと課題について ②しあわせ居場所ネットワークの活動と授業との違い ③しあわせ居場所ネットワークの活動を通しての自身の変化

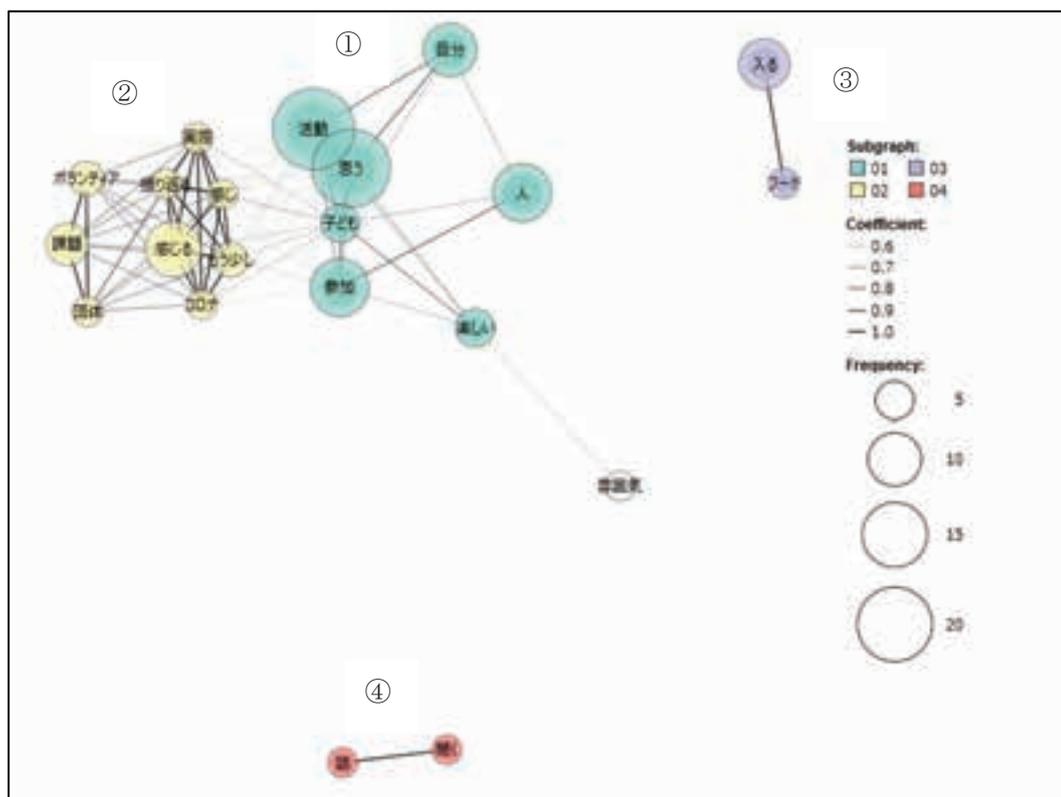
4. 3 結果

4. 3. 1 活動を振り返って思うことと課題についての経験の変換

活動を通して思うことと課題について、語りの抽出語の共起ネットワークは以下のように示され、①活動を通して、人や子どもを通して思うこと、また、②他団体やボランティアを通じて、課題を感じるようになったことが挙げられた。

課題に対しての経験の変換は、(1)【他団体と活動をする中での主体性への課題】(2)【子どもとのかかわりを通じた継続性への課題】であった。活動の運営への主体性と継続的な活動と参加を通して、一回性、単発での場であるため、継続的な支援の場が保障できていないことへのもどかしさへの気づきがみられた。また、語り④のように、コロナ禍の制限の中で、人とかかわること自体への喜びへ変換している学生もみられた。

図6：活動を通して考えていることと課題（共起ネットワーク）



(1) 【他団体と活動をする中での主体性への課題】

(語り①) 他の団体の話を聞いていると自分たちの活動としてものにしていく感じで、自分たちが主体として動かしているという自信がすごかったので、その話を聞いていると、自分たちはまだまだだなと思う。

(語り②) 活動を学びを共有する場になっていたと思って、先生たちに引っ張ってもらっただけでなく、自分たちでもやりたいことを実行できる力をつけていかなければいけない。

(2) 【子どもとのかかわりを通じた継続性への課題】

(語り③) フードパントリーで子どもたちと遊んだときに、子どもたちにまた遊ぼうね、と言ってもらったのですが、このパピネスの独立な活動でもないですし、準備に時間もかかっているの、次の活動が保障できるものでないというのが申し訳ないと感じていて、そこが課題かなと。

(語り④) コロナ禍で制限ある入学と大学生活を強いられてきて、活動ができること自体、また、人と関わる、子どもと関わること自体が楽しいと感じている。他団体や振り返りの中で感じる課題がある。

4. 3. 2 活動と授業の違いについての経験の変換

活動と授業の違いについて、語りの抽出語の共起ネットワークは以下のように示され、①参加することにより勉強への興味が増す、②子どもとの関係の理解、③発達を知ることができる、④授業は目的があるが、活動は着地を自身で見つける、⑤知識をもとに自分で学ぶことができる、⑥他団体から、専門的な考え方も学ぶことができる、⑦授業で思うことを実践に繋げられる、等の特徴が挙げられた。

活動と授業の違いについての経験の変換は、(1)【直接体験として、授業での知識が具体化される】(2)【多様な人との出会いにおける多様な価値観への気づき】(3)【開かれた学びへの喜び】の語りの特徴がみられた。

<具体的な語りから>

(1) 【直接体験として、授業での知識が具体化される】

(語り⑤) 活動に参加することによって、実際に子どもとかかわったり、地域の方とかかわったりして、お話を聞くことができたりすることによって、授業で学んでいたことがこういうことなんだと実感できる

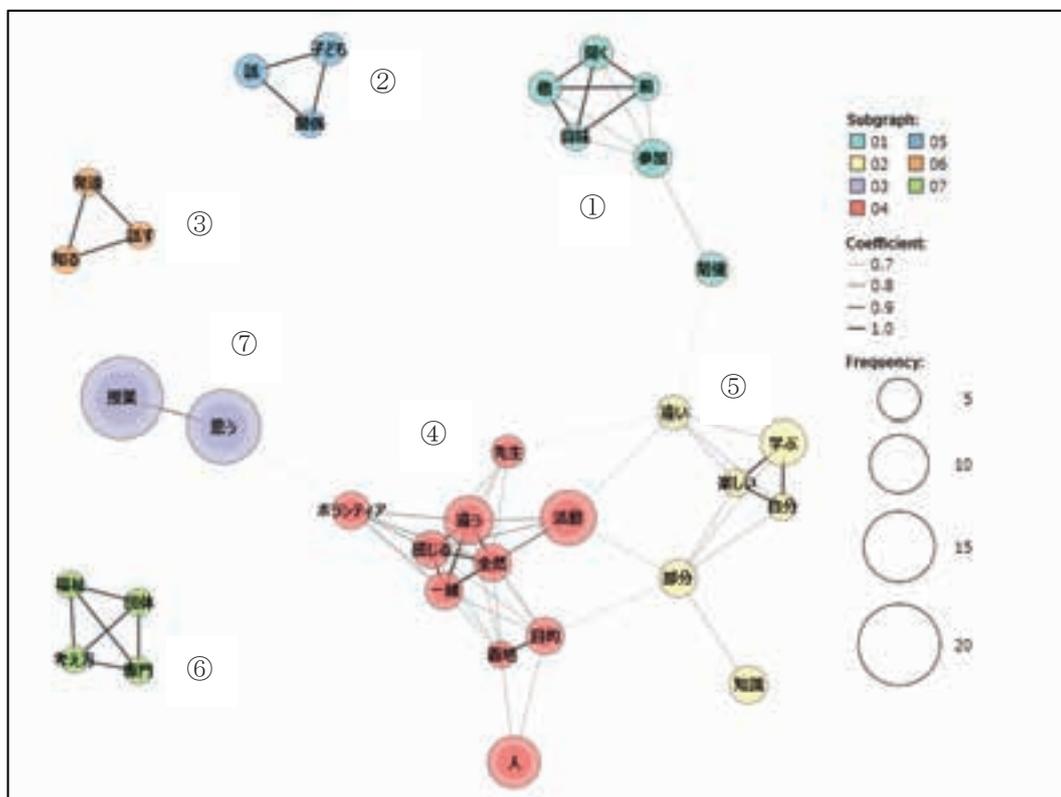
(2) 【多様な人との出会いにおける多様な価値観への気づき】

(語り⑥) 他の団体の話を聞いたり、一緒に参加して活動と一緒にさせていただく中で、福祉の学科なので、それに寄った勉強というか、先生方も専門があると思うので、それに考え方が先生ごとの専門によっていると思うのですが、全然違う考え方とか。

(3) 【開かれた学びへの喜び】

(語り⑦) 自分が何を学びたいかという着地、最後の部分がボランティアってどこに行くか私はわからなくて、そのどこに行くかわからない楽しさもあると思っていて、今日私はこれを学びにいこう、とっていたけど、全然別の部分で学んだりとか、できたりするので、それが授業とは違うことかな、と。

図7：活動と授業との違い



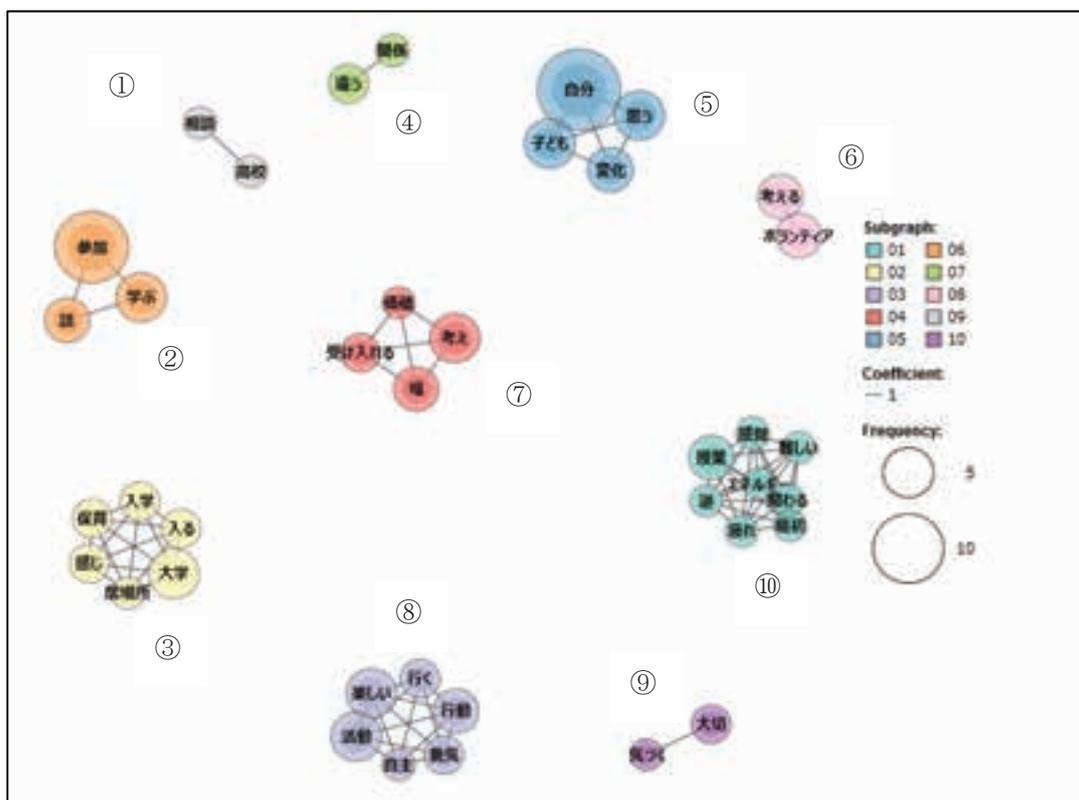
サービスラーニングの活動に参加することで、経験の変換のサイクルの循環が授業とサービスラーニングの結びつきを強めたことが明らかとなった。また、学習者がどのように情報を理解し、その情報に従って行動するかについては、学生の語りに見られるよう、①かかわりや話すことを通して、発達を理解することができる。②他の団体との活動を通して、福祉や専門の考え方だけでなく考え方に触れることができる。③授業は目的があるが、活動は目的が活動しながら変わり、ゴールが変わること。また、そのプロセスが違ふと感じる、と知識の深まりにとどまらず、主体的な学びとは何か、という本質的な気づきにつながっていることが明らかとなった。

4. 3. 3 自身の変化についての経験の変換

初期活動への参加がもたらした自身の変化について、語りの抽出語の共起ネットワークは以下のように示された。①高校時代からのボランティアとの違い ②参加しながら学ぶ姿勢 ③入学してか

ら保育や福祉を考えるようになった ④大学生としての関係づくりと高校生との違い ⑤子どもに対しての理解と変化 ⑥ボランティア自体を考える機会へ ⑦幅広い価値や考えを受け入れること ⑧自主的に行動する勇氣 ⑨活動を通してさまざまなことの大切さに気づく ⑩疲れる感覚が活力にかわっていく（充実感や達成感）。また、活動を通じた自身の変化についての経験の変換は【実践を通して具体的な課題や問題に気づく自身への変化を感じる】という特徴がみられた。

図 8：自身の変化



<具体的な語りから>

【実践を通して具体的な課題や問題に気づく自身の変化を感じる】

（語り⑧）実践するには細かな課題（人手がいる、とかお金が必要、とかいう問題）がみえてくる、と感じられて、子どもを支援する人たちをさらに支援する人たちが必要なのだな、と。授業で理解はしていても、実感まではできていなかったんだと感じた。

コロナ禍での活動制限の中、人との接触が減り、体感として人の実態を通じた学びがないまま学習がすすめられた。活動を通して、その実態と自身の感じ方への変化に気づき、当事者を通じた理解へ経験を変換する語りが見られたことから、活動を通じた経験の変換により、知から実感へ、つまり、循環的過程は自己の感覚と実感へ向かっていったことが明らかとなった。

4. 3. 4 総合考察

(1) コロナ禍の制限のある中での学内や地域におけるサービスラーニング（以下「SL」）について、

【学生の経験】はどのような「経験の理解」と「経験の変換」として意味付けられているのか。

①コロナ禍の制限ある活動においても、実際の活動を通して、地域や学生同士、また他団体との接触が経験の抽象と具体的経験の往還をもたらしていた。また、コロナ禍の養成課程の授業の具体的経験の場として機能していた。②経験の変換は、個人の振り返りの深化をもたらし、次の活動だけでなく、中学や高校時代のボランティア体験までさかのぼり経験の変換が行われていた。

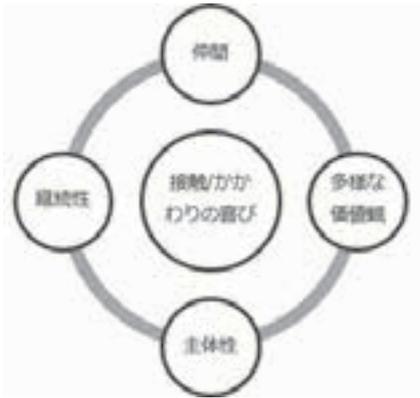
(2) 入学時からの制限下であり、SLの活動は何をもたらすのか。

入学時より制限ある非接触の教育方法と与儀なくされた学生にとって、SLの活動は人との接触を通じた活動そのものに喜びをもたらした。また、主体性や積極性への自身の内省だけでなく、子

どもや保護者、地域の当事者の思いに気づき、関係を継続するための問題解決や課題を導く、本来の学生の学ぶ力のエンパワメントにつながった。本研究より、学生の語りにみられた活動を通したSLが明らかにしたことは、活動をとおした「接触と人とのかかわりへの喜び」であり、仲間、多様な価値観、主体性、継続性を要素とする学習機会の重要性への気づきであった(図9)。

今後は、10月以降の活動についての経験の変換に着目するとともに、各学生の個別のデータを対象とし、コーディングにより、具体的な個別のキーワードの抽出と分析を行い、具体的な事例(エピソード)と経験の変換の構造の特徴を探求したい。

図9：学生の語りにみられた活動を通したSLの意義



5 研究2：対話リフレクションシートによるボランティア活動経験の振り返り

5.1 サービスラーニングにおける省察的学習

本研究においては、サービスラーニング過程として1)事前学習、2)活動実施、3)リフレクション(経験の再構成と意味づけ)の3つを構成要素に学習プログラムをデザインしている。サービスラーニングにおいては、活動の達成そのものではなく、活動によって何を学んだのかもしくは自身がどう変容したのか、がその目的となる。本活動に参加した学生が振り返り(リフレクション)を行う際、活動自体の効果的運用を反省する振り返りよりも、活動の中で獲得した経験に対する意味づけを形成するための振り返りを筆者らは重視する。

そこで筆者らは、コルトハーヘン(2010)¹¹⁾のリアリスティック・アプローチにおけるALACTモデルによるリフレクションの思想や手続きに注目した。ALACTモデルとは、①Action:行為、②Looking back on the action:行為の振り返り、③Awareness of essential aspects:本質的な諸相への気づき、④Creating alternative methods of action:行為の選択肢の拡大、⑤Trial:施行(これは①と重複する)の5つの過程を含むリフレクションモデルであり、コルトハーヘンは教師教育実践においてこのモデルを用いている。コルトハーヘンは、これまでリフレクションが「合理的な思考様式」としてとらえられてきたことを批判し¹²⁾、教師はむしろ、教師自身の非合理的な思考を含んだ「個人がもつニーズ、関心、価値観、意味づけ、好み、感情、行動の傾向を集合体として、ひとつの分離することのできない全体に統一する事柄」¹³⁾である「ゲシュタルト」¹⁴⁾を形成しており、それに基づいて教育場面での意思を決定し行為しているという。このようなコルトハーヘンのリフレクションモデルは、リフレクションを行う学習者の思考レベル、感情レベル、欲求レベルのそれぞれを含む全人性(ホリスティック)を重視していること、また学習者それぞれの立脚点からリフレクション行為の開始を認める多様性の確保がなされていることが特徴であるといえる。

本研究において実施の対象とした活動は、地域をフィールドとした居場所づくりやフードパントリー、プレーパークであった。これらの活動には学生や大学教員だけではなく地域の支援者や地域の参加者(当事者)等立場の違うさまざまな関係者らの相互作用によってなされる活動であり、非常に多様な側面をもつと思われる。そのため本活動に参加した学生はそれぞれ、多様な出会いやかかわりを経験することになる。また学生らもこの多様な側面に対して、各自の「ゲシュタルト」に基づいたさまざまな反応や応答する経験をするものと想定される。そのような意味で、本研究においては、このコルトハーヘンのリフレクションモデルが非常に適していると考えモデルとして採用した。

5.2 目的

対話リフレクションシートを用いて、本活動に参加した学生及び支援者の経験を各自が再構成し意味づける過程を明示することを試みる。これらを各自の学習経験と位置づけ、本活動におけるサービスラーニングの教育的効果を検討する。

5. 3 対象と手続き

本活動に参加した学生及び共同研究者でもある地域の支援者に対して、大山が作成した「対話リフレクションシート」(資料1)への記入および、一部記述後、任意の聞き手とともに、記述に基づいた対話リフレクションの実施を求めた。本研究に賛同した2名の学生と地域の支援者である市川恵梨子氏、福永智佳子氏、滝沢和香奈氏の3名にシートへの記述と対話リフレクションを実施した。

「対話リフレクションシート」は、本研究者の大山が、河野ら(2021)¹⁵⁾とともに開発した「9フレームリフレクションシート及び聞きあう対話」をもとに、本活動用に一部修正して作成したものである。このシートはコルトハーヘン(2010)のALACTモデルに基づいて作成した。

手続きは以下のとおりである。

- ① リフレクションのねらい(気づき及び変容の促進)とシート項目の説明
- ② シート項目「1.状況」、「2.9フレームリフレクション記述¹⁶⁾(行為の振り返りに対応)」、「3.1.聞きあう対話(本質的な気づきの諸相に対応(自分一人でとらえなおしてみても気づいたこと:左欄))」を各自記入
- ③ 記入後、1.2.3.1.を聞き手(任意の者)とシェア(一人15-20分前後)
- ④ シェア後「3.3聞き手との対話で気づいたこと:右欄」及び「4.今後に向けて(行為の選択肢の拡大に対応)」を記入

なお対話リフレクションの聞き手は、対象学生2名と支援者の滝沢氏に対しては大山が行い、支援者の市川氏、福永氏に対しては滝沢氏が行った。上記①②③④の記述結果を大山が考察した。

資料1 対話リフレクションシート

対話リフレクションシート

このシートの記入日(年 月 日)	あなたの名前()
活動した日(年 月 日)	活動した場所()

1. 状況:活動中「気になった場面」の状況記述(どのようなことが起こっていたのかの簡潔かつ具体的に記述しましょう)

2.9フレームリフレクション記述:上記1.の場面を思い出しながら、表の中の各問いに答えてみましょう。書ける箇所だけがかまいません。

5つの視点	わたし	相手(子ども、その家族、地域住民、スタッフなど。複数人としてもよい)
Do	「そのときあなたは何をしたのでしょうか?」	「そのとき相手は何をしたのでしょうか?」
think	「そのときあなたは何を考えていたのでしょうか?」	「そのとき相手は何を考えていたのでしょうか?」
feel	「そのときあなたはどのように感じたのでしょうか?」	「そのとき相手はどのように感じたのでしょうか?」
want	「そのときあなたは何をしたかったのでしょうか?」	「そのとき相手は何をしたかったのでしょうか?」
context	文脈(前後関係、環境・背景・あなたの価値観やものの見方など、「気になった場面」に「共に織られたもの(=contextの意)」は何だったのでしょうか?	

3. 「聞きあう対話」

3.1.上記2.を読み返してみて、気づいたことを下記の項目に従って左側の欄に書いてみましょう。思いつかない場合は空欄でも構いません。

3.2.聞き手との対話：①2と3.1.の「自分一人でもらえなおして気づいたこと」を聞き手（気づきの促進者。複数人でも構いません）に語り説明してみましょう。思いつかない項目は空欄でも構いません。②聞き手は相手の語りを尊重する姿勢で十分に傾聴し、質問やフィードバック（1メッセージ）をしましょう。

3.3.右側の欄に「聞き手との対話（質問、フィードバックなど）で気づいたこと」を記入しましょう。思いつかない項目は空欄でも構いません。

気づきの諸相	自分一人でもらえなおして気づいたこと (上記1と2を記入後に、自分一人で書いてみましょう)	聞き手との対話（質問、フィードバックなど）で気づいたこと (こちらは、聞き手との対話後に記入しましょう)
あなた自身の内面に生じた気づき	「心の中でなにか生じたことや変化がありましたか？」	「心の中でなにか生じたことや変化がありましたか？」
相手（子ども、その家族、地域住民、スタッフなど。複数人としてもよい）への理解	「新たに深まったことや広がったことありましたか？」	「新たに深まったことや広がったことありましたか？」
あなたの行為・かわり	「新たに深まったことや広がったことありましたか？」	「新たに深まったことや広がったことありましたか？」
あなたがたいせつにしたい思い・考え・価値（コア・バリュー）	「新たに発見したり再度確認できたりしたことがありますか？」	「新たに発見再度確認できたりしたことがありますか？」

4.今後に向けて：「気になった場面」についての見方の変化や、今後の活動や実践への見通し、抱負や願い、期待、希望などあれば書いてみましょう。

5. 4 結果と考察

5. 4. 1 学生による対話リフレクション

本研究に同意した2名の学生と対話リフレクションを行った。

学生Aは、フードパントリーのボランティア活動に参加した際、参加者として会場を訪れた外国籍の3人の親子が気になった。Aの2.9フレームリフレクション記述では、母親は日本語がまだ十分できない様子で、小学生の姉が通訳をして母をフォローしていたこと、まだ落ち着きのない幼い妹の面倒をよく見ている姿をみて、姉が家族の中心になっているのではないかと、また姉がスタッフとコミュニケーションを積極的にとっていた姿から、ここ（フードパントリーの会場）を居場所だと感じているのではないかと考えた。そして、Aは母や妹の世話に対して姉が少なからず負担になっているのではないかと感じ、この家族の普段の様子をもっと知る必要があるのではないかとこの記述が読み取れた。また、3.「聞きあう対話」では、もっとこの姉の話し相手になりたい、もう一度会うことがあったら変化がないか観察してみたい、居場所があることの重要性に気がついたといった記述が読み取れた。学生Aの記述は、本質的な気づきの諸相に対応する3.においては、各項目に対応した記述になっておらず、未分化な記述であったものの、「姉の話し相手になりたい（相手への理解の左欄）」、「これからもこの家族に注目したい（あなたの行為・かわりの左欄）」と記しており、再度機会があればかかわってみたいといった特定の参加者への関心や欲求が本人の中で明確になったことが読み取れた。

学生Bは、学生Aと同じフードパントリーの活動に参加し、Aと同じ上記の3人の親子とのかかわりについて記述している。Bは、会場で、寄付で募った子供用の古着や文房具店から好意でいただいた文房具を、食材を受け取った後の親子に勧める役割をしていた。2.「9フレームリフレクション記述」の欄では、姉妹に洋服をすすめるようとするが、妹に合うサイズはあっても、姉に合うサイズの洋服を進めることができず、そのため、「妹にも姉にもどちらにもあげたいがない。姉が少しさみしそう（feelの左欄）」と記していた。

そして、3. 「聞きあう対話」の欄では、「小学校高学年～高校生くらいの児童は、親の手伝いをしていたり、聞き分けがよく我慢している児童が多いのではないかと感じた。幼児よりも自分は小学校高学年より上の子をよく見ていると感じた（あなた自身の内面に生じた気づきの左欄）」、「幼児よりも小学校高学年や中高生ともっとかかわりたいと思っていた（あなたの行為・かかわりの左欄）」という記述から、B は自分が幼児よりも少年期や青年期の児童に関心がありかかわってみたいという欲求に気づいたことが読み取れた。また「児童が我慢する場面を減らしたい。どこでも我慢している児童を、『ここなら少しわがまま言える、甘えられる』場を作りたい（あなたが大切にしたい思い・考え・価値の左欄）」と記しており、さらにB は聞き手となった大山と対話リフレクションを行った後の記述に、「母子世帯などは特に、子が親のケアをする『ヤングケアラー』が隠れているのではないかと感じた（あなた自身の内面に生じた気づきの右欄）」、「隠れている『ヤングケアラー』を見つけない。子ども自身も気づいていない負担を軽減したい（あなたが大切にしたい思い・考え・価値の右欄）」と記述している。このことから、B は対話リフレクション後に、活動における特定の姉妹とのかかわりから、母子世帯にある問題をヤングケアラーという言葉を用いて一般化した考察に展開していることが読み取れる。さらに4. 今後に向けての欄では、「子どもの『寂しさ』や日ごろの『負担』などに寄り添いたいと感じた。私たちがかわられる時間は短い、その中で得られるもの・与えられるものを大切にしたい次のボランティアにも参加したいと思った」と記していた。B 自身がなぜ子どもの「寂しさ」に関心を寄せるのかというその理由についての気づきの記述はみられないものの、少なくとも自分の関心がどこに向いているのかといったことの気づきを、このリフレクションにより得ることができたことが示唆された。いずれにしろこのような気づきとともに次回の活動に参加する際の抱負がB によって記された。

学生A と学生B はともに、活動中に関心を向けた参加者に対して生活上の課題（ニーズ）があることを推察し、またそれに対する支援の必要性について言及している。両者は本学の人間福祉学科で社会福祉士養成課程を履修しており将来福祉の支援者を目指している学生であることから、フードパントリーの活動における各自の経験に対して福祉支援の文脈からの意味づけがみられたのは、彼女たちが持つ福祉支援の志向の表れであると思われる。

5. 4. 2 地域支援者による対話リフレクション

本研究に共同研究者としてご協力いただいた自然保育の活動を展開する柏の葉の会（旧おけらっちょ）の市川氏、福永氏、滝沢氏は、学習会の講師としてもご協力いただいたと同時に、学内プレーパークの活動にもスタッフとして参加していただいた。この3名の方にも対話リフレクションを依頼し実施した。

市川氏はプレーパーク実施中、火おこしをする子どもたちの見守りを行っていたが、子どもたちがなかなか火をつけることができない場面で自分もどうしてよいかわからず困ってしまうものの、他のスタッフに助けを求めるということをためらっていたことを記した。そのことから、支援の「場」をホールドするスタッフ間の相互理解とか、信頼感というのが非常に大切だということ（あなたが大切にしたい思い・考え・価値の左欄）」、「一緒に場を作っている人とのつながりの大切さ、重要さ、それがそのまま、場に反映される（あなたの行為・かかわりの右欄）」ことの気づきと考察を記している。市川氏は自身も初めて参加する活動の場において自分とスタッフとのかかわりのあり方から、スタッフ間の関係性が支援の場を構成する重要な要素であることに言及している。

福永氏は、プレーパーク終了後に、他のプレーワーカーたちと一緒に焚火周りの片付けを手伝う子どもたちが火を消す過程の遊びを面白がっている場面を取り上げ、「プレーワーカーがどのように子どもたちにアプローチするか学びたい（think の左欄）」、「今は見守り、次に同じ状況になった時に試してみよう（want の左欄）」と記し、また「プレーパークを運営する立場としての経験不足をベテランのスタッフから学びたい（context）」、「子どもの居場所作りにかかわる大人としての経験を積みたいと思った（あなた自身の内面に生じた気づきの右欄）」と記している。福永氏はプレーパーク時における子どもとのかかわりの経験を重ね、そのかかわりのスキル習得をしたいという自

身の欲求（願い）があることを明示しつつも、「時間や場の制約があっても、子どもが夢中になって遊ぶ姿をできるだけ見守っていたい（あなたが大切にしたい思い・考え・価値の左欄）」、「見守るだけではなくかかわっていける存在になりたい（あなたが大切にしたい思い・考え・価値の右欄）」といった子どもとのかかわりにおける自身の持つ信念もしくは価値（コア・バリュー）をあわせて表明している。また、さらにそのことの延長線上に、「子どものみならず、様々な年齢や立場の人たちの気持ちに寄り添い、地域コミュニティを作っていくうえでの大切な基盤となる（今後に向けて）」といった、自身のコミュニティに対する信念や価値をも明示している。

滝沢氏は、プレーパーク中に、簡単な軽食（おやつ）を無料で自由に受け取れるコーナーに何度も取りに来る子どもに関心を向けたことを記している。その子の身なりを見るとやや汚れていたことから、「金銭的に厳しいご家庭なのかと想像した（think の左欄）」と記し、イベント形式のようなプレーパークの活動においても、「地域のいろんな方が気軽に参加でき、支援の対象が見えてくると感じ、地域活動の大切さを実感（相手への理解の左欄）」したと記し、そこから氏が、子どもの遊び以外に、もともと関心を寄せていた社会的養護についてさらに興味を深めることになったと言及する。

上記 3 名の方は本活動の支援者であると同時に当該活動に参加し、それぞれの「ゲシュタルト」を立脚点として、多様な経験を得た学習者でもあり、それぞれの学習の内実がこのリフレクションによって浮かび上がったといえる。

5. 4. 3 総合考察

以上、学生 2 名、地域の支援者 3 名の計 5 名を対象とした対話リフレクションの考察を行った。リフレクションによりとりあげた場面は、学習者にとってほんのわずかな間の出来事であったと思われるが、学習者はそれぞれ、自身の「ゲシュタルト」を立脚点としてその出来事をシートの項目を手掛かりに再構成し、語りなおし、再構成し、他者（聞き手）に語りなおすことで、そこから本質的な気づきや洞察をそれぞれに獲得し、今後の活動への意欲や抱負、期待を表明するに至ったことが示唆された。

しかしながら、特に、本質的な気づきの諸相に対応する記述には深さや広がりにおいて個人差がみられた。

5. 4. 4 今後の課題

本活動に参加した学生は多数であったが対話リフレクションの実施者は 5 名にのみとどまったため、実施者を拡大する必要がある。また各自のリフレクションは一場面のみ記述であったが、各自が複数回においてリフレクションを行いそれらの関連や傾向などを見出すことで、より学習者の学びを深化、拡大させることができると思われる。また今回の研究デザインでは、対話リフレクションでの実際のやり取りを明示することができていないため、今後はこのことに焦点を当てる必要がある。

6 成果及び今後の課題

本年度もコロナ禍のため年度の前半において学外活動の制限があったことで、予定した活動をすべて行うことはできなかった。しかしながら、本学地域連携推進センター長である星野敦子教授のご厚意とご支援のもと、教授のゼミ活動に共同参加させていただくことができ、ハピネスにおける充実した地域活動が実現した。地域還元としては、そのような地域での活動に学生が参加し活動遂行に従事したことが、その成果であると認識しているが、しあわせ居場所ネットワークが地域において、独自にかつ継続して実施する活動への構築は未達成であり今後の課題である。

また学生への教育的成果としては、研究 1 による活動事後のグループインタビューとその質的分析、研究 2 による学習者個々のリフレクションの実施により、それぞれに学生の学習経験の内実を明らかにし、かつそれに対するいくつかの知見を獲得することができたが、今後はそれぞれ上記で示した研究上の課題に対処し研究を継続していく必要がある。

謝辞：本活動及び研究にご協力くださいました、柏の葉の会の皆様、関戸博樹氏はじめ、あさかプレーパークに従事されるプレーワーカーの皆様他、地域の居場所の活動に快く受け入れてくださいました関係者の方々、調査に協力してくれた学生の皆さん、川名はつ子元早稲田大学教授、本学教員の片居木英人教授、そして筆者らに多大なるご指導とご支援をいただきました本学地域連携推進センター長星野敦子教授に、心より感謝申し上げます。

注

- 1) Jacoby, B. (1996). Service-Learning in today's higher education. IN Barbara Jacoby, et al (Ed.). Service-learning in higher education: Concepts and practices. San Francisco: Jossey-Bass.
- 2) Furco, A. (1996) Service learning: A balanced approach to experiential education. In B. TAYLOR (Ed.) Expanding boundaries: Service and learning, Corporation for National Service, Washington, D.C.
- 3) 中里陽子 吉村裕子 津曲隆 (2015) サービスラーニングの高等教育における位置づけとその教育効果を促進する条件について, アドミニストレーション 22(1), 164-181, 2016-02
- 4) Kolb, D. A. (1984). Experiential Learning : Experience as the Source of Learning and Development, Englewood Cliffs, NJ : Prentice Hall.
- 5) Kolb, A. Y., & Kolb, D. A. (2013). The Kolb Learning Style Inventory 4.0 A Comprehensive Guide to the Theory, Psychometrics, Research on Validity and Educational Applications.
- 6) 馬場 洸志 (2021) サービス・ラーニングにおけるリフレクションの理論と手法 基盤教育論集; Bulletin of Institute of Liberal Arts, Otemon Gakuin University (8), 89-99,
- 7) 馬場 洸志 (2021) サービス・ラーニングにおけるリフレクションの理論と手法 基盤教育論集; Bulletin of Institute of Liberal Arts, Otemon Gakuin University (8), 89-99,
- 8) 馬場 洸志 (2021) サービス・ラーニングにおけるリフレクションの理論と手法 基盤教育論集; Bulletin of Institute of Liberal Arts, Otemon Gakuin University (8), 89-99,
- 9) Eyler, J., Giles, D. and Gray, C. (1999). At a Glance: What We Know about the Effects of Service-Learning on Students, Faculty, Institutions, and Communities, 1993-1999. University of Minnesota: National Service-Learning Clearinghouse.
- 10) 樋口耕一, 2004, 「テキスト型データの計量的分析||2つのアプローチの峻別と統合」『理論と方法』19(1): 101-115.
- 11) コルトハーヘン. F編 (武田信子監訳 2010) 教師教育学：理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ. 学文社
- 12) 坂田哲人・中田正弘・村井尚子・矢野博之・山辺恵理子 (2019) リフレクション入門. 学文社. p 13
- 13) コルトハーヘン. F編 (武田 2010) 前掲、p 51
- 14) コルトハーヘン. F編 (武田 2010) 前掲、p 51
- 15) 河野桃子・青木芳恵・池田華子・大山博幸・木戸啓絵・曾我幸代・孫美幸・福若真人 (2021) 対話的手法を通じたホリスティックな教師教育プログラムの開発と検証. 科学研究費補助金・基盤研究 (C) 課題番号: 18K02567
- 16) 成田 (2018) は、コルトハーヘンが提案する行為の振り返りの局面における「8つの問い」に、それらを総合もしくは俯瞰してとらえなおす問いである「context: 文脈」を加え、それを独自に「9フレームリフレクション」と呼んだ。本研究では対話リフレクションシートにこの成田の書式を取り入れ、参考にした。成田喜一郎 (2018) 実践と理論を架橋・往還する「珠玉」のコンテンツ/スキルへの誘い：子どもの教師の学びの拡張と深化をもたらす. 学校図書館 782-809. 全国学校図書館協議会

健康増進に向けたプラスごはんプロジェクトからの地域への情報発信・交信・共振

第2報 コロナ禍での学生食堂のメニューコンテストの取り組み

Information, communication, and resource to a positive meal project
for health promotion to the community
The 2nd report Activities for the student cafeteria menu contest under COVID-19

名倉 秀子 ¹⁾ Hideko NAGURA	木村 靖子 ¹⁾ Yasuko KIMURA	村田 浩子 ¹⁾ Hiroko MURATA	佐々木 菜穂 ¹⁾ Naho SASAKI
菅原 沙恵子 ¹⁾ Saeko SUGAWARA	岡本 節子 ²⁾ Setsuko OKAMOTO	中岡 加奈絵 ²⁾ Kanae NAKAOKA	星野 祐子 ³⁾ Yuko HOSHINO

1) 十文字学園女子大学・健康栄養学科 2) 同・食物栄養学科 3) 同・文芸文化学科

キーワード：健康増進 地域 メニュー 季節性 学生食堂

要旨：健康づくりのために、日々の食生活で営まれる食事づくりや家庭での共食を踏まえて、本学の学生食堂においてメニューコンテストを実施し、そのメニューづくりを通して地域へ食の情報発信のシーズを集積するとともに、学生および教職員等の食堂利用者の健康増進をめざすことを目的とした。前期と後期の2回のメニューコンテストを実施し、応募数が昨年度のおよそ2倍となり、応募の学生らはメニューのポイントやお勧めするための料理写真の撮影など、多方面からの給食へのアプローチする手段を成果として得られた。メニューはいずれも学生用の給食を対象としているものの、良質な献立であることから、これらをレシピとして集積し、コロナ感染症等が落ち着く時期に地域へ積極的に発信していくことが今後の課題にあげられた。

1 はじめに

本プロジェクトは、国民の健康づくりを目指す健康日本21（二次）を受けた「健康埼玉21」、また、新座市における「第2次いきいき新座21プラン」の基本方針に基づく「健康課題」の解決のために、健康増進に関する分野を専攻する学生とその他の専門分野の学生により、大学内外（地域）へ「健康課題」の解決を発信し、地域との交信により、学生と地域の共振を生み出す取り組みとして、昨年2020年度に開始された。

当初の計画は、「健康課題」として「食生活」「いきがい」の取り組みの実施を予定していたが、スタート時点がコロナ禍であったことから、食事作りと共食の活動に制限がかかり、プロジェクトチームメンバーの当事者意識も低くなり、スケジュールに基づくお互いの役割分担等のフォローもできにくい状況が多く、活動内容の検討を迫られた。

コロナ禍における制限ある活動を意識しながら、本プロジェクトを推進するためにプロジェクトチームメンバーを再構成し、役割分担を明確化し、メニュー提案をテーマとして実施可能な本学学生食堂（以下学食とする）における「メニューコンテスト」を主な活動として取り組んだ。なお、学食ではコントラクトフードサービスの（株）グリーンハウス様およびその店長の多大なるご理解と協力によるものである。

2 プロジェクト継続のための取り組み

プロジェクトチームメンバーの再構成を行い、「メニューコンテスト」における給食への展開を明確化し、食事の提供・販売のマーケティング等を意識する活動内容も検討し、学生の成果につなげることも加えた。

2. 1 組織するメンバーの再編

これまで、地域を意識しながら教育・研究を行い、地域貢献の取り組みを行っているメンバー8人で構成されてきた。一方で、コロナ禍による教育現場の調整等に時間を要する立場のメンバーもあり、2020年度のメンバー変更等を行い、新たなメンバー8人による編成とした。

2. 2 メニューコンテストの活動計画

メニューコンテストは、前期・後期の年2回の活動計画を検討した（表1）。

前期メニューコンテストにおけるテーマは、4～6月の時期に提供する定食、ラーメン、その他の一品料理（主菜、副菜）とした。また、メニューの条件として価格や食品衛生的な条件等を示して募集を行った。後期メニューコンテストは、テーマを「秋と冬の味覚を楽しむことができるメニュー」として定食およびその他の一品料理の募集を行った。

表1 2021年度 学食メニューコンテストの活動計画

時期		内 容
前期：第2弾	後期：第3弾	
前年度12～3月	6～7月	学食メニューコンテストの募集に関する検討
3～4月	7～8月	「学食メニューコンテスト」の募集
4～5月	9月	一次審査 大学内での調理および写真撮影
5月中旬	10月上旬	二次審査 プロジェクトチームメンバーによる審査
5月下旬	—	三次審査 投票による審査（二次通過メニュー）
6月	10月下旬	提供メニューについて検討
6～7月	11～12月	食堂でのメニュー提供・表彰式等

2. 3 メニューコンテストの審査に、プロモーション活動用のメニュー写真を導入

メニューコンテストに提出された料理は、オリジナルであることを原則としているが、材料や分量の適切性、学内での調理を実施し、応募メニュー写真の撮影などにより確認を含めた第一次審査を導入した。

2. 4 活動内容の成果を記録

メニューコンテストにより学食にて提供されたメニューについて、また、コンテストに応募されたメニューは、提供されなくとも内容が充実している可能性があることより、記録として残すことの検討を行った。

3 2021年度の活動報告

メニューコンテストは第2弾、第3弾として、メニューの応募受付がなされ、6～7月に6メニュー、11～12月に4メニューが提供された。その活動内容を報告する。

3. 1 メニューコンテスト第2弾について

3. 1. 1 メニューコンテスト応募の概要

図1に学食メニューコンテスト応募要領を示した。第1弾に続くコンテストであることから、プラスチックプロジェクトのシンボルマークのデザインは同様にし、応募期間を長くして、メニューの条件を学食にて提供しやすいスタイル3形態（定食、ラーメン、その他一品料理）とした。なお、ラーメンについては麺類の提供形態の一つであり、学生食堂の店長と相談により、メニュー条件に加える決定をした。

応募期間延長！！みなさま奮って応募ください

学食メニューコンテスト募集要領



“おいしい” アイデア 大募集！

あなたの“おいしい”学食メニューを

募集！

主催：プラスごはんプロジェクト

十文字学園女子大学の健康栄養学部に魅力的なものを創るためにプラスごはんプロジェクトを立ち上げた。作って楽しい！食べておいしい！が目標とするプロジェクトです。

第2弾 4～6月に開催したメニューコンテスト

このコンテストが好評で、この学食メニューが学食に合ったメニューとして、皆さんが好むメニューとして作成されたアイデアも、ぜひこの機会に活用してください。皆さんのご応募を心よりお待ちしております。

1. 募集スケジュール

・募集期間：2021年12月14日（月）～2022年3月14日（日）

・選考結果発表：2022年4月 予定

・メニュー提供：4月、5月、6月の昼食にて提供予定（曜日は食室にて発表）

2. 応募対象者

十文字学園女子大学の学生、教職員のご個人またはグループ（ただし3名以下）

3. 募集内容

応募用紙に、作成した学食レシピを記載し応募してください。

① メニューの条件

①給食で提供可能なメニューあるいはラーメン、その他一品料理（定食、割烹）

②食材料金は一律あたり200円未満

② 使用食材の条件

①通常の学食メニューで使用されるような食材を使用する

②食中毒の危険を回避するために、生肉（生まもの）は使用しない

3) 応募用紙 記入上の注意事項

・誰でも作ることができるよう料理手順をわかりやすくまとめてください。

4. 応募方法

・応募用紙は、本メールに添付のものをダウンロードしてご利用ください。

・応募は、データ形式で受け付けます。

・プラスごはんプロジェクト事務局のメールアドレス（plusgohan@jamouji-u.ac.jp）にファイルを添付して送信してください。

件名は「学食メニューコンテスト応募」としてください。

また、ファイル名は応募代表者の氏名にしてください。

5. 選考

応募されたメニューは、学生、教職員の皆さんからの投票により得点の高い学食メニューを候補として、事務局および学生食堂運営者との会議で選考します。選考にあたっては「3. 募集内容」の「① メニューの条件」を基準とします。

6. 発表

大学HP、学内メール及び学生食堂内で発表します。採用された学食メニューの応募者（グループ）を表彰させていただきます。また、応募者（グループ）全員に参加賞を贈呈させていただく予定です。

7. お問い合わせなど

質問や不明な点などがありましたら、プラスごはんプロジェクト事務局のメールアドレスplusgohan@jamouji-u.ac.jpまでご連絡ください。

プラスごはんプロジェクト事務局
名誉委員、木村陽子、岩本麻美、藤本敦子、
村田浩子、後々本部長、室新祐子、

メールアドレス：plusgohan@jamouji-u.ac.jp

図 1. 学食メニューコンテスト応募要領

応募メニュー数は27件となり、第1弾の15件の約2倍の数となった。応募者は、23団体（述べ34人）であり、それらの所属学科は健康栄養学科、食物栄養学科、食品開発学科と食に関係する3学科であった。また、学年では2年（2020年度入学）～4年（2018年度入学）と全ての学年からの応募であった。

3. 1. 2 応募メニューから提供メニューの決定に向けて

27件の応募メニューは、栄養管理を意識したメニュー、食べてみたいメニュー、彩りの良いメニュー、郷土料理のメニューなど様々であり、応募者の強いメニューへの思いが現れていた。審査内容は、給食として提供可能であり、販売数の予測も検討が求められるため、単純に給食利用者による投票の得点数で決定することが適切であるとは限らない。前年度の第一弾の審査等の問題点を改善すべく、審査を次の3段階とした。

第一次審査は、応募メニューを実際に調理し、写真撮影をすることとした。これは、使用食材と分量の確認による経済性（価格）、調理方法の確認による給食への可能性、メニューの盛り付けや器のアイデア、栄養系のメニュー提案では栄養バランスなど、これらの視点を評価に加える際に第一次審査の調理実施が有効に働き、応募者のオリジナルメニューの確認ができた。さらに、次の第二次審査における書類の整備（料理の写真提供）が適切になり、公平な条件のもとで第二次審査を進めた。また、インターネット等を利用した料理のイメージ写真の添付がなくなり、その点からも評価がしやすくなった。さらに、提供された料理の写真は、オリジナルとして本プロジェクトの情報として蓄積することにした。今後の活動時に利用内容を検討したい。

第二次審査は、一次審査通過のメニュー24件（参加者23団体）により実施された（表2）。書類による審査であり、提供しやすいスタイル3形態（定食、ラーメン、その他一品料理）のメニューを、本プロジェクトメンバー8人が5項目について点数をつけ、3形態別合計点数の多い上位3件（3形態合わせて9件）を第三次審査に推薦した。

第三次審査は、全学生・教職員の皆様に「給食で食べてみたいメニュー」として、3形態（定食、ラーメン、その他一品料理）別に投票を実施した。その結果が図2の通りとなった。

表2 メニューコンテスト第2弾 応募メニュー

メニュー名（提供形態）		メニュー名（提供形態）	
定食	ムケッカ風シチュー、ビナグレッチ風サラダ	その他一品料理	アスパラガスのピカタ
	春の彩りビビンバ丼とわかめスープ		韓国風チキン丼
	ふわふわとりつくね丼		鱈のトマト煮
	野菜ソースのハンバーグ定食		おくずかけ（宮城県郷土料理）
	大豆御膳定食		ごま油香る、焼肉風キンパ！
	春のめで鯛定食		ヤンニョムチキン
	海の幸・山の幸のパスタ定食		さつまいものヨーグルトサラダ
	チーズがのびるツナキンパ定食		にんじんパンケーキ
ラーメン	ごま油香る汁なし中華らーめん	野菜たっぷり！食べる水餃子スープ	
	豆乳白味噌ラーメン	ごはんがすすむ！肉巻き生姜焼き	
	タケノコ入り！担々麺	こだわりのひじき入りヘルシー豆腐ハンバーグ♪	
	野菜たっぷり！あんかけラーメン	プラスちゃんのプラスチーズハンバーグ	
	鉄分と大豆イソフラボンたっぷり！アサリと青菜の豆乳ラーメン	アボカドとツナのにんにく風味の和風パスタ	

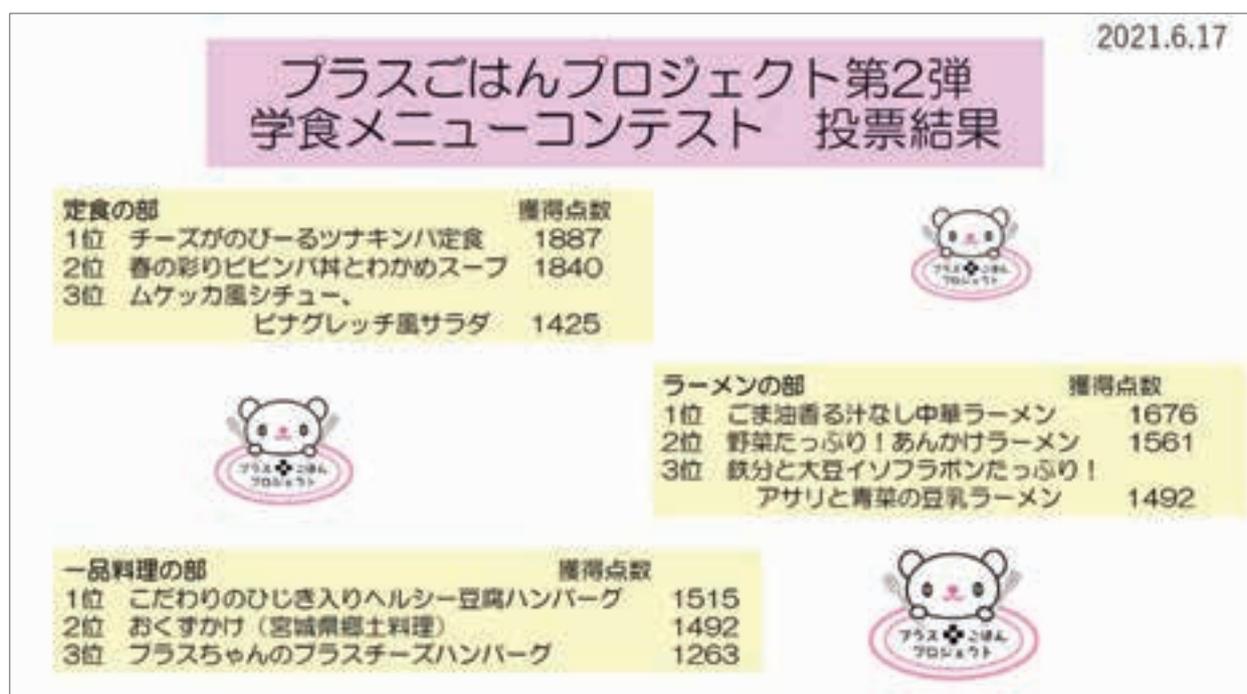


図2 学食メニューコンテスト 第2弾 投票結果

3. 1. 3 学食メニューとして提供

給食での提供の期日は、6月22日「ごま油香る汁なし中華らーめん」、24日「おくずかけ」（宮城県郷土料理）、25日「こだわりのひじき入りヘルシー豆腐ハンバーグ」、29日「アサリと青菜の豆乳ラーメン」、7月2日「チーズがのびるツナキンパ定食」、「春の彩りビビンバ丼とわかめスープ」の5日間に延べ6メニューが提供された。

当日は、メニューのおすすめポイントを紹介し、さらにメニュー提案者の表彰および料理とともに記録の写真撮影を行った（写真1～6）。メニューはいずれも事前に販売日が知らされており、いずれも長蛇の列をなし、完売御礼の札も早くに提示された。通常の利用者数を超える販売量であった。



写真 1 長蛇の列 チーズがのびーる
ツナキンパ定食



写真 2 定食の部 1位



写真 3 ラーメンの部 1位



写真 4 ラーメンの部 3位 店長と一緒に



写真 5 一品料理の部 1位



写真 6 定食として提供の一品料理

3. 2 メニューコンテスト第3弾について

3. 2. 1 メニューコンテスト応募の概要

同年度内の後期に、第2弾のコンテスト結果のメニュー提供時に第3弾の応募要領を示した。第3弾のコンテストでは、食育を意識して、メニュー応募者や食堂利用者がともに季節感を味わえるコンセプトとし、秋・冬のメニューを学生食堂にて提供するスタイル2形態（定食、単品料理）とした。これまでの応募者は、季節の食材を利用した料理が少なく、献立（メニュー）に季節感を取り入れることが低かった。これらを反映させ、具体的にキャッチコピー「味覚の秋」などを応募要項に挿入し、秋に収穫される食材の利用を促した。

3. 2. 2 応募メニューから提供メニューの決定に向けて

20件の応募メニュー（表3）は、「秋・冬の味覚を楽しむ」ことをテーマとしたが、「きのこ」「さつまいも」「ほうれん草」「かぼちゃ」などの他に、「パプリカ」「きゅうり」「オクラ」などの応募時期

の夏の野菜を利用するメニューも散見された。そのため、審査については第一次審査の大学内での調理および写真撮影、第二次審査の本プラスごはんプロジェクト構成メンバー教員の審査を中心に実施することとした。利用者である全学生および教職員の投票による審査は、季節感について理解して「食べたいメニュー」を審査、判断できるかが問題点と挙げた。今般のテーマが季節感であり、年内での提供という時間的な制限、給食提供の可能性、販売数の予測なども検討すべきであることから、第3弾では一次と二次審査により提供メニューの決定を行った。今後も応募メニューの選別は、審査内容を明確にし、応募の際に提示する必要があることをプロジェクト構成員で確認した。

第3弾では、応募メニュー20件が調理、写真撮影による第一次審査を通過し、第二次審査に臨んだ。第二次審査では、3日間の短時間で審査が実施され、その結果、図3に示す定食4メニューが各日の給食として提供された。

表3 メニューコンテスト第3弾 応募メニュー

メニュー名（提供形態）			
定食	チキン南蛮風定食 カオマンガイ定食 ネギ塩レモンつくね定食 鉄分定食 免疫力を高める彩り定食 秋野菜のドライカレー定食 油淋鶏唐揚げ定食 季節のロコモコ風ハンバーグ定食	定食	秋を感じる★かぼちゃクリームペネランチ ポークソテー定食 リゾット定食 豚もも肉のオープン焼き(カレー風味)定食 生姜焼き定食 豚しゃぶ定食 秋いっぱい！ほくほくサツマイモご飯とイワシの竜田揚げ
	豚肉の味噌炒め定食 豚の味噌焼き定食	単品	豚肉ロースのさつまいものきんぴら 胸肉と野菜の甘酢炒め 南蛮漬け



プラスごはんプロジェクト

2021.11.26

学生食堂メニューコンテストのご報告

十文字学園女子大学の食環境をさらに魅力的なものにするために、テーマ「“秋”と“冬”の味覚を楽しむことができるメニュー」の学生食堂メニューコンテスト（2021年7月～2021年8月）を開催しました。

応募の中から、以下のメニューを学生食堂で提供することとなりました。
（※食堂用に食材や分量を調整しての提供となります）

11月25日（木） ほくほくサツマイモご飯とイワシの竜田揚げ
(サツマイモご飯、イワシの竜田揚げ、白菜とツナのさっぱり和え、きのこいっぱい味噌汁)

12月8日（水） かぼちゃクリームペネランチ
(かぼちゃクリームペネ、サニーレタスとツナのサラダ)

12月10日（金） カオマンガイ定食
(カオマンガイ、チンゲン菜とキノコの炒め物、サラダ、わかめスープ)

12月15日（水） 油淋鶏唐揚げ定食
(ご飯、油淋鶏唐揚げ、もやしときょうりのピリ辛ナムル、しいたけとチンゲン菜のスープ)

いずれも410円
(定食スタイルでの提供)

主催：プラスごはんプロジェクト

図3 学食メニューコンテスト 第3弾 審査結果

3. 2. 3 学食メニューとして提供

第3弾は、定食の4メニューが季節の食品を適切に利用しており、年内の提供に向けて日程の調整を行った。当日は、おすすめのポイントを含めたメニューの紹介を行うポスター（図4～7）を作成し、掲示した。メニューの提案者は、メニューと実際の給食を確認、検討した（写真7～10）。

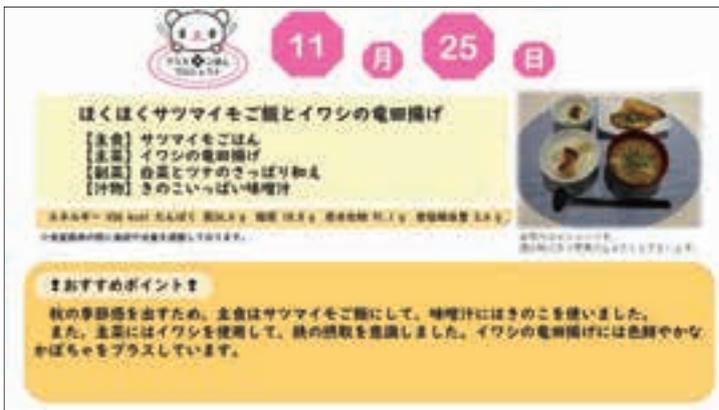


図4 メニュー紹介のポスター



写真7 ほくほくサツマイモご飯とイワシの竜田揚げの提案者



図5 メニュー紹介のポスター



写真8 かぼちゃクリームペネランチの提案者

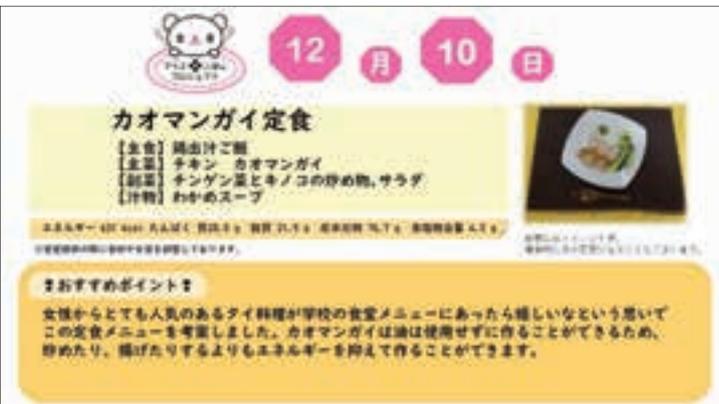


図6 メニュー紹介のポスター



写真9 カオマンガイ定食の提案者



図7 メニュー紹介のポスター



写真10 油淋鶏唐揚げ定食の提案者

4 本年度の活動の成果

学食のメニューコンテストを前・後期に、第2弾、第3弾として積極的に活動した。第1弾の問題点として、全般的にメニューの写真が粗雑であり、中にはインターネットの写真を利用するなどが散見された。そのため、写真は投票の際に利用する、レシピ集の掲載用に現時点から蓄積する等を意識して、第一次審査に調理およびその写真撮影を加えた。

その活動の成果は、明らかに学生のコンテスト参加の意識を向上させることになった。インターネット等で示されたメニューをコピーして提出した内容は、審査過程で辞退することも生じていた。さらに、写真撮影が学内の調理学実習室で実施されるため、器やカトラリーを含む什器等に工夫があり、一層美味しさを加える要素を学ぶ機会が生み出された。

食堂でメニューコンテスト1位の給食は、いずれも長蛇の列ができ、完売になるまでが短時間で、2限に授業のある学生には入手困難となっていた。

本年度のメニューコンテストで給食提供のメニューは、食領域外の他学科の学生によりクリアファイルにまとめられ、関係の学生、教職員をはじめ各種関係の団体等に配布された(図8)。



図8 メニューコンテストで選ばれたメニューによるクリアファイル

4. 1 第2弾メニューコンテストに参加した学生の感想

4. 1. 1 貧血予防を意識した「鉄分と大豆イソフラボンたっぷり！アサリと青菜の豆乳ラーメン」

女性が食べたくくなるようなメニューにしたいと思い、豆乳を使ったラーメンにしようと考えました。工夫したことは、あさりやほうれん草など、鉄が多い食品材料を入れることで、女性が陥りやすい鉄欠乏性貧血を予防できるようなメニューにしたことです。提供されたメニューは、それぞれの食材の主張が強すぎず味のバランスが取れていて美味しかったです。入っている具材の美味しいお出汁が出ているので、あさりや豆乳が苦手な方でも食べやすく、美味しく食べることができると思います。今回、考案したメニューを忠実に再現してくださり、ありがとうございます。自分達で考えたメニューが学食に提供されているのはとても嬉しく、その分美味しく感じられました。

4. 1. 2 軽い気持ちで参加した「春の彩りビビンバ丼とわかめスープ」

最初は、1年生から学んできたことを活かして卒業までに何かみんなに見てもらえるようなことをやってみたいという軽い気持ちでこのプロジェクトに参加しようと思っていました。ですが、献

立を考える際に女子大生にとってどんな献立が喜ばれるのだろうか？どのような栄養問題を抱えているのだろうか？と考えているうちに、次第に若い女性の栄養問題を踏まえた上で、みんなに喜んでもらえるような料理を食べてもらいたいという気持ちが強くなってきました。

何回も試作して味や彩りを工夫したので、学食メニューに採用された時は本当に嬉しかったです。今まで何度も料理をして誰かに食べてもらうという機会があったけれど、学食という大きな場で自分の考えた献立の料理が食べてもらえるという貴重な体験はなかなか無いと思います。最初こそ軽い気持ちでしたが、参加してみると献立作成の大変さ・楽しさ、達成感などが感じられました。

このプロジェクトに参加して本当に良かったと思います。

4. 1. 3 学食にあったらいい「チーズがのびーるツナキンパ定食」

プロジェクト参加の経緯は、友達に誘われて応募しました。メニューは正直なところ自分が食べたい料理で、学食にあったらいいなと思うメニューにしました。自宅と学校で2度も調理をしたので、何かと負担がありました。だから、いい結果になればいいなと漠然と思っていましたが、まさか入賞して1位を取るとは思っていませんでした。1位になって、学食で自分の考案したメニューをたくさんの人が食べている、その光景を実際に見たら、想像以上にうれしい気持ちが大きくなりました。

投票結果を見ると、2位のビビンバ丼定食と投票数は僅差で同じくらいだったので、やっぱり韓国料理が人気だなと思いました。部門ごとにみても一番投票数が多くて、うれしかったです。

販売当日は、入賞のセレモニーや写真を撮ったりしていたため、喫食時間が短くなり、ゆっくり食べられなかったのが残念でした。キンパは電子レンジで数十秒温めてから食べましたが、調理から時間が経ってしまったせいか、チーズが伸びませんでした。試作ではミックスチーズを使用しましたが、学食では応募書類で提案したスライスチーズを使用していて、それが思っていたように溶けていませんでした。また、ご飯の色もムラがあったので、この2点が改善点かなと思います。細かいところで修正すべき点はありますが、全体的に味はどれもおいしかったです。

今回の参加を通して、試作をしながら調味料を増やしたり減らしたりと試行錯誤するのが楽しく、調理する楽しさを知りました。メニュー開発や商品開発に興味があるので、今回の経験がどこかで役に立つといいなと思います。

4. 1. 4 郷土料理をテーマとした「おくずかけ」

私は、郷土料理を通してその地域を知ってもらいたいという目的のもと、メニューを作成しました。実現に向けて作成に取り組むのは楽しかったです。また、多くの人が評価に携わって下さり、投票していただいたことは非常に嬉しかったです。

一方で、食堂に出すメニューとして、様々な要素を考慮する必要があり、調整に時間がかかりました。材料は用意しやすいものか、大量調理の中でそのレシピは実現可能か等、細かな調整は大変でしたが、食物栄養学科で学んできたことを活かし対応できたことは良かったと思います。

プラスごはんプロジェクトを通して、新たに自分に足りない能力も見つかったので、今後活かしていければと思います。

4. 1. 5 女子大生向けのメニューを意識した「ヘルシー豆腐ハンバーグ」

メニュー作成において工夫した点は、女性に不足しがちな鉄、葉酸を摂れるよう、葉酸を多く含む枝豆と鉄を多く含む鉄釜ひじきを使用しました。女子大学生に提供するため、ヘルシーながらも満足感が得られる豆腐ハンバーグにしました。本来、ハンバーグには牛乳が入りますが、豆腐を水切りしないことで、牛乳を入れずに作ることができる、水切りの手間も省けるようにしました。あんと紫蘇を盛ることで見た目も美しくなるようにしました。

しっかりボリュームがあり満足感がありました。白い豆腐ハンバーグに枝豆と紫蘇の緑色、ひじきやあんの色で見た目も美味しそうに仕上げました。冷めても美味しく食べられたので、お

弁当のおかずにも最適だと思いました。私たちの考えたメニューを実現して頂き、学食で提供して下さり、ありがとうございました。

4. 2 第3弾メニューコンテストに参加した学生の感想

4. 2. 1 赤色の容器に私達の「油淋鶏唐揚げ定食」

今回2回目のプラスごはんプロジェクトに定食で挑戦しました。友達と取り組みながら、「中華料理が食べたい!」と思い、献立を作り始めました。二度揚げした油淋鶏唐揚げは、給食で出される時にパリッと感がなくなってしまうかと思いましたが、実際の給食はパリッと感もあり、長ネギのタレに染みた部分もご飯がすすみ美味しかったです。

献立のポイントに対する利用者の方への期待として、濃い味付けの油淋鶏唐揚げやもやしときゅうりのピリ辛ナムルと一緒に、椎茸とチンゲン菜の卵スープで、椎茸から出る優しい出汁に秋を感じ温まって欲しいと思いました。給食では、もやしときゅうりのピリ辛ナムルが提案の味よりも辛さが控えめで誰でも喫食可能な一品となり、美味しかったです。刺激が少し足りないように感じましたが、給食として出すには、万人受けする控えめの味付けにした方がいいと勉強になりました。また椎茸とチンゲン菜の卵スープも椎茸の素材を感じる上品な味で美味しかったです。簡単に作れ、材料費も安価なため、ぜひ真似してほしいメニューです。提供されるときトレーが赤色で料理がすごく美味しそうに見えました。容器が変わるだけでこんなにも見た目の印象が変わるのだと実感でき、とても驚いたのと嬉しかったです。コンビニで売られているお弁当のようで感動しました。

4. 2. 2 かぼちゃクリームペンネランチ

提供時期がハロウィンに近いため、カボチャを使った料理にしました。学食では見かけないカボチャのソースにし、パスタの種類もペンネにして特別感が出るようにしました。カボチャはたっぷり用い、優しい甘さのソースにし、ベーコン(または鶏肉)やマッシュルーム、ほうれん草も入れ、満足感が得られるよう工夫しました。パルメザンチーズをかけて、コクを出しました。メイン料理はボリュームがあるため、副菜はバランスをとってシンプルな味付けのサラダにしました。ツナを和えることで旨味をプラスし、食塩の量を減らすことが出来ました。またサニーレタスに細切りのニンジンを加え、彩りをよくしました。

給食は、カボチャの優しい甘さが出て、とても美味しかったです。鶏肉が大きめにカットされていることで、非常に満足感がありました。また学食メニューに挑戦する際は、新鮮味のある、かつ午後の授業も頑張れるような満足感のあるメニューを作りたいなと思いました。

5 まとめと今後の課題

プラスごはんプロジェクトにおける活動を行い、その成果と今後の課題が見出された。昨年度に続き、COVID-19感染拡大の影響によって、地域への活動をする機会を逸していた。

学内での活動である学生食堂を利用したメニューコンテストは前・後期と2回行い、応募のテーマや審査方法を改善しながら実施した。その結果、応募者の料理を給食利用者にアピールする料理写真が格段に良質になり、給食販売におけるプロモーション活動が実践を通して理解できてきた。また、応募メニューも第1弾から第3弾に向けて、15件、24件、20件と明らかに増加していた。応募のテーマは、今後も改善の課題として挙げられた。

本報告の一部は、第9回総会・学術大会日本食育学会にて「学食を利用し健康増進に寄与する食育の仕組みづくりの実践」(令和3年6月13日、東京農業大学厚木キャンパス)として発表した。

本活動は、十文字学園女子大学地域連携共同研究所の研究費により実施した。「プラスごはんプロジェクト」の関係学生に活動の場を提供して下さり、その成長を支援して下さった給食会社様をはじめ、学内の教職員の皆様に感謝申し上げます。

高齢者と子ども・青年の多世代交流を可能とする地域の居場所づくり

Creating a place for multi-generational exchanges
where children, young people and the elderly can be involved in the community

佐藤 陽¹⁾ 山下 倫実²⁾ 西村 百絵³⁾
Akira SATO Tomomi YAMASHITA Momoe NISHIMURA

1) 十文字学園女子大学・人間福祉学科 2) 同・心理学科
3) 同・地域連携推進センター ボランティア部門ボランティアセンター

キーワード：多世代交流 居場所づくり ボランティア体験学習プログラム 地域ボランティア活動
ボランティアセンター

要旨：高齢者と子どもの交流の居場所づくりの相談を契機に、学生が学内では体験できない地域活動につなぐボランティア体験学習をボランティアセンター事業として実施した。学生がボランティアとして、地域のさまざまな立場の人との交流の機会を得ることは、超少子高齢社会の現実を認識しながら、多世代交流の必要性を考えることにつながる。また、地域と連携するボランティア活動の一環として居場所づくりができれば地域貢献にもつながる。学生は、ボランティア体験学習を地域ボランティア活動につなげる実践に取り組むことで、主体性、チームワーク力、問題解決力等を培うことができると考えた。本学の学生が、高齢者と子ども・青年の多世代交流を可能とする地域の居場所づくりに貢献できるインクルーシブボランティア(多様な人々を排除せず包含して支え合いともに生きていけるようにする)として活躍できるように、地域連携推進センターボランティア部門におけるボランティアセンターのボランティア体験学習プログラムの実践展開から検証した。

1 はじめに

近年、社会的孤立が課題となり、地域の居場所づくりが促進されてきたが、コロナ禍で多くの活動が停滞している。その結果、高齢者はフレイル(加齢により心身が老い衰えた状態)の深刻化が生じている。「志木市高齢者保健福祉計画第8期介護保険事業計画」の実態調査結果によれば、高齢者は在宅福祉サービス等の直接的な支援が求められているが、人が健康で幸せに生活するためには、「良い人間関係」が必要と言われており、今こそサービス支援の充実とともに感染予防をしながらさまざまな人と交流する機会が必要になっている。

我が国は2025年に団塊世代が後期高齢者、2040年には団塊ジュニアが前期高齢者となり、社会保障は現役1.5人が1人の高齢者を支えることが推定されている。こうした社会に向かう上で、地域共生社会の実現が求められる今日、核家族化している次世代を担う子ども・青年と、障害のある方や単身化が増えつつある高齢者が、互いに交流して知り合い、理解し合う機会を通じ、互いに支え合う姿勢を育む必要がある。

本学のボランティアセンターでは、地域に貢献できるように学生スタッフを中心に全学部・全学科の学生へ呼びかけ、学外の周辺清掃活動等を実施してきた。本学のボランティアに関する需給調整は、ボランティアセンターに登録された機関・団体等からのニーズに対応している。こうした中、志木市社会福祉協議会(以下「社協」)の生活支援体制整備事業の生活支援コーディネーターを兼務するボランティアセンターのコーディネーターから、学生と共に高齢者と子どもたちが交流できるサロン活動を実施したいという団体としての要望があった。

学生が地域で異年齢の人たちとの交流等、学内では体験できない活動を創出する機会に参画することで、超少子高齢社会の現実を認識できる。また、前述した社会背景を踏まえ、世代間交流の場の拡充に取り組み、学生自身が地域課題に取り組むことで、経済産業省が主催した有識者会議にお

いて、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力「社会人基礎力(3つの能力・12の能力要素)」の定義¹⁾を体得する可能性があるのではないかと捉えた。

特に「主体性」、学生や地域の方々と共に「継続的に学習していく力」と、一緒に活動を運営するための「チームワーク力」を身につけ、地域課題に直接かかわることで「問題解決力」を養うことが可能になる。そこで、本学の学生に広く呼びかけ、地域社会に貢献できるインクルーシブボランティア(多様な人々を排除せず包含して支え合いともに生きていけるようにする)を体験的に学習する可能性を「地域ボランティア活動」事業を通して検証できるのではないかと考えた。

そして、本学の地域連携共同研究所の研究プロジェクト「高齢者と子ども・青年の多世代交流を可能とする地域の居場所づくり」(以下「研究プロジェクト」)として、学生が学内では体験できない地域のボランティア活動に体験参加して、高齢の方や障害のある方、子どもを理解し、さまざまな人たちが地域で共に豊かに生きていける社会(地域共生社会)を考えられるようにする。その活動実践は、高齢化率45%以上の志木市の館・幸町^{たて さいわいちよう}エリアで実施する。高齢の方や障害のある方、子ども等の多世代交流できる居場所づくりに向けて、学生がさまざまな立場の人たちの「紡ぎ手」になり、地域のさまざまな関係者(社協・地域包括支援センター・NPO・ボランティア・市民団体等)と協力して、さまざまな人たちで交流する「地域ボランティア活動」を企画運営する。

ボランティア体験学習プログラムは、学生が多様な人々と交流する「ふれあい体験」をきっかけに、学生同士だけでなく地域関係者とともに協働して、「支え合い体験」を創るものである。このプログラムを通じて、学生の社会人基礎力の変化や、多世代交流する地域の居場所づくりに具体的に つなぐ「地域ボランティア活動」事業の体験学習プログラムの有効性を検証することを目的とした。

2 ボランティア体験学習プログラムについて

ボランティア体験学習の機会には、一般的には、ボランティアセンター主導で地域関係者と調整したボランティア体験に、事前学習をした上で、学内では体験できない地域のボランティア活動に体験参加(ふれあい体験)して振り返る「フェーズ1」の段階で終わることが多い。しかし、本学のボランティアセンターの取り組みは、「フェーズ2」として、その体験学習を活かし、体験を共有した学生同士が地域関係者と関わりながら、地域ニーズ(超少子高齢化により、高齢者と子どもの多世代交流が求められている)に気づき、その解決に向けたきっかけになるようなイベント等を考え、その後、地域活動が実践できるように体験学習の機会を創る、サービスラーニングに発展的展開ができるよう試みた。こうした地域課題を理解し、その解決に向けて関係者とともに実践に取り組み、継続的な活動機会を創出する努力をすることにより、インフォーマルとノンフォーマルな教育を学習する機会になる。こうした教育方法を体験学習プログラムで展開することで、先述の能力を体験的に学ぶ可能性が見えてくるのではないかと考えた。

3 プログラムを具現化するボランティアセンター「地域ボランティア活動」事業

高齢者と子どもによる多世代交流の居場所づくり[関連SDGs目標:3すべての人に健康と福祉を、11住み続けられるまちづくりを、17パートナーシップで目標を達成しよう]に向けて、学生は地域のボランティア活動について、フェーズ1として、ボランティアセンターが関係団体と調整したプログラムで体験(ふれあい体験)し、それを踏まえて、フェーズ2として、参加した学生同士がグループになり、地域の関係者(社協、NPO・ボランティア団体等)と協力して多世代交流の機会として新たなプログラムを創り(支え合い体験)、継続的に地域活動に取り組めるように進める「地域ボランティア活動」事業を、ボランティアセンター業務の「ボランティアプログラムの開発・運営」として促進した。しかし、直接交流体験プログラムを志木市社協と志木市の関係者で17のボランティア体験学習の活動メニューとしてご用意いただいたにもかかわらず、緊急事態宣言発出に伴い中止せざるを得なかった。そこで、当初から直接交流体験ができない可能性を留意し、オンラインボランティア体験の機会として協力を要請していた坂戸市の高齢者サロン等に取り組む「よりあい*ええげえし」のオンラインサロン活動と、富士見市の障害児者余暇活動支援ボランティアグループ「あひる」に協力を依頼し、オンライン活動体験を「オンライン活動体験(ふれあい体験)」として実施

した。また、地域ボランティア活動として居場所づくりにつなぐため、志木市の関係者ととも学生支援には他市も含む関係者5団体(志木市社協、「志木子育てネットワークひろがる輪」、「レッツラブしき」、坂戸市「よりあい*ええげえし」、富士見市「ボランティアグループあひる」)が最後まで支えてくださった。

4 ボランティア体験学習プログラム「地域ボランティア活動」事業の展開方法

大学ボランティアセンターガイド(2005)では、「プログラム開発」について、活動フィールドとの密接な相談・調整の重要性、大学の教育・研究活動の一環としてプログラム開発と評価が不可欠であり、この2つのミッションを同時に適切に満たすことが求められるとしている²⁾。

本学のボランティアセンターにおいては、大がかりなプログラム開発は初めての試みであり、社会参加を意識しすぎて学生の主体性を損ない、誘導的にならないよう配慮し、先述した「支えあい」の体験学習になるよう「体験」と「グループワーク(振り返りと話し合い)」を用いる体験学習の枠組み(図1)を基軸にした³⁾。



図1 体験学習の枠組み

学生が主体的に参加できるように、事前学習を3回開催し、①ボランティアするにあたって、②実施する地域のボランティア体験活動の紹介、③活動に必要なことの学習(前項「プログラムの視点」)等、目的や方法を伝えた。こうした過程を経て自ら参加申し込みをしてきた学生を対象に、フェーズ1として、オンラインと直接交流体験の機会をつくる。その後、フェーズ2として、「高齢者と子どもによる多世代交流の居場所づくり」に向けた多世代交流イベントの企画運営に学生は地域関係者と協力して取り組む。この協働の過程が重要であり、学生たちの体験と振り返りを通じて、自分たちが高齢者、障害のある方、乳幼児・児童・生徒とやりたいことの意向を確認しながらグループを編成し、随時、地域関係者とやりとりができるようオンラインツールを活用して協議する機会をつくる。このやりとりにおいて、コーディネーション機能にコミュニティワークの手法を用いて社会資源の創出に向けられるようにした⁴⁾。すでに、高齢者と子どもの活動を支える行政担当課に必要に応じて下支えの協力を要請できる関係づくりもしており、高齢者については社協と地域包括支援センター、高齢関係のNPOやボランティア・市民団体、子どもについてはNPO、事業者、ボランティア・市民団体とプログラムに向けた調整を行い、地域ニーズに応えるこのプログラムに必要な社会資源を整えた。そして多世代交流イベント実施後には、イベントと「地域ボランティア活動」事業全体の振り返りを実施するとした。

そして、ボランティアセンターのコーディネーション機能「創り出す」にコミュニティワークを活かし、地域ニーズの共有を可能とする多様な社会資源とのネットワーク化を構築し、学生の成長とともに、地域社会とのつながりを築くボランティア体験学習プログラム「地域ボランティア活動」事業について、以下の展開方法の構築を試みて取り組んだ(表1)。

表1 「地域ボランティア活動」事業の具体的な内容と展開プロセス

ボランティアセンター 地域ボランティア活動 「地域ボランティア活動」とは、学生が地域の課題に気づき、その課題を解決することに関心を持ち、自ら進んで地域の関係者と連携し、ボランティアとして地域に貢献する活動を行うこと。本事業を通じて体験的に学習し、実際の地域活動につなぐ。			
事業説明会6月5日、9日、19日(全3回) [事前学習(認知する段階)]		7月3日~10月23日[プレ体験(意識する段階)]	
□事業の目的 高齢・障害のある方、子どもを理解し、さまざまな人たちが地域で共に豊かに生きられる社会(地域共生社会)を考えながら、高齢化率45%以上のA市の旧地区Cエリアで、高齢の方と子どもが多世代交流できる居場所づくりにより、学生が「おぎん」となり、地域のさまざまな関係者(社協・地域包括C・NPO・ボランティア・市民活動団体の住民等)と協力して、みんなも活動を支えていけるようになることを目的としています。 □参加学科・学年 人間福祉・心理[人間発達心理]・食物栄養・児童教育・文芸文化・幼児教育・メディアコミュニケーション(学科1年、2年、3年、4年) □参加動機 当事業の趣旨を理解しての参加とともに、自学科の学びや就活に活かす、ボランティアしてみたい、人や地域に役に立ちたい、いろんな人と関わり、コミュニケーション力を高めたい等、さまざまな学生の希望がある。		①Zoomでの地域ボランティア活動体験 ・障害児者余暇活動支援・高齢者の交流・学習サロン ②地域で直接ボランティア活動体験 ・高齢者サロン・高齢者施設入所者とオンライン交流 ・高齢者各種体験で交流・小学生と遊びで交流 ・小学生学習支援・子育てひろば・赤ちゃんファミリーイベントサポート・おやこひろば・防災フェスタ ①と②から各1つ体験	
9月~12月[実践準備(意識する段階)]	12月11日 [具体的体験(認識する段階)]	2月5日[ふりかえり(理解する段階)]	3月
□9/11活動のふりかえり(ZOOM) ①心の高齢者、障害児者、乳幼児から児童・生徒と交流するボランティア体験(地域ボランティア活動プレ体験)を通じて気づいたこと、考えたことを参加学生同士で話し合う。 プレ体験の場を提供いただいたNPO、市民活動団体の住民、ボランティア、地域包括C、社協の関係者に大学に来てもらい、学生たちと12/11の事業目的に向けた取り組みを企画運営する準備に取りかかる。	□高齢者と子どもが多世代交流できる居場所づくりにつなぐイベントを学生と地域関係者で実施 (Cエリア)にあり、プレ体験で関わった第〇小学校やA駅周辺の商店街等を想定しながら、これまで準備してきたイベントを実際に自ら主体的に開催させる。	□地域ボランティア活動の体験学習を終えて、関わった地域関係者と学生で活動をふりかえる。 学生は地域におけるさまざまな施設・団体等が実施する活動にボランティア体験し、その後、さまざまな地域関係者と地域課題の解決に向けた活動につなぐイベントを実施した経験について、関係者と共に検証する。そして、今後、地域で関わられるか考える。	□学生の学びをアンケート調査分析 (結果は簡単にフィードバック)活動から得られるもの ・主体性 ・継続的に学んでいく力 ・チームワーク力 ・問題解決力 ・インクオーブボランティア

5 「地域ボランティア活動」事業の実際

全学生に呼びかけ説明会(4月14日、15日(同日2回)、5月12日の4回)に90名、事前学習(6月5日、9日、19日の3回)には44名が参加した。緊急事態宣言発出に伴い準備した直接交流プログラム(17活動)は中止し、地域のボランティアグループ(①高齢者サロンをオンラインで実施する「よりあい*ええげえし」の活動、②知的障害児者余暇活動支援をする「あひる」の活動)の「オンライン活動体験(ふれあい体験)」(7月3日~9月6日に6回)に延べ43名が参加した。この夏期の活動の振り返り(9月11日)には28名が参加し、ボランティアセンター主導で実施した。そこからは、学生がグループ化して多世代交流に向けたイベントを、1に記した3市の地域関係者と協力して企画運営に向けた準備を実施した(20回以上ミーティングを実施)。そして、子ども・高齢者・障害のある方と学生25名の総勢59名で「オンラインクリスマス会(支え合い体験)」(12月11日)が実施された。活動全体の1年間の振り返り(2月5日)には20名が参加し、その後、7名が同事業の次年度の地域ボランティア活動サポーターとして新たな参加者を支え、地域活動にも参画していくことになった。

6 具体的な活動内容と学生の関わり

事業の前半部分「フェーズ1」(事前学習、オンライン活動体験(ふれあい体験)、オンライン活動振り返りの段階)は、ボランティアセンターが中心に行い、事業後半「フェーズ2」(支え合い体験準備、支え合い体験(オンラインクリスマス会))は、学生が主体となり地域関係者と協働し、イベント開催に向けて企画運営を行える学生の活動を地域関係者と調整しながら支援を行った。約1年にわたる事業(図2)となるが、土曜日に講座や授業、また夏季期間中に実習がある学科も多く学業優先を前提とし、自主性を尊重することを事業説明会から伝え、活動の参加については学生の意志を尊重した。また、本来、ボランティア活動は、自主的に取り組むものであるが、コロナ禍での活動となるため、本事業の趣旨を理解してもらい申し込み時には保証人氏名(保護者)と学生本人に同意書を提出してもらふこととし、同意書提出を必須とした。地域関係者とは、コロナ禍の対応を確認しながら活動実施に向けて合意書の取り交わしを行った。本事業はすべて、参加者の同意のもと記録用に録画・撮影を行い、撮影した記録の活用については学生・地域関係者とも同意書をとって実施した。

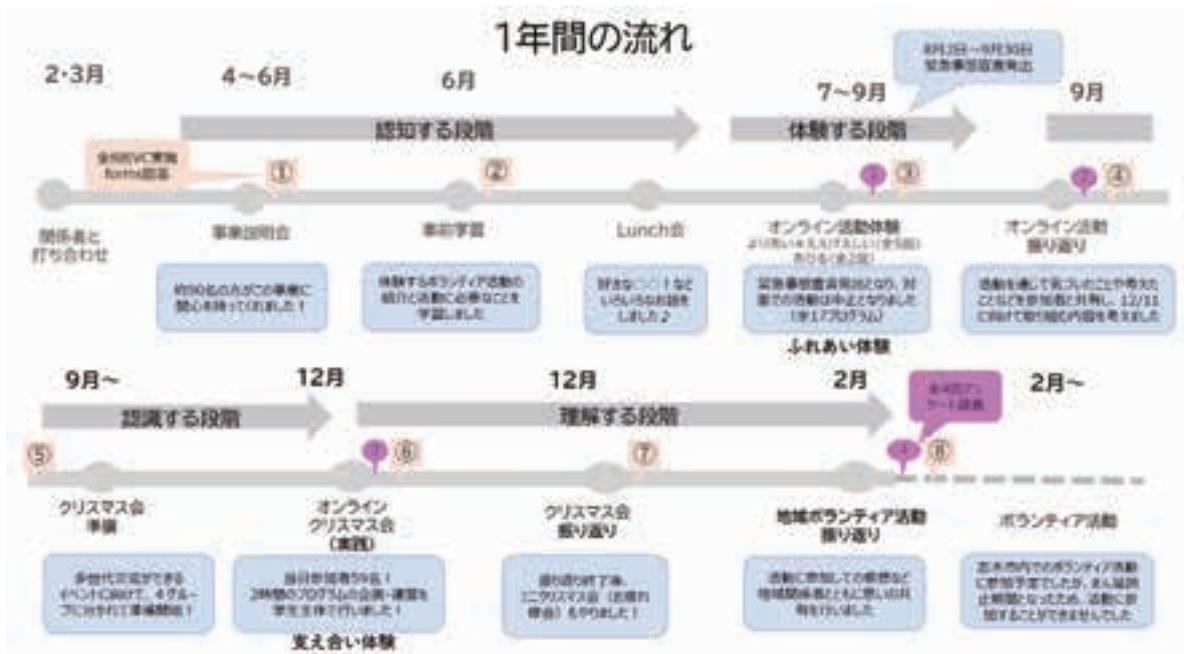


図2 約1年にわたる事業

以下は、活動内容と学生の関わりの詳細である。

【7～9月 ふれあい体験（オンライン活動体験）】

日時：7月3日（土）～9月6日（月）の間、全6回 延べ43名参加

オンライン活動体験は、「ボランティアグループあひる（A）」と「よりあい*ええげえし（B）」の活動で、全6回を実施した。Aの活動は、障害児者への関わりを中心にしていて、学生たちは、オンラインを介した活動の中で、どこでどのように声かけしていいか戸惑い、なかなか関わるところには至らず、障害のある人を知る機会としての体験になっている面があった。Aのメンバーは、本学に来校し、事前に当日使用する工作物や関係者への配布等、下準備に労力をかけていただいた。直接交流であれば、学生が障害児者と接しながらボランティアメンバーが関わり方の声かけをしながら交流を育めるが、オンラインでの活動としての難しさをAも実施しながら認識していた。

Bの活動は、学生の受け入れに向けて、団体のメンバーに事前調整をしてくださり、参加高齢者の方々も学生への受容的な姿勢をもち、孫世代の若い学生たちを快く受け入れ、学生たちに関心を示してくださった。さまざまな質問を通じてコミュニケーションをとられるだけではなく、学生が全体を把握できるよう事後にグループ内の話し合いの内容について学生に発表させてくれていた。当初、緊張していた学生も終了時までには表情が和らぎ、有意義な時間になっていた。

表2 オンライン活動体験一覧

		日付	内容	参加者
1	A	7月3日(土)13:00～15:00	あひるお茶会 桃太郎のぬり絵やクイズ、じゃがりこでポテサラづくり	8名
2	B	8月2日(月)10:00～12:00	オンラインよりあいの会 シニア世代の方たちと楽しいおしゃべりタイム♪	10名
3	B	8月9日(月)10:00～12:00	オンラインよりあいの会 シニア世代の方たちと楽しいおしゃべりタイム♪	5名
4	A	8月21日(土)13:00～15:00	桃太郎劇場上映会（VC学生スタッフ） みんなで工作をしオリジナル傘づくり	10名
5	B	8月30日(月)10:00～12:00	オンラインよりあいの会 栄養と健康な暮らし～夏の終わりに～	2名
6	B	9月6日(月)10:00～12:00	オンラインよりあいの会 シニア世代の方たちと楽しいおしゃべりタイム♪	8名



写真1 「あひる」活動時の様子



写真2 「よりあい*ええげえし」活動時の様子

【9月 オンライン活動体験振り返り】

日時：2021年9月11日（土）10:00～12:30

37名参加（学生28名、地域関係者7名、ボランティアセンター2名）

地域関係者に運営のファシリテーターになっていただき、学生たちが活動を改めて振り返り、ボランティアするつもりが双方向であることに気づいたり、対象者のことを知ったり、ボランティアに参加する人たちの魅力に触れたり、直接ではないがオンラインを通じての体験でも新鮮な学びを学生たちがしていることが分かった。ファシリテーターがその都度、学生の感想にその活動時の実際の意味等も補足してくれることで、学生たちの学びが深まっていたように思う。また、この機会を経て、2団体のファシリテーターはオンラインという参加の手軽さも含め12月の参加に意欲的になってくれた。志木市内での対面活動がすべて中止となってしまったため、志木市で取り組む予定だった活動先の現状と課題を直接関係者から聞き、情報環境の整備、何らかの交流機会の必要性等が示され、学生たちは各自のオンライン体験を通じた取り組み可能な内容とすり合わせ、地域のファシリテーターとともに4グループで話し合った。学生たちから提供する発想だけでなく、地域の高齢者が子どもたちに何かを発表する、一緒に何かを作る等、双方向性のアイデアも示された。

【9～12月学生によるグループMTG（ミーティング）】

9月11日振り返り時の4グループを基本として、Zoomで何か出し物をするグループ3つ、何か作って届けるグループ1つの計4グループに分かれ、12月の取り組みに向けて改めて趣旨を確認し、グループMTGを実施した。ここまで学生同士の直接の交流はなく、学生間での関係が築けていないので、はじめはお互いを知ることができるよう自己紹介等工夫した。後半は、振り返りを踏まえグループでなにをやりたいのか、できるのか、学生たちの意見をたくさん聞き出せるよう促し、自分たちで取り組んでいけるよう意識づけを行った。グループMTG終了後、本格的にオンラインツールの活用をはじめた。12月の取り組みは、学生が参加したオンライン活動体験を活かし、地域関係者と話し合い、関わった高齢者と障害児者、志木市の館・幸町を中心とする高齢者と子ども達とその保護者等と互いに知り合い、多世代交流の居場所づくりに向けた活動になるよう、学生がグループごとの出し物を考え、それらを全体で取りまとめ、有意義な機会になるように主体的に取り組んでいた。具体的には、各グループから進行・サブを決め、全体運営会議で4グループの内容をすり合わせた。地域関係者のアドバイスを得ながら、Zoom等を活用したMTG（グループ間/学生間）を実施し、活動日の実務の準備を以下のように企画運営した。

写真3 準備の様子



3-1 進行・サブMTGの様子



3-2 学生全体MTGの様子



3-3 材料仕分けの様子

【12月 オンラインクリスマス会～多世代でわくわくの輪を繋げよう～】

日時：2021年12月11日（土）10:00～12:00

参加者：59名/学生19名、地域：志木市社協事業参加住民11名、志木子育てネットワークひろがる輪18名（大人8名・子ども10名）、ふれあい館もくせい（レッツラヴしき）2名、ボランティアグループあひる4名、よりあい＊ええげえし3名、ボランティアセンター2名

内容：多世代クイズ、手遊び、リースづくり、体操等

一人暮らしの高齢者や乳幼児の親子は、志木市の地域関係者が合意を得て小学校の活動拠点に集まり、大学と会場をZoomでつなぎ、ハイフレックス型で開催した。乳幼児から障害者と高齢者や壮年を含め80代の方が参加し多世代交流の機会となった。オンライン開催のため、はじめにクリスマスの歌を歌い、Zoomの背景をクリスマスらしく工夫し、一体感が得られるよう演出した。

当日のタイムスケジュール	
10:00	～内観～
10:05	はじめに
10:10	多世代クイズ
10:20	手遊び
10:30	休憩
10:40	リース工作
11:00	休憩
11:10	終わりに
11:20	終了

図3 当日のタイムスケジュール

初めに「ジングルベル」を歌い、雰囲気づくりをしたが、子どもたちが大きな声で元気に歌

ってくれ、クイズの時間には「知ってるー！」と元気よく発言してくれた。子どもたちのダイレクトな反応とともに、障害のある人も高齢者世代もプログラムに主体的に参加してくださり、クイズを一生懸命考え、答えようとしてくれている様子から、参加者全体が楽しんでくれていることを学生たちも実感することができた。リースづくりでは、参加者との交流を楽しめるように3グループに分かれて行った。小学校でもタブレットを使用し、各テーブルを回ってくださったので、会場から参加してくださった方たちとも交流をすることができた。事前のリハーサル不足のチームは進行・運営に支障はあったが、大きなトラブルもなく予定どおり実施することができた。予定していた時間を少し超過したが、学生たち自身で調整し、全てのプログラムを終えることができた。この背景には、最後まで一緒に学生たちを見守りサポートしてくださった地域関係者の方々の存在が大きい。地域の方々の尽力により、会場とのやりとりもスムーズに行うことができ、地域の方たちは、サンタ帽子やクリスマスのイラストが描かれている洋服を着用して参加してくださった方たちもおり、クリスマス会の雰囲気づくりにも協力してくださった。また、プログラムの中で、子どもから障害者、高齢の参加者と学生が交流できるよう、声かけを配慮してくださり、最後に各団体より一言をいただいた際にも、学生たちへこれまでの労いの言葉と感謝の気持ちを述べてくださった。各団体の方々がここまで応援し、一緒に楽しみ、プログラムを創りあげてくださったことが学生たちにも伝わり、緊張とともに楽しみ、イキイキとした表情で参加できていたように思う。

活動後、社協に会場の様子を伺うと、当日会場運営ボランティアとして、市内で活動している団体が協力してくださり、「オンラインの取り組みに参加するのは今回が初めてで、間近で様子が見ら

れてよかった」と話していたという。また、参加された高齢で一人暮らしをされている方たちは「一人では、工作はしないから楽しかった」「すごいね」と言ってくださっていた方が多かったようだった。また2時間という時間設定のため、学生もプログラムの順番や運営を配慮していたが、子どもたちが最後まで飽きずに楽しんで参加してくれるのか不安に思っていた。しかし、飽きて画面の前からいなくなる子どもはおらず、終始楽しんで参加してくれていた。終了後、子どもたちの関係者に話を伺うと、事前に団体の方たちから参加して下さった親たちに当日のプログラムを共有し、当日は親たちが「次は〇〇やるみたいだよ」などと子どもたちに声をかけてくれていたとのことであった。

表3 学生たちが考えたプログラム内容

グループ	内容・工夫した点
全体	はじめに地域関係者に協力いただき、団体・参加者の自己紹介を行った。みんなが知っている「ジングルベル」を歌い、クリスマス会のスタートとした。
アイスブレイク	多世代クイズでは、誰もが答えやすく画面でも参加できるよう〇・×クイズとして、参加者にはジェスチャーでこたえてもらい、各団体の代表者に回答してもらった。問題も鬼滅の刃やオリンピックに関する問題などタイムリーなものを選び、盛り上げられるようにした。
手遊び	手遊びでは、「クリスマスいとまき」と「サンタが道を」の2曲を行い、クリスマスをテーマにストーリーを考え、みんなでサンタクロースやトナカイになった。最後には、Zoomの機能を使い、担当学生がトナカイの耳をつけた姿に変身し、会場を和ませた。
リース	リース工作では、「記念に残る物を作りたい」という思いで企画し、ひとりずつ作成した。画面越しでは中々参加者と交流ができないため、ブレイクアウトルームを活用し、グループに分かれ参加者との交流を楽しんだ。最後には、グループの代表者に作ったリースを見せてもらい感想等を聞かせてもらった。
体操	体操では、座っての参加は疲れてしまうため、簡単なストレッチと「あわてんぼうのサンタクロース」を座った状態で全員で歌って踊った。「あわてんぼうのサンタクロース」も誰もが知っており、プログラムの最後に盛り上げられるようにした。
全体	最後には、各団体の代表者、また参加して下さった方たち、学生と感想を共有した。

写真4 当日の様子



(4-1 Zoom 参加者)



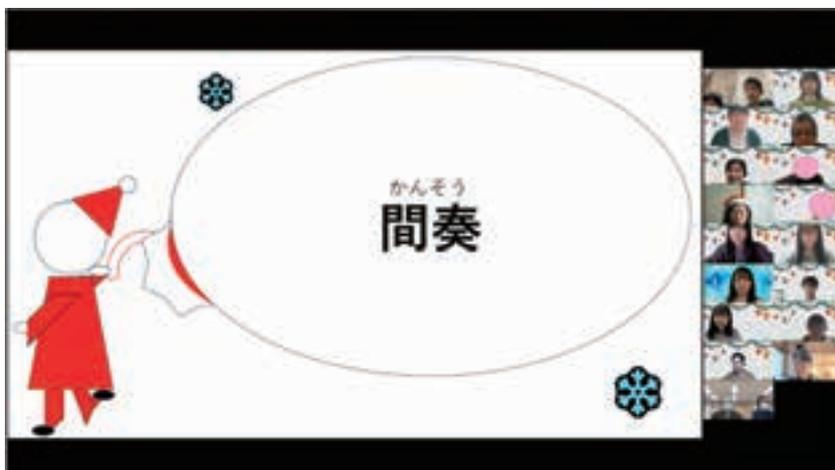
(4-2 多世代クイズ)



(4-3 リースづくり)



(4-4 手遊び)



(4-5 歌・体操)



(4-6 地域活動拠点としての小学校の様子)



【2月 事業最終振り返り】

日時：2022年2月5日（土）10:00～12:00

参加者20名（学生12名、地域関係者6名、ボランティアセンター2名）

事業全体の振り返りをして、事業全体の目的や視点等の意味づけを確認するため、1年間の取り組みの様子をスライドにまとめ、参加者みんなでこれまでの経緯を時系列に説明と写真ではじめに確認をした。その後、3グループに分かれグループワークをし、地域の方にファシリテーターを担ってもらいながら一人ひとり感じていることを話し互いの思いを共有した。これまでとは違い、発表者もすぐに決まり、積極的に学生たちが発言する姿が見られ、活発にグループワークが行われていた。どのグループもとてもよい雰囲気、時間が足りないくらいであった。約1年間にわたり、本事業に協力し、学生たちの活動を見守りサポートして下さった地域の方たち全員が当日参加し、学生たちの思いをしっかりと受け止めてくださっていた。グループワーク後には、地域の方たちにも一人ずつ、今回の取り組みについて話をさせていただいた。学生たちは真剣な表情で、真剣に聞いている姿が印象的であった。最後に地域の方たちの話を聞いての感想を一人ずつに述べてもらうと「次年度も参加したい」「対面での活動をやってみたい」などと前向きな意見を話している学生もいた。本来であれば、春休み期間に志木市社協がプログラムメニューを調整して下さっており、その地域の活動への参加を進め、継続して地域と関わっていく機会づくりを考えていた。しかし、まん延防止期間となり夏同様、対面での活動を進めていくことができなくなった。

7 WEB 調査の分析結果による地域ボランティア活動事業の学生への成果

地域ボランティア活動の体験学習プログラムの成果として、7月～9月のZoomのオンライン活動体験、12月11日のオンラインクリスマス会を通して、学生の①社会人としての基礎的能力、②社会の一員としての意識、③ボランティアに関する価値観の変化について探索的に検討することを目的とし、最終的にインクルーシブボランティア（多様な人々を排除せず包含して支え合いともに生きていけるようにする）を体験的に理解できたかどうかについても明らかにするため、記名による質問紙法自記式でGoogle Formを活用した集合配信・集合回収する参加学生に対するアンケート調査を以下のとおり行なった。7、8月ふれあい体験実施前（第1回測定）、9月支え合い体験実践準備

開始時（第2回測定）、12月支え合い体験実施後（第3回測定）、翌年2月5日の体験プログラムふりかえり後（第4回測定）の4時点で実施した（先述の図1参照）。調査対象者（平均年齢19.46歳、SD=0.92）は、第1回調査：2021年8月2日～9月6日実施に28名が参加、第2回調査：2021年9月11日～9月30日実施に21名が参加、第3回調査：2021年12月11日～12月24日実施に18名が参加、第4回調査：2022年2月5日～7日実施に11名が参加した。倫理的配慮については、WEB調査の実施に際して、以下の項目をフェイスシートに明記し、調査への参加に同意していただけるか否か、意思表示を求めた。「調査に参加しない」を選択した場合、それ以降の調査項目は表示されず、お礼の文章が表示されるよう設定した。特に、記名式の調査であったため、その情報の利用方法とプライバシーの保護については当日の教示でも十分に説明するよう配慮した。

学びの成果として、社会人基礎力の「課題発見力」や「ストレス対処力」が向上し、「オンラインクリスマス会」で役割遂行感や社会的居場所感が向上したことが分かった。受動的から能動的にスイッチを切り替えるからこそ、それらが高まり、これまで以上の自身の耐性が多様な能力とともに身につく、主体的に地域活動に取り組む姿勢が育まれると考えられた。また、学生が地域の方と0から1の活動を創造する体験をして、互いに喜びや支え合いの評価を聞き、活動の意義をコーディネーター等から聞くことで、自己有用感が高まり、地域や社会を自分の居場所と評価したといえる。しかし、「計画性と実行力」や「主体性」の変化は、向上する学生と低下する学生がおり、ボランティアセンターが早期に学生の変化を発見し支援する必要がある。そして、インクルーシブボランティア（多様な人々を排除せず包含して支え合いともに生きられるようにする）は、変化がないか向上する傾向が認められ、学生同士、地域の方やコーディネーターとの関わり、幾重にも多様な人と関わり、その人たちと支え合いながら地域で共に生きていきたいという価値観が活動で育まれたと考えられる。互いにポジティブな評価を伝え、一緒に問題を乗り越えていくために必要不可欠なコミュニケーションを通して、互いに支え合っている感覚を得ている可能性があり、こうした経験が社会人基礎力、インクルーシブボランティアに対する考え方にポジティブな変化をもたらす可能性があることが示唆された。全4回の回答に協力してくれた学生には、調査結果報告を作成しフィードバックを行った。この調査結果報告によって、自らが体験学習を通じて、主体性、継続的学習力、チームワーク力、問題解決能力などの社会人基礎力が身につけられたかどうか、社会の一員として果たすべき役割に関する意識に変化があったか、インクルーシブボランティアを体験的に理解できたかどうかを確認できるようにした。また、全行程に参加した学生には、修了証も配布した。

コロナ禍での制限がある中、これらの成果からボランティア体験学習プログラムの有効性を確認することができた。学生が地域関係者となつながら、出会った人たちと共に生きる姿勢を学び、多世代交流に関心をもった。こうした関わりを円滑に支え、多様な困難に直面する学生の拠り所として機能するボランティアセンターの役割が大切であることも分かった。志木市社協と地域関係者とともに、3月に地域活動に学生をつなぐ準備をしていたが、まん延防止措置期間となり中止せざるを得なかった。今回のプログラム参加者から7名が、同事業の次年度の地域ボランティア活動サポーターとして新たな参加者を支え、地域活動にも参画していくことになり、3月下旬に研修を実施した。そして、本年度交流した地域関係者の地域活動との関わりを含め、4月から本学の所在する新座市の同様の活動を実施する地域関係者と協議し、新年度のスタートに取り組む。

本研究により、高齢者と子ども・青年の多世代交流を可能とする地域の居場所づくりに向けて、ボランティアセンターによるボランティア体験学習プログラムが有効であることを確認することができた。

アンケート調査は、本学令和3年度研究倫理委員会で審査承認された受付番号2021-009『高齢者と子ども・青年の多世代交流を可能とする地域の居場所づくり研究における「地域ボランティア活動に参加する学生へのアンケート調査」について』による実施である。また、本稿は、本研究の成果をまとめた『2021年度（令和3年度）地域連携共同研究所研究プロジェクト高齢者と子ども・青年の多世代交流を可能とする地域の居場所づくり報告書-令和3年度ボランティアセンター「地域ボランティア活動」事業報告-（佐藤陽・山下倫実・西村百絵）』を活用している。

注

- 1) 経済産業省が主催した有識者会議において、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力を「社会人基礎力（3つの能力・12の能力要素）」として定義している。この社会人基礎力の3つの能力「前に踏み出す力（アクション）、考え抜く力（シンキング）、チームで働く力（チームワーク）」を本論の地域とつながる意義と結びつけている。[経済産業省 (<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/2021.9.29>)]
- 2) 社会福祉法人全国社会福祉協議会・全国ボランティア活動振興センター（2005）『大学ボランティアセンターガイド』
- 3) 佐藤陽（2002）「福祉教育実践方法としての体験学習における学習援助者役割に関する考察」『日本地域福祉学会 日本の地域福祉第15巻』, 63-72.
- 4) 数か月間にわたるプログラム開発を「期間限定型」「タスク達成型」のプログラムと呼び、魅力的な活動にするためには、既存のネットワークだけでなく、開発のプロセスに多様な新しい人や組織に関与してもらい、ネットワークを意識的に広げていく視点も大切としている（社会福祉法人全国社会福祉協議会・全国ボランティア活動振興センター「大学ボランティアセンターガイド」2005, 28-30.）

知的障害特別支援学校卒業生の生涯学習としてのオープンカレッジ

Open college of lifelong learning for Special support school graduates

細谷 忠司¹⁾
Tadashi HOSOYA

中西 郁¹⁾
Kaoru NAKANISHI

岡本 明博¹⁾
Akihiro OKAMOTO

1) 十文字学園女子大学・児童教育学科

キーワード：特別支援学校 生涯学習 オープンカレッジ 余暇

要旨：知的障害特別支援学校の高等部を卒業した生徒が、大学等の場で学ぶ機会は一般の高校生と比べて極端に少ない。しかし、現実では、卒業後も学ぶ機会を求めており、生活の質を高めるために余暇を充実させたいという願いを持っている人は多い。そのような人のために、大学でオープンカレッジを実施して、趣味や仕事に関する講義を通して、大学生とともに学ぶ機会を作ることにした。参加者にアンケートを実施して、アンケートからまとめられた課題を明らかにすることにした。参加者のアンケートからは、このような学びの機会に非常に高い満足度を示し、今後とも学ぶ機会を欲するという意見が多かった。しかし、余暇に関するアンケートでは、ゲームや SNS などに偏る傾向が強く、卒業後の生活の課題が明らかになってきた。

1 はじめに

知的障害特別支援学校では、高等部の生徒の生涯学習に向けた取り組みとして「進路学習会」や「社会人マナー教室」等を計画的に実施している。平成 19 年「特別支援教育の推進について（文部科学省）」の通知や平成 26 年の国連の障害者の権利に関する条約の批准等により、特別支援学校に在籍している児童生徒の教育は充実し、社会との交流も推進されるようになってきている。しかし、高等部を卒業した後の進路は依然として就労が中心であり、大学や専門学校等へ進学することはほとんどない。また、卒業後は企業や就労支援センター等での生活が中心となり、地域社会で学ぶ機会がほとんどないのが現状である。

そこで、このプロジェクトでは、大学のキャンパスを活用してオープンカレッジを実施し、高等部卒業後の参加者が、自分の生活を豊かにする支援を行うことを目的とした。

2 実施に至る経緯

(1) 対象

県内の知的障害特別支援学校 A 校・B 校の卒業生にオープンカレッジの案内文を配布し、条件を満たし希望する者を参加者とした。9 名の希望者があり、全員男性であった。参加者の平均年齢は 20 歳であった。一緒に学習するのは本大学の学生 6 名であり、全員女性であった。

参加の条件は次の 4 点である。

- ・知的障害特別支援学校の高等部を卒業して 5 年以内の人。
- ・大学のキャンパスで勉強してみたいと思っている人。
- ・スマホ等を使ってメールで連絡ができる人。
- ・公共交通機関を利用して大学まで来ることができる人。

(2) 募集方法

A校B校の同窓会を通じてチラシを配布し希望者を募った。応募は個人のスマホから Google Form により行った。

(3) オープンカレッジの主な内容

オープンカレッジは3日間にわたって実施した。主な内容は①あいさつや発表等のコミュニケーション活動、②音楽やゲームなどの余暇活動の体験、③講義、の3つで構成されている。大学生とグループを組み、共に相談し工夫しながら活動できるようにした。毎回、大学生と一緒に学食で食事をしながらコミュニケーションを取る時間を設定した。

内容を決定するにあたっては、先行研究より明らかになった課題を基に、いくつかの新しい取り組みを入れることにした。

- ・Zoom などオンラインの取り組みの学習。
- ・応募や連絡は ICT を活用して実施する。
- ・将来の余暇につながるよう、音楽等の活動を取り入れる。
- ・レジリエンスについて学ぶ。
- ・異性と適切な距離関係をもってかかわる。
- ・大学での活動を楽しむ。

等である。

(4) 実施するうえでの配慮点

知的障害者の場合、突然の発表では緊張してイメージをまとめられないことがあるので、事前に自己紹介シートを配布し、大学生と一緒に自己紹介シートを作成したうえで、発表するようにした。初めは緊張していたものの、少しずつ慣れてくると、短いアドリブも入れることができるようになり、他者の前で落ち着いて発表することができるようになった。

個人情報には特に気を付け、表に記入してもらうとともに、一人ずつ聞き取りをして、写真撮影や掲載などについての許可を得ることにした。

自己紹介メモ

名前
今の仕事
好きな食べ物
趣味（しゅみ）
好きなアイドル
その他なんでも

写真について

写真を写して良いか教えてください。
名前や会社名は出しません。

名前 _____

- 1 記録のために写真を写す。 よい わるい
- 2 新聞やテレビが来た時に、写真を写す。 よい わるい

3 活動内容と活動の様子

(1) 1日目

1日目はガイダンスと自己紹介からスタートした。はじめての大学での活動ということで、ガイダンスでは緊張している様子が伺えた。高校時代の友達も参加していることが分ると、思い出話などをしながら和やかな雰囲気となってきた。

自己紹介は緊張して自分の意見がまとまらないことが予想されたので、事前に大学生と自己紹介カードを作成し、落ち着いて発表できるようにした。参加者からの質問もあり、楽しく過ごすことができた。大学生にとっては障害のある人とのかかわりの経験が少ないために緊張していたが、想像以上に立派な発表に驚くと同時に、自分たちもしっかり話そうという意識も生まれてきた。

「音楽を楽しもう」の講義では、音楽担当の先生とゼミの学生も参加して、一緒になって楽しんだ。大学生が音楽クイズを出してくれたり、大学生と一緒に演奏したりすることができ、とてもリラックスして楽しむことができていた。当日のアンケートからも、「音楽が楽しかった」という意見が多く、余暇活動としての音楽の可能性を確認することができた。

十文字学園女子大学 ライフカレッジ 11/27

高等部を卒業して、それぞれの場所で仕事をがんばっていることと思います。
 楽しく仕事はできていますか？ 友達はできましたか？
 今日は仕事のことを忘れて、大学でキャンパスライフを楽しんでください。



【今日の予定】

No.	時間	内容	説明
1	10時	開会式	あいさつとライフカレッジの大きめに説明をします。
2	10時10分	自己紹介	私の名前は・・・です。 今は・・・・の仕事をしています。 好きな食べ物は・・・・です。 好きなアイドルは・・・・です。 など
3	10時30分	今日の連絡	今日の日程について説明をします。
4	11時	音楽を楽しもう	音楽をさいたり、楽しんだりします。
5	11時40分	次回の連絡	時間と持ち物についての説明、アンケート。
6	12時	昼食	近くのコンビニに買いに行きます。食事は、カフェで。
7	12時30分	終了	気をつけて帰ってください。

【お願い】

ライフカレッジのことやみなさんの仕事のことを教えてほしいと思います。アンケートに記入をお願いします。





(2) 2日目

2日目はゲームと講義を中心の活動とした。ゲームは大学内の施設をオリエンテーション形式で回った。大学の資源を調べたり、大学生と一緒にクイズを解いたりして、大学の施設を探索することができた。参加者は大学の敷地の広さに驚いたり、感心したりしていた。パソコン教室ではたくさんのパソコンが設置されていることと、そのような教室がいくつもある事に驚くと同時に、これからはパソコンを使って生活をする必要性を感じてくれた。図書館では蔵書の量に驚くとともに、雑誌など自分たちにとって身近なものも展示されており、今後は地域の図書館を活用してみたいという意見も出された。人工芝のグラウンドの見学では、ナイター設備のある立派な施設に感動していた。学食のメニューを調べるクイズでは、自分たちの会社の食堂に比べてずいぶん安いことに驚くなど、大学生活について、いろいろ調べることができた。

講義では、生涯にわたって必要な力について、大学生とともに考え、それぞれの考えを発表した。自分の進路を決める時にはどうするのかということや、やりたいことを決める時にはどうするのかといったことについて考え、自分の考えをグループで発表した。2日目ということで発表にも慣れてきて、自分の考えを堂々と発表することができていた。障害はあっても堂々と自分の意見を述べる姿に、参加した大学生も驚き、自分の発表について反省している学生もいた。

十文字学園女子大学 ライフカレッジ 12/18

高等部を卒業して、それぞれの場所で仕事をがんばっていることと思います。
 楽しく仕事はできていますか？ 友達はできましたか？
 今日は仕事のことを忘れて、大学でキャンパスライフを楽しんでください。

【今日の予定】

時間	内容	説明
1 10時	はじめの会	あいさつとライフカレッジの大きめに説明をします。
2 10時10分	ゲーム キャンパスツアー	大学の10の謎に答えます。時間までにもどってきてください。
3 10時40分	表彰式	表彰式とばつゲーム 賞品もあります
4 11時	講義「大切な力」	将来大切な力とはなにか？ 教育学の授業です。
5 11時50分	アンケート	アンケート
6 12時	昼食	近くのコンビニに買いに行きます。 食事は、カフェで。
7 12時30分	次回の連絡	気をつけて帰ってください。 次回は1月8日です。

【お願い】
 ライフカレッジのことやみなさんの仕事のことを教えてほしいと思います。
 アンケートに記入をお願いします。




(3) 3日目

3日目はZoomを使って会議をすることを経験した。大学生とペアのチームを作り、各教室に分かれてZoomの使い方とZoomを使った話し合いやゲームを行った。

はじめにZoomのリアクションやチャットの使い方の練習をしたが、スマホの活用に慣れているだけのことはあり、すぐにツールを使いこなして、会議にもスムーズに参加することができた。

講義では、仕事をする上で困った時の対応やつらくなった時の相談の仕方など方法についての講義を聞き、自分の体験も交えて意見発表をすることができた。

3日間を通して、カフェテリアと学生食堂を使用して食事をすることができた。大学の施設を活用することはとても新鮮であり、大学生との食事をしながらの話し合いはとても有意義だったようである。

十文字学園女子大学 ライフカレッジ 1/8

高等部を卒業して、それぞれの場所で仕事をがんばっていることと思います。
 楽しく仕事はできていますか？ 友達はできましたか？
 今日の仕事のことを忘れて、大学でキャンパスライフを楽しんでください。

【今日の予定】

時間	内容	説明
1 10時	今日の予定	742 教室
2 10時 10分	パソコンを使った勉強	ズームを使って勉強や会議をしてみます。 まずは、ズームの練習から。
3 11時	休み時間	
4 11時	大学の講義をうけよう	大学生と一緒に大学の勉強をしてみましょう。 742 教室
5 11時 50分	昼食	近くのコンビニに買いに行きます。 食事は、カフェで。
6 12時 30分	閉会式	742 教室

【お願い】
 ライフカレッジのことやみなさんの仕事のことを教えてほしいと思います。アンケートに記入をお願いします。




4 アンケート調査から

(1) 調査内容

参加者に対していくつかのアンケートを行ったが、ここでは余暇に関するアンケートについてまとめる。参加者に対して下記のアンケートを実施し、余暇の実態について調べることにした。

アンケートは講義終了後に一斉に行い、全員から回収することができた。

年齢	
高校を卒業して何年目	
性別	<input type="checkbox"/> 男 <input type="checkbox"/> 女
卒業した学校	
会社名	

当てはまるところに✓を付けて下さい。

今の仕事に満足していますか。		
<input type="checkbox"/> とてもあてはまる <input type="checkbox"/> あてはまる <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> 少しあてはまらない <input type="checkbox"/> あてはまらない		
今困っている事がありますか。		
<input type="checkbox"/> とてもある <input type="checkbox"/> ある <input type="checkbox"/> 少しある <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> ない		
とてもある、ある、少しあると答えた方はどのような困り感ですか。		
将来の夢はありますか。		
<input type="checkbox"/> ある <input type="checkbox"/> ない		
あると答えた方はどのような夢ですか。		
休日何をしていますか。(当てはまるところに✓を付けて下さい。)		
<input type="checkbox"/> テレビ	<input type="checkbox"/> DVD	<input type="checkbox"/> ゲーム
<input type="checkbox"/> 読書(漫画、雑誌)	<input type="checkbox"/> 読書(小説など)	<input type="checkbox"/> 映画館
<input type="checkbox"/> カラオケ	<input type="checkbox"/> スポーツクラブ	<input type="checkbox"/> ボーリング
<input type="checkbox"/> 卓球	<input type="checkbox"/> ペットと散歩(遊ぶ)	<input type="checkbox"/> ショッピング
<input type="checkbox"/> 旅行	<input type="checkbox"/> 音楽を聴く	<input type="checkbox"/> 絵を描く
<input type="checkbox"/> 料理	<input type="checkbox"/> SNS	<input type="checkbox"/> 家で寝る
<input type="checkbox"/> カフェに行く	<input type="checkbox"/> お酒を飲みに行く	<input type="checkbox"/> 地域の行事
<input type="checkbox"/> その他()		
休日何をしたいですか。(当てはまるところに✓を付けて下さい。)		
<input type="checkbox"/> テレビ	<input type="checkbox"/> DVD	<input type="checkbox"/> ゲーム
<input type="checkbox"/> 読書(漫画、雑誌)	<input type="checkbox"/> 読書(小説など)	<input type="checkbox"/> 映画館
<input type="checkbox"/> カラオケ	<input type="checkbox"/> スポーツクラブ	<input type="checkbox"/> ボーリング
<input type="checkbox"/> 卓球	<input type="checkbox"/> ペットと散歩(遊ぶ)	<input type="checkbox"/> ショッピング
<input type="checkbox"/> 旅行	<input type="checkbox"/> 音楽を聴く	<input type="checkbox"/> 絵を描く
<input type="checkbox"/> 料理	<input type="checkbox"/> SNS	<input type="checkbox"/> 家で寝る
<input type="checkbox"/> カフェに行く	<input type="checkbox"/> お酒を飲みに行く	<input type="checkbox"/> 地域の行事
<input type="checkbox"/> その他()		
休日に誰と遊んでいますか。(当てはまるところに✓を付けて下さい。)		
<input type="checkbox"/> 家族 <input type="checkbox"/> 学校の友人 <input type="checkbox"/> 学校以外の友人 <input type="checkbox"/> 地域の人 <input type="checkbox"/> 一人 <input type="checkbox"/> その他()		
仕事終わりに何をしていますか。(当てはまるところに✓を付けて下さい。)		
<input type="checkbox"/> テレビ	<input type="checkbox"/> DVD	<input type="checkbox"/> ゲーム
<input type="checkbox"/> 読書(漫画、雑誌)	<input type="checkbox"/> 読書(小説など)	<input type="checkbox"/> 映画館
<input type="checkbox"/> カラオケ	<input type="checkbox"/> スポーツクラブ	<input type="checkbox"/> ボーリング
<input type="checkbox"/> 卓球	<input type="checkbox"/> ペットと散歩(遊ぶ)	<input type="checkbox"/> ショッピング
<input type="checkbox"/> 旅行	<input type="checkbox"/> 音楽を聴く	<input type="checkbox"/> 絵を描く
<input type="checkbox"/> 料理	<input type="checkbox"/> SNS	<input type="checkbox"/> 家で寝る
<input type="checkbox"/> カフェに行く	<input type="checkbox"/> お酒を飲みに行く	<input type="checkbox"/> 地域の行事
<input type="checkbox"/> その他()		
仕事終わりに何をしたいですか。(当てはまるところに✓を付けて下さい。)		
<input type="checkbox"/> テレビ	<input type="checkbox"/> DVD	<input type="checkbox"/> ゲーム
<input type="checkbox"/> 読書(漫画、雑誌)	<input type="checkbox"/> 読書(小説など)	<input type="checkbox"/> 映画館
<input type="checkbox"/> カラオケ	<input type="checkbox"/> スポーツクラブ	<input type="checkbox"/> ボーリング
<input type="checkbox"/> 卓球	<input type="checkbox"/> ペットと散歩(遊ぶ)	<input type="checkbox"/> ショッピング
<input type="checkbox"/> 旅行	<input type="checkbox"/> 音楽を聴く	<input type="checkbox"/> 絵を描く
<input type="checkbox"/> 料理	<input type="checkbox"/> SNS	<input type="checkbox"/> 家で寝る
<input type="checkbox"/> カフェに行く	<input type="checkbox"/> お酒を飲みに行く	<input type="checkbox"/> 地域の行事
<input type="checkbox"/> その他()		

(2) アンケートの結果

- ① 仕事の満足度は「とてもあてはまる」と「あてはまる」をあわせると 80%であり、今の仕事におおむね満足していることが伺えた。しかし、職場で困っていることが「ある」「どちらともいえない」を合わせた割合が 50%であり、満足はしているものの何らかの悩みを抱えていることが分かった。具体的な記述では、「職場の人とうまく話せない」「作業スピードが日によって違う」等、コミュニケーションや急な変化への対応などで困っていることが明らかになった。
- ② 将来の夢に関する項目では、「夢がある」と答えた人は 60%、「夢がない」と答えた人が 40%であり、日々の生活に追われて、将来のことをイメージできない人がいることが分かった。
- ③ 余暇に関する項目では、休日に行っていることは「ゲーム」が多く、他には「SNS」「映画」「カラオケ」等が多かった。休日に行してみたいことに関するアンケートでも、同様の回答が多く、趣味に関する広がりが出なかった。
- ④ 仕事の後の余暇についてのアンケートも同様で、仕事と家庭生活の往復が多く、社会的な広がりやの少なさを感じた。

アンケートの結果からは、仕事に関する悩みでは、障害の特性への配慮も必要であることがわかり、職場の中で相談役となってくれるキーパーソンを作る必要がある事が分かった。また、余暇に関する調査では、レポーターが乏しいことが分かり、オープンカレッジのような生涯学習を通して、豊かな人生についても積極的に学んでいくことの必要性がある事が分かった。

(3) 倫理的配慮

本研究では、調査の回答は任意であることについて、本人に対して文書と口頭で説明した。個人の情報について配慮し、アンケートはこの研究以外で使用する事はせず、使用後は処分することについても説明し、同意を得て回収した。また、写真や口頭での感想などについては、活用して差し支えないとの回答を文書で提出してもらった。

5 まとめ

コロナ禍での実践だったために、日程の変更や募集人員の制限などがあり、十分な内容を盛り込むことはできなかった。しかし、人数を絞ったことで、参加者と大学生が少人数でチームを作り、3 回の日程を通して継続してかかわれたことは、お互いの理解やコミュニケーションの広がりという点では有効だったと思われる。

アンケートの結果をまとめると、高等部を卒業すると学ぶ機会が減り、趣味も偏りがあることが明らかになった。しかし、学びたいという思いはあり、全員がこのような機会があったらまた参加したいと答えており、大学での学びのニーズは高いと思われる。

高等部の教育課程については、生涯学習の観点から、学び続け幸せに生活する視点についても盛り込んでいく必要があると思われる。また、障害受容、自己肯定感の向上、充実した進路選択という流れを考えたときに、高等部 3 年間では時間が足りないケースも出てくるとと思われる。そのような生徒が時間をかけてじっくりと学んでいけるように、次の学びに繋がるような教育課程を編成していくことが重要であると考えている。



知的障害特別支援学校と大学が協力することで、知的障害者の生涯にわたって幸せな生活を保障する可能性が広がると考える。

本活動は、十文字学園女子大学地域連携共同研究所の研究費により実施した。

<参考文献>

- (1) 文部科学省（2019）特別支援学校高等部学習指導要領（平成 31 年告示）。
- (2) 文部科学省（2018）学校基本調査。
- (3) 鈴木恵太ら（2010）オープンカレッジにおける知的障害者の生涯学習支援の取り組み. 東北大学教育ネットワークセンター年報, 2010, 10, 15-25.
- (4) 岡野智ら（2010）オープンカレッジにおける知的障害者の生涯学習支援に関する意義. 東北大学教育ネットワークセンター年報, 2010, 10, 27-36.
- (5) 野崎美穂・栗林睦・和田充紀（2018）知的障害特別支援学校に求められる教育課程編成の視点の検討. 富山大学人間発達科学部紀要 第 13 巻第 2 号, 319-333.
- (6) 文部科学省委託調査(2021) 令和 2 年度「生涯学習を通じた共生社会の実現に関する調査研究」
- (7) 長谷川正人・田中良三・猪狩恵美子（2015）知的障害者の大学創造への道. 株式会社クリエイツかもがわ.
- (8) 障害者基本計画(第 4 次)内閣府.
- (9) 鈴木洗平・細谷一博（2016）成人知的障害者の余暇生活における現状と課題. 北海道教育大学紀要, 第 37 巻第 1 号, 181-190.

栄養管理技術の提供による持続可能な開発目標(SDGs)への試み ～糖質管理スイーツの開発を通じた地域社会との関わりについて～

Attempt to Sustainable Development Goals (SDGs)
by providing nutritional management technology
～ Collaboration with the community through the development of sweets
that manage available carbohydrates ～

國井 大輔 ¹⁾ Daisuke KUNII	川崎 涼風 ¹⁾ Suzuka KAWASAKI	菊池 彩乃 ¹⁾ Ayano KIKUCHI
石沢 美和子 ²⁾ Miwako ISHIZAWA	吉山 裕子 ²⁾ Yuko YOSHIYAMA	石井 由紀子 ³⁾ Yukiko ISHII

1) 十文字学園女子大学・食物栄養学科 2) NPO 法人シンフォニー 3) 料理研究家(フリーランス)

キーワード：糖質管理 食品開発 SDGs

要旨：嗜好品であるスイーツは、おいしくて、心を満たし、人を笑顔にする食べ物のひとつである。本プロジェクトでは、糖質管理技術をひとつの契機とし、ただ美味しいだけではなく、誰もが安心して食べられる「身体に優しいスイーツ」の開発を実施した。また、栄養管理技術の展開例のひとつとして、高付加価値化されたスイーツの商品開発を通じた地域社会との関わりや、栄養管理技術による SDGs への試みとしても検討した。障がい福祉サービス事業所(就労継続支援 B 型)である NPO 法人シンフォニー(埼玉県新座市)に糖質管理技術を提供することで糖質管理スイーツを開発し、テスト販売を実現させた。販売時には、購入者(喫食者)を対象にしたアンケート調査を実施し、解析結果を次の開発にフィードバックした。授産製品の商品化では、製造コストの面から、一般的に販売価格が高くなる傾向にあるため、経済活動というより福祉活動の意味合いが強い。本学学生にとっても SDGs を意識した社会活動として教育的価値があるものの、持続可能な実施体制を築くための工夫が必要であった。様々なハンディキャップを持つ方々を社会全体で支える活動として、素材メーカーの協力も含め、クラウドファンディングによる資金調達など、新たなビジネスモデルの構築を検討する必要があることが明らかとなった。

はじめに

昨今のコロナ禍で生活環境が大きく変化し、人々は様々なストレスを抱えながら生活を営んでいる。厚労省による新型コロナウイルス感染症に係るメンタルヘルスに関する調査によると、2020年2～9月の平均で、55.0%の人々が何らかの不安を抱えている¹⁾。

「食べる」という行為は、その内容と方法によって、心身の健康の維持増進に寄与したり、疾病を引き起こしたりする。また、「食べる」という行為は、単に空腹を満たすだけでなく、五感で味わい、親しい人たちとの会話を楽しんだりすることなどで、ストレス管理にも利用できる。

今回は、栄養管理技術の展開例のひとつとして、高付加価値化されたスイーツの商品開発を通じた地域社会との関わりや、栄養管理技術による SDGs への試みとして、本プロジェクトの取り組みについて紹介する。

1 スイーツ開発の背景

嗜好品であるスイーツは、おいしくて、心を満たし、人を笑顔にする食べ物のひとつである。スイーツを食べることで、リラックスやリフレッシュができたり、ストレス管理でも利用されている²⁾。

昨今の新型コロナウイルスの蔓延により、社会環境や生活様式が大きく変化した。コロナ禍が長期

化し、制限される生活が長くなるにつれ、世代を問わず多様なストレスを抱える人が増えている³⁾。スイーツを食べることで「幸せな気持ちになる」「気分転換になる」など、スイーツ摂取による一定のストレス改善効果が見られており、コロナ禍も相まって、テイクアウトできるスイーツの店も増え、新たなスイーツの楽しみ方も定着してきている⁴⁾。

このような社会環境の中で、嗜好品であるスイーツは、ただ美味しいだけではなく、精神面の安定・回復を含めた健康管理にも重要な役割を担っている。

しかし、一般的に、スイーツには糖質や脂質が多く含まれ、カロリーが高いものが多い。体脂肪の過剰蓄積による体重増加があったり、基礎代謝量の低下や活動量が少ない場合は、様々な疾病予防の観点からも、嗜好品であるスイーツの利用には注意が必要である。

特に、肥満やメタボリックシンドロームを含め、糖尿病や食後高血糖症状などの「糖代謝異常」がある人は、スイーツを含めた糖質の摂り方に注意しなければならない。糖質は血糖値を上昇させる唯一の栄養成分であり、糖質摂取によって分泌されたインスリンによって中性脂肪を経て体脂肪として蓄えられる特徴を持つからだ⁵⁾。

スイーツは、ストレス管理に役立つものの、使い方によって様々な疾病を惹起することがあるため、利用する際には利用者の精神的・身体的状況を総合的に勘案した使い方が必要になる。

2 糖質管理技術の考え方と開発の方向性

当研究室では、糖質を代謝する力が弱い人、また、食後高血糖症状を含めた糖尿病前症者、糖尿病患者、体脂肪減量が必要な人に対しては、従来の「カロリー管理食事療法」と合わせて、個別に対象者の状態を見ながら、糖質の摂取量や摂り方を管理した「糖質管理食事療法」も早期から検討していくべきだと考えている。

また、当研究室が考える糖質管理技術による商品開発の方向性は2つあり、①商品の成分を管理し、身体の状態に合わせた適切な分量が摂れるよう設計すること、②必要な人に必要な商品の選択肢を増やすことである。

当研究室の糖質管理技術は、極端なものではなく、医科学的な根拠に基づくもので、誰もが安心できる食環境の整備に役立つと考えている。現時点でも、複数の医師等が中心となって様々な糖質管理技術が提唱されており、糖質管理による食事療法の有効性に関する医科学的根拠も蓄積されている⁶⁾⁷⁾。

そこで、本プロジェクトでは、糖質管理技術をひとつの契機とし、ただ美味しいだけではなく、誰もが安心して食べられる「身体に優しいスイーツ」の開発を実施した。ここでいう「身体に優しいスイーツ」とは、一般的なスイーツと比較して、食後の血糖上昇を穏やかにするよう設計した「糖質管理スイーツ」としている。

3 商品開発を通じた SDGs⁸⁾ への試み

本プロジェクトは、単に、糖質管理スイーツを開発するだけでなく、SDGsの試みとして、大学と地域社会との関わりについても模索した。

栄養管理技術によって、既存品をベースにした、新たな付加価値を持つ商品を開発し、この開発を契機として、消費者を含めた全ての関係者が、SDGsの目標達成に至るよう、持続可能な連携体制に必要なポイントについても整理した。

本プロジェクトは、2021年度十文字学園女子大学地域連携共同研究所研究プロジェクトに採択されており、SDGsの目標である「3:すべての人に健康と福祉を」「8:働きがいも経済成長も」「9:産業と技術革新の基盤をつくろう」「17:パートナーシップで目標を達成しよう」の4つに該当している(図1)。



図1

4 実施体制の構築

実施体制の構築には、当研究室が主導して、関係者に本プロジェクトの趣旨を説明した。趣旨に賛同が得られた 14 の事業者ならびに外部有識者の協力によって、本プロジェクトの実施体制を構築した（図 2）。

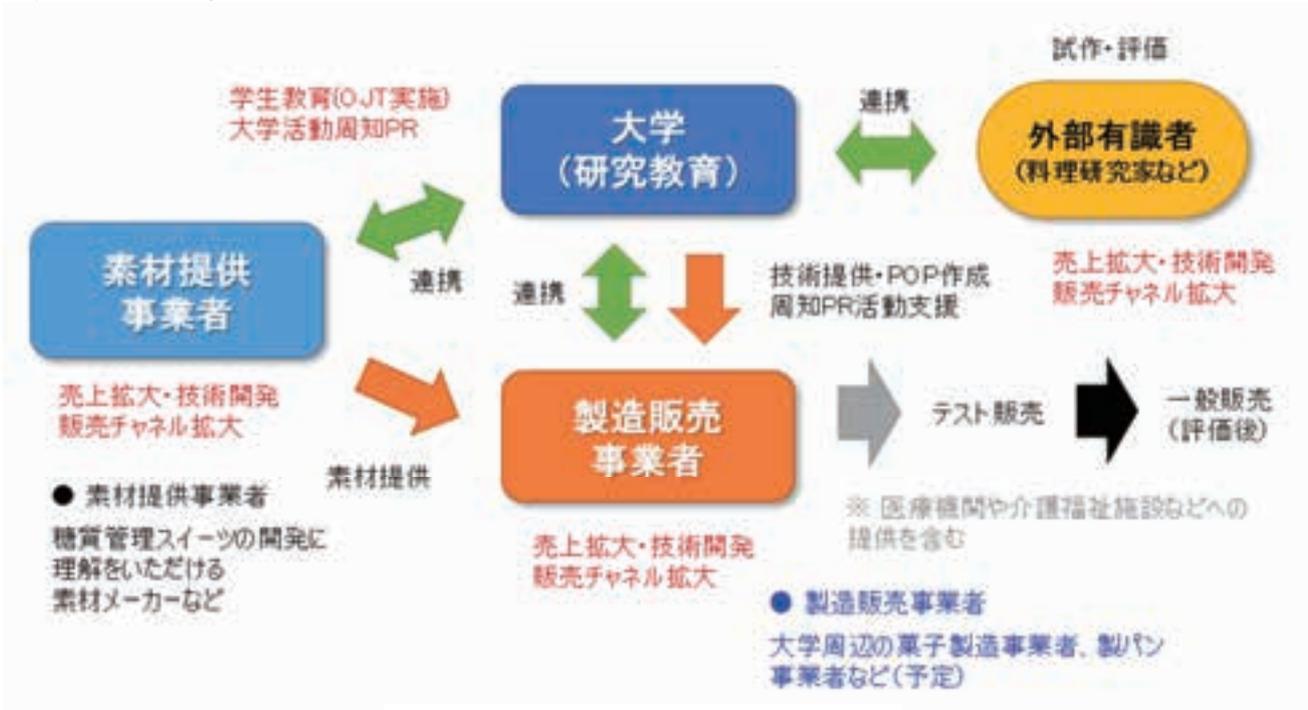


図 2) 本プロジェクト実施体制図

実施体制は、大学、素材提供事業者、製造販売事業者、外部有識者（料理研究家など）の 4 つのユニットで構成し、それぞれの役割と利点について整理した。

大学の役割は、全てのユニットを束ね、スケジュールを管理調整し、専門技術の提供によって、本プロジェクトを完遂させることにある。利点としては、研究教育の一環として、学生教育（OJT 実施）や大学活動の周知 PRなどを挙げた。素材提供事業者の役割は、本プロジェクトに必要な食品素材の提供にあり、製造販売事業者の役割は、提供された食品素材を用いて共同開発した商品の試作とテスト販売を行うことである。利点としては、両事業者とも、売上拡大、技術開発、販売チャネルの拡大などを挙げた。外部有識者（料理研究家など）の役割は、専門技術によるレシピアレンジや、共同開発した商品の試作、評価、専門的助言とし、利点としては、同様に、売上拡大、技術開発、販売チャネルの拡大などを挙げた。

本プロジェクトの趣旨に賛同が得られた事業者ならびに外部有識者は次の通りである。素材提供事業者として、三昌貿易株式会社、ハース株式会社、株式会社ブラクストン、トヨタマ健康食品株式会社、伊藤忠精糖株式会社、サラヤ株式会社、リボン食品株式会社、鳥越製粉株式会社、神戸化成株式会社、株式会社ウエノフードテクノ、さとの雪食品株式会社、相模屋食品株式会社。製造販売事業者として、NPO 法人シンフォニー、パティスリーリアント。外部有識者として、料理研究家の石井由紀子氏が加わり、持続可能な実施体制の構築を試みた。

なお、素材提供事業者から提供してもらった全ての食品素材は試作で使い、風味や食感などの官能評価をはじめ、作業性、生産コストなどを総合的に勘案し、最終商品への採用を検討した。

5 製造販売事業者の選定

本学周辺の製菓製造販売事業者に本プロジェクトの趣旨を説明し、賛同が得られた2つの事業者を選定し、様々な条件を総合的に判断した結果、最終的にNPO法人シンフォニー⁹⁾(シンフォニー)を本プロジェクトの製造販売事業者とした。

シンフォニーは、埼玉県指定の障がい福祉サービス事業所(就労継続支援B型)で、障がい者に対し社会参加を目指した支援活動を行い、福祉の増進を図ることを目的として2012年に設立された。2013年に実施された「第6回チャレンジドカップ・焼き菓子コンテスト」で、初出場で優勝するなど、製菓技術の高さもあり、糖質管理技術とのマッチングもスムーズに行われた。

本プロジェクトでは、コロナ禍での実施ということもあり、通所利用者(作業員)の感染防止を最優先に考え、徹底した衛生管理の下、シフトや作業工程、生産量などを調整した。また、コロナ禍などによる突発的なプロジェクトの中断・停止も想定しながら、慎重に進めることとした。



シンフォニー外観



第6回チャレンジドカップ
焼き菓子コンテスト優勝



打ち合わせの様子



作業員試作の様子



6 糖質管理スイーツの開発

本プロジェクトにおける糖質管理スイーツの開発では、①配合の見直しによる糖質の管理(1回量あたり糖質量10g程度)、②生理活性物質配合による管理、の2つのアプローチを設定した。

まず、本学学生によって、糖質管理に利用できる食材による基礎配合の調整や、生理活性物質添加によるスイーツの食感や風味への影響の確認を行った(表1)。基礎配合の評価は、一般的なマドレーヌのレシピを用いた。当研究室においてマドレーヌを試作後、外部有識者を交えて官能評価を行い、官能評価結果を配合にフィードバックした。その後、外部有識者による試作・配合調整も実施し、完成度を更に高めた。

表1) マドレーヌ試作による基礎配合の評価

マドレーヌ試作	甘味料の違い			小麦粉代替品・有効素材の組み合わせ			
	A	B	C	D	E	F	G
試作番号							
風味バランス	◎	○	◎	○	○	◎	○
糖質量(g)製品1個あたり	10.6	10.6	12.4	6.8	6.9	7.4	7.4
増減(%)		-0.1	+16.8	-36.2	-35.4	-30.7	-30.1
血糖値への影響	ショ糖	◎ ※1	○ ※1	○ ※2	○ ※2	○ ※2	○ ※2
製品コスト(倍)	1.0	1.7	1.2	2.1 ※3	2.1 ※3	2.6 ※3	2.5 ※3
原材料費のみでの比較				1.4 ※4	1.5 ※4	1.9 ※4	1.9 ※4

A:一般的なマドレーヌ配合 / 官能評価:◎非常に良い ○良い △普通 ×良くない / 有効素材配合:E・G
 ※1 製品パンフレットより ※2 Aより糖質量を抑えているため ※3 甘味料は全量糖アルコール
 ※4 甘味料は全量ショ糖(糖質量は同値)

得られた情報を参考に、製造販売事業者によって、既存品をベースに、趣の異なる6種類の糖質管理スイーツの試作を実施した。現場の作業性や作業者のスキルなどを考慮し、最終的に既存品をアレンジした「プレーンクッキータイプ」、「クランチクッキータイプ」の2種類のベース配合が完成した。いずれもタイプも、小麦粉の代わりに、おからや豆乳も配合し、人工甘味料を使用せずに、糖質管理スイーツとしての美味しさと機能性の両立を実現させた。生理活性物質としては、糖質の吸収を遅らせる成分が含まれる「桑葉粉末」、脂肪肝や動脈硬化の予防に役に立つ成分が含まれる「ドライほおずき」を採用し、糖質管理スイーツの特徴のひとつとした。

桑葉粉末には、デオキシノジリマイシンというイミノ糖が含まれているのが特徴で、その構造がグルコースに似ていることから、小腸でのグルコース吸収が遅延することによって、血糖値の急上昇が抑えられる作用があり、様々な研究結果が得られている¹⁰⁾¹¹⁾。

ほおずきには、イノシトールという糖アルコールが含まれているのが特徴で、イノシトールは発育因子や抗脂肪肝因子として作用することが知られており、最近では、脂肪肝や動脈硬化の予防のほか、脳細胞に栄養を与えるという研究結果がある¹²⁾。

7 開発した商品について

本プロジェクトでは、シンフォニーの作業者のスキルを考慮して、既存品をベースにした「プレーンクッキータイプ」、「クランチクッキータイプ」とし、作業工程に大きな変更を加えないように実施した。

開発した2商品のうち「桑葉粉末入りおから豆乳クッキー（生クリーム入り）」は、プレーンクッキータイプの配合をベースに、国産桑葉粉末^{※A)}と生クリームを配合した。商品特徴としては、桑葉粉末の抹茶のような風味と生クリームのコクが楽しめる、無着色の手づくりクッキーで、おからと豆乳によって糖質量を調整している（甘味料は砂糖のみを使用）。



写真提供) トヨタマ健康食品株式会社



桑葉粉末入り
おから豆乳クッキー
(生クリーム入り)

「ドライほおずき入り玄米クランチクッキー（おから・豆乳入り）」は、クランチクッキータイプの配合をベースに、爽やかな酸味がある食用ほおずき（乾燥）^{※B)}を配合した。商品特徴としては、玄米フレークの食感も楽しめる手づくりクッキーで、乾燥おから^{※C)}と豆乳によって糖質量を調整している（甘味料は砂糖のみを使用）。



写真提供) 株式会社ブラクストン



ドライほおずき入り
玄米クランチクッキー
(おから・豆乳入り)

※A) トヨタマ健康食品株式会社提供（東京都中央区）¹³⁾、※B) 株式会社ブラクストン提供（神奈川県横浜市）¹⁴⁾、※C) さとの雪食品株式会社提供（徳島県鳴門市）¹⁵⁾

8 栄養学的特徴について

開発した糖質管理スイーツは、美味しさを維持したまま、次の栄養学的特徴になった。

(1) 桑葉粉末入りおから豆乳クッキー（生クリーム入り）

【栄養成分】 ※1袋6粒当たり

エネルギー：138 kcal

たんぱく質：2.5 g

脂質：8.6 g

糖質：10.8 g

食物繊維：3.2 g

【製品100gでの比較】 ※対既存同等品ベース配合（目安）

エネルギー：-9.0%

脂質：-1.0%

糖質：-34.7%

食物繊維：8.4倍増

【特徴】

糖質を約35%減らし、食物繊維を約8倍量に増やした。糖質吸収を遅らせる作用がある成分を含む「桑葉粉末」を6.3%（配合時）使用。



桑葉粉末入り
おから豆乳クッキー
（生クリーム入り）

(2) ドライほおずき入り玄米クランチクッキー（おから・豆乳入り）

【栄養成分】 ※1袋30g当たり

エネルギー：151 kcal

たんぱく質：3.0 g

脂質：4.9 g

糖質：21.0 g

【製品100gでの比較】 ※対既存同等品ベース配合（目安）

エネルギー：-6.6%

脂質：-5.6%

糖質：-18.5%

食物繊維：4.5倍増

【特徴】

糖質を約19%減らし、食物繊維を約5倍量に増やした。脂肪肝や動脈硬化の予防に役に立つ成分を含む「ドライほおずき」を11.3%（配合時）使用。

※栄養成分値は、日本食品標準成分表2020年版（八訂）による計算値（目安）



ドライほおずき入り
玄米クランチクッキー
（おから・豆乳入り）

9 テスト販売について

本プロジェクトで開発した2種類の商品について、2022年3月1日より、生産量、期間限定で試験販売を実施した。商品規格としては、「桑葉粉末入りおから豆乳クッキー（生クリーム入り）」は1袋6粒入り、「ドライほおずき入り玄米クランチクッキー（おから・豆乳入り）」は1袋30g入り、いずれも270円（税込）とした（2022年4月1日から280円に価格変更）。

販売価格は、一般商品と異なる授産製品であるため、障がい者の社会活動や自立支援といった共生社会の実現（相互扶助）ということも考慮して設定した。



試験販売用パッケージ

生産量は、作業者のシフトやスキルを考慮して、1週間に各種類15袋ずつを目安として生産計画を立案した。

これまで、シンフォニー店舗（埼玉県新座市新座）の他、マルイファミリー志木¹⁶⁾（埼玉県志木市本町）での「SDGs フェス in 志木 2022」（3月12-13日催事）、「一般催事」（4月27-30日催事）、新宿小田急ミロードモザイク通り「アグリ森 産学連携アンテナショップ」（東京都新宿区）で販売した。

なお、2022年3~4月の2ヶ月間で、「桑葉粉末入りおから豆乳クッキー（生クリーム入り）」は142袋、「ドライほおずき入り玄米クランチクッキー（おから・豆乳入り）」は134袋販売した。

【試験販売の様子】



シンフォニー店舗内



マルイファミリー志木店舗内



10 周知活動について

テスト販売の実施に伴い、本学広報課によるプレスリリース、店舗用POPやチラシなどの販促ツール作成の他、喫食後の感想や意見などを次のプロジェクトに反映させるために、アンケートはがきを用意した。他にも新座市や新座市産業観光協会のホームページなどでも周知されている^{17) 18)}。

【販促ツール】



プレスリリース



店舗内 POP



商品説明資料

1.1 アンケート調査について

テスト販売に合わせて、持続可能な販売（一般販売）につなげていくために、消費者の嗜好やコストなどに関する調査を実施した（販売時に配布：図3）。

設問内容は次の通りである。（○は1つ、□は複数選択可）

- ① 年代：○～20代 ○30～40代 ○50～60代 ○70代～
○答えたくない
- ② 性別：○男性 ○女性 ○答えたくない
- ③ 住所：○埼玉県 ○東京都 ○その他⇒市区町村名
- ④ 購入商品：□桑葉粉末入りクッキー □ほおずき入りクラン
チクッキー
- ⑤ 購入動機：□美味しそう □健康に良さそう □素材がめ
ずらしい □POP(説明文章)を見た □大学との共同開発
□店員の勧め □知人の紹介 □SNS で見た □その他
- ⑥ 食べた感想：○美味しい ○普通 ○あまり美味しくない
(理由)
- ⑦ 価格感：○高い ○普通 ○安い
- ⑧ 買いやすい価格帯※普段使い 1袋あたり：□～199円
□200～299円 □300～399円 □400～499円 □500～599円
□600円～
- ⑨ 意見や希望など（自由記述）

【アンケートのお願い】
この度は、ご購入いただき誠にありがとうございました。今後の商品開発の参考にさせていただきたいので、率直なご意見を聞かせて頂ければ幸いです。

設問	回答選択肢 (○は1つ選び、□は複数選択可)
① 年代	○～20代 ○30～40代 ○50～60代 ○70代～ ○答えたくない
② 性別	○男性 ○女性 ○答えたくない
③ 住所	○埼玉県 ○東京都 ○その他 ⇒市区町村名
④ 購入商品	□桑葉粉末入りクッキー □ほおずき入りクランチクッキー
⑤ 購入動機	□美味しそう □健康に良さそう □素材がめずらしい □POP(説明文章)を見た □大学との共同開発 □店員の勧め □知人の紹介 □SNS で見た □その他
⑥ 食べた感想	○美味しい ○普通 ○あまり美味しくない(理由)
⑦ 価格感	○高い ○普通 ○安い
⑧ 買いやすい価格帯※普段使い 1袋あたり	□～199円 □200～299円 □300～399円 □400～499円 □500～599円 □600円～
⑨ 意見や希望など	自由記述欄

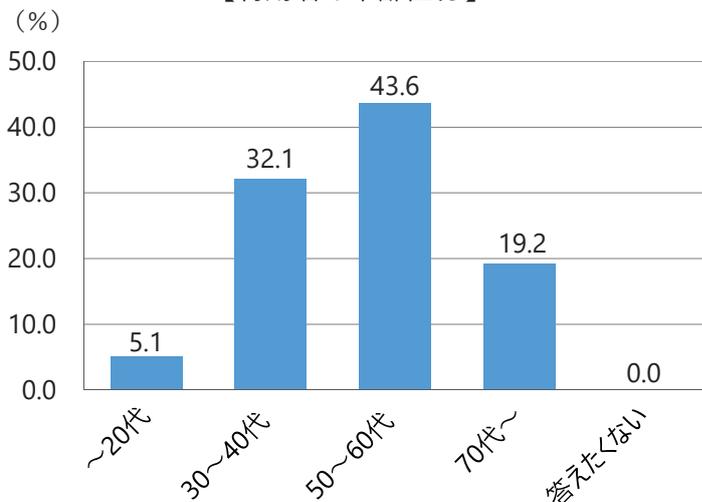
ご協力ありがとうございました！
そのままポストに投函ください

図3) 調査用はがき（裏面）

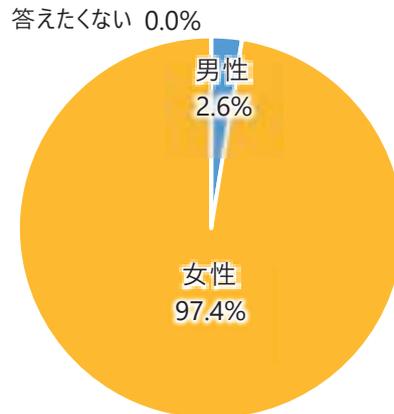
2022年5月1日現在、78通のはがきが返信されており、次に解析結果を示す。

まず、試験販売における購入者の年齢は50～60代が43.6%と最も多く、次いで30～40代の32.1%であった。また、購入者の性別は97.4%が女性で、居住地は埼玉県が最も多く（91.0%）、店舗販売のみのため、近隣住民の利用が多かった。

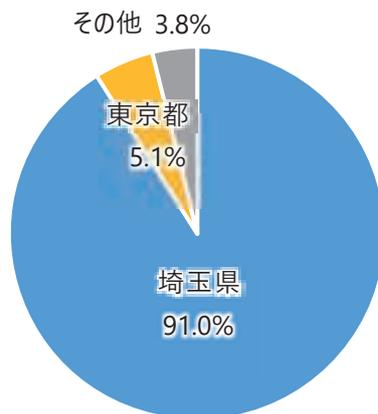
【利用者の年齢区分】



【利用者の性別】

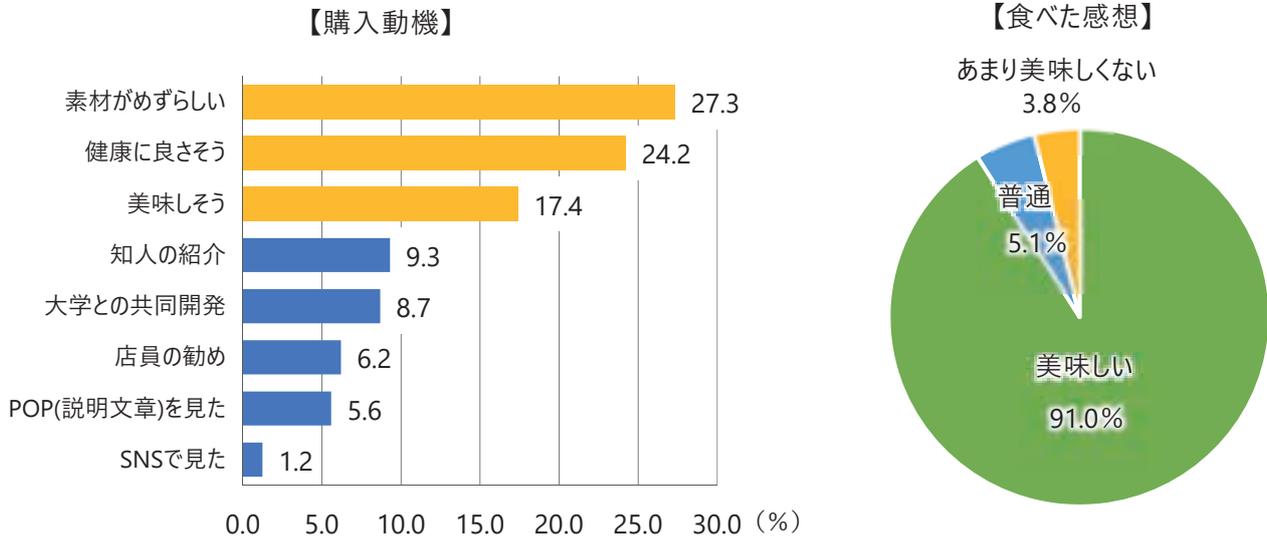


【利用者の居住地】



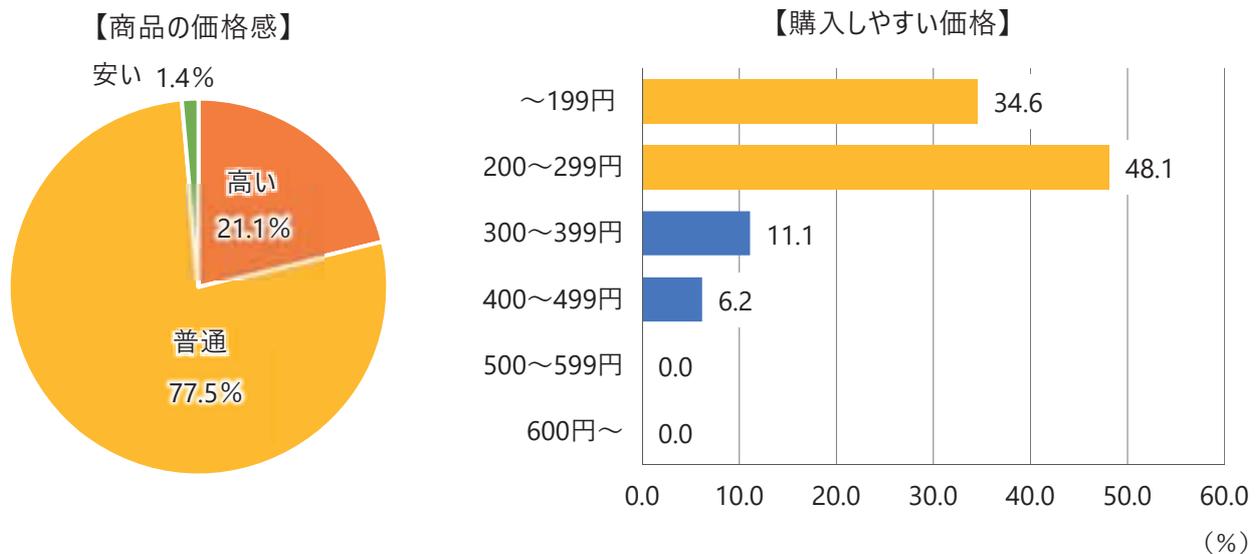
購入動機については、「素材がめずらしい」が最も多く(27.3%)、次いで「健康に良さそう」(24.2%)「美味しそう」(17.4%)となり、糖質管理スイーツに求めている購入者の好みの傾向が分かった。

また、喫食した91.0%が「美味しい」と回答しているものの「あまり美味しくない」と回答した購入者が3.8%いた。理由は、使用したドライほおずきの酸味が強いことが挙げられたが、ドライほおずきの酸味が美味しいとの評価もあり、ドライほおずきには、好みが分かれる特徴的な呈味があることが分かった。



今回のテスト販売では、1袋270円という価格設定であったが、商品の価格感については、77.5%が「普通」と回答したものの、21.1%が「高い」と回答した。購入しやすい価格を聞いた調査で34.6%が200円未満を希望していることから、販売価格の検討と合わせて、授産製品のビジネスモデルに工夫が必要であることが分かった。

授産製品は、大量生産ではなく様々なハンディキャップを持つ方々が全て手作業で製造する社会福祉の意味合いが強いため、販売価格が高くなりがちである。販売価格の設定は、商品の品質だけでなく、製造工程のストーリーや栄養管理技術などの付加価値を積極的に提示してだけでなく、クラウドファンディングなどの新たな資金調達の方法も必要であることが分かった。



12 まとめ

本プロジェクトを通じて得られた知見について、「糖質管理スイーツの開発」「地域連携と大学における実学教育」「持続可能な実施体制」に分けてまとめる。

(1) 糖質管理スイーツの開発

本プロジェクトにおける糖質管理スイーツの開発では、①配合の見直しによる糖質の管理（1回量あたり糖質量 10g 程度）、②生理活性物質配合による管理、の2つのアプローチによって、美味しくて身体に優しいスイーツを開発することができた。

開発された2つの商品については、美味しさを維持しながらも、既存同等品と比較して糖質量を抑えることができたが、風味や作業性、コスト等を総合的に判断した配合内容となった。

含まれる糖質量については、桑葉粉末入りクッキーは、1袋あたり糖質量 10.8g と1回量程度（糖質量 10g 目安）であったが、ほおずき入りクランチクッキーは、1袋あたり糖質量 21.0g と2回量程度であり、糖質管理しやすい着地点となった。

本プロジェクトでは、障がい福祉サービス事業所（就労継続支援 B 型）が製造販売事業者となっているため、その特性を理解し、作業員のスキルに合わせた開発内容や作業工程を組み上げる必要があった。商品開発のストーリーや作業プロセスなども付加価値とした新商品の開発で、作業員の働き甲斐の向上にもつなげることができた。

今後も作業員のスキルや作業内容を確認しながら、新たな品目の開発を検討していく。

(2) 地域連携と大学における実学教育

本プロジェクトでは、大学における地域連携の一環として、単なる商品開発を通じた社会貢献活動というだけでなく、様々な障がいを持つ人たちと協働の機会を持つことができた。様々な障がいを持つ作業員が真剣に作業に取り組む姿を目の当たりにして、本学学生の実学教育としても貴重な経験になった。

多様化する価値観の受け入れと社会問題への取り組みの経験は、本学学生にとって、今後の社会生活を送るうえでも柔軟な思考や視野の拡大につながる。本プロジェクトにおける地域連携は、商品開発だけに留まらず、社会共生の点からも極めて意義深い。

SDGs の目標である「3：すべての人に健康と福祉を」「8：働きがいも経済成長も」「9：産業と技術革新の基盤をつくろう」「17：パートナーシップで目標を達成しよう」についても、一様の成果が得られた。

栄養管理技術は、身近な食を通じた社会貢献活動に結びつきやすく、結果も消費者や地域社会の人々に認知されやすいことが多いため、今後も栄養管理技術の提供を通じた、地域社会と大学の連携を進めていきたい。



学生による製造現場見学

(3) 持続可能な実施体制

今回開発したスイーツは、製造販売事業者の通常商品にはない糖質管理されたスイーツであり、「美味しくて身体に優しい」という新たな高付加価値化が実現できた。通常の商品にない選択肢が増えることで、消費者の幅広いニーズに対応できるようになった。

しかし、持続可能な実施体制を維持していくためには、関わる全ての関係者が、各々の立場でのメリットを享受することが必要である。

本プロジェクトでは、技術提供者、素材提供者、製造販売者、消費者の4者が、各々の立場でのメリットが得られなければ、実施体制を持続できないが、授産製品を生産する事業所については、社会活動や自立支援の場であり、一般的な製造現場とは異なる特徴を持つ。

一般的に授産製品の生産コストは高く、通常の経営方法では採算を維持できないため、プロセス

やストーリーにも価値を持たせるなど、新たな経営視点が必要になる。

特に、素材提供者は社会貢献活動として企業の社会的責任（CSR）の意味合いが強くなるため、限定的な連携体制にならないような支援体制も必要である。

SDGs の点からも、消費者のネックになる販売価格の適正化を含め、社会全体で実施体制を支える仕組みについても検討していく必要がある。

今後、クラウドファンディングなどを含めた、様々な資金調達の方法や販売の仕組みを検討していくことで、持続可能な実施体制の維持を模索していきたい。

1 3 謝辞

本プロジェクトの実施に際し、取り組みの趣旨に賛同いただき、快く食材の提供をいただいた素材提供事業者様、コロナ禍での混乱のなかで製造販売を引き受けてくださった製造販売事業者様、取り組みの内容を更に高めてくださった外部有識者様、プレスリリースなどの周知活動に尽力いただいた新座市経済振興課やシティプロモーション課の皆様、本学内の関係者の皆様。そして、コロナ禍で大学生活もままならないなか試作などに励んでくれた当研究室の学生諸君。本プロジェクトに関わっていただいた全ての皆様に、この場を借りてお礼申し上げます。



<参考文献>

- 1) 厚生労働省資料「新型コロナウイルス感染症に係るメンタルヘルスに関する調査」
<https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/gaiyou.pdf>
- 2) 嗜好品摂取の心理学的効果と幸福感及び満足度との関係. パーソナリティ研究 28 (1), 87-90, 2019-07-01
- 3) 日本経済新聞「働く人の45%「メンタル不調」 コロナでストレス増加」
<https://www.nikkei.com/article/DGXZQUC211830R20C21A9000000/>
- 4) 株式会社クロス・マーケティング「スイーツに関する調査 (2021年)」
<https://www.cross-m.co.jp/news/release/20210407/>
- 5) 中性脂肪合成経路の転写調節メカニズムについての新知見. J. Jpn. Biochem. Soc. 89(3): 467-470 (2017)
- 6) Consideration of adequate carbohydrate intake. Glycative Stress Research 2018; 5 (1): 001-011
- 7) Efficacy and safety of low and very low carbohydrate diets for type 2 diabetes remission: systematic review and meta-analysis of published and unpublished randomized trial data. BMJ 2021;372:m4743
- 8) <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/index.html>
- 9) <https://symphony-niiza.jimdofree.com/>
- 10) Inhibitory effects of extractives from leaves of Morus alba on human and rat small intestinal disaccharidase activity. British Journal of Nutrition (2006), 95, 933-938

- 11) Mulberry-extract improves glucose tolerance and decreases insulin concentrations in normoglycaemic adults: Results of a randomised double-blind placebo-controlled study. PLoS One. 2017 Feb 22;12(2):e0172239.
- 12) 日本食品分析センター資料「イノシトールービタミン様物質としての働き」No. 83 Dec. 2008
- 13) トヨタマ健康食品株式会社ホームページ <https://kenkoshokuhin.jp/>
- 14) 株式会社ブラクストンホームページ <http://www.blaxton.jp/>
- 15) さとの雪食品株式会社ホームページ <https://www.satonoyuki.co.jp/>
- 16) マルイファミリー志木店ホームページ
https://www.0101.co.jp/079/?from=01_pc_st079_top_head_logo
- 17) 新座市ホームページ
<https://www.city.niiza.lg.jp/site/jusanseihinnosyokai/sinfonijusanseihinshokai.html>
- 18) 新座市産業観光協会ホームページ
<https://www.niiza.net/category/information/news/>

防災ワークショップとダイバーシティ —大学での防災減災対策の課題を考える—

A Study on the Development of an Online Workshop on Disaster Reduction
Considering Diversity
—Issues related to disaster prevention and mitigation measures at our university—

松永 修一¹⁾
Shuichi MATSUNAGA

1) 十文字学園女子大学・文芸文化学科

キーワード：防災 ダイバーシティ オンライン ワークショップ 外国人

要旨：各地で開催されていた防災イベントは、コロナ禍の中では他のイベント同様に中止を余儀なくされた。本学でも2016年から市民・学生・教員の有志で開催してきた防災・減災ワークショップも厳しい状況だったが、学生たちのアイデアと努力によってオンラインで行うイベントとして試行した。いままで、海外在住の外国人と一緒に防災について考える、体験してもらうという発想など生まれることはなかっただろう。新型コロナウイルス感染症はありとあらゆることに影響を及ぼし、当然、我々の学問の領域、また学生たちの学びにも大きな変化をもたらした。学びの機会が奪われる一方で、新たな予期せぬ学びの創造も生まれたことも、明示すべきだろう。VUCAの時代に適応する学びと、多言語・多文化対応の必要性を自分事として捉えるきっかけが、奇しくも、コロナ禍時代の瓢箪から駒といった偶然の産物によるものであり、J. D. クランボルツ氏の「計画された偶発性理論」(Planned Happenstance Theory)を体現するものだと言えそうだ。また、防災イベントを通してVRなどの新たなツールを使うことにより、もっと先の未来のツールだと思っていたものが、既に身近でリアルな学びになっていることに気付く。行き当たりばったりのような、企画と体験という点は、知らず知らずのうちに線になり、やがて面となり、多様な学びの場として、関わってくださる方々の熱量によって、機能するようになった。

1 はじめに

東日本大震災の記憶は首都圏では風化しつつあった2016年6月に、市民・学生・教員で開催した「新座未来会議 in 十文字」と題したワークショップの参加者から提案されたものの中に、「防災に関するワークショップ開催」があった。この提案をきっかけに、ソーシャルワーカー、子育て支援NPO代表、保育士、看護師、薬剤師、消防士など、さまざまな市民有志が集い、開始し「防災リアルトーク in 十文字」として現在まで12回開催してきた。

防災のほか、ファシリテーション講座、福島県猪苗代町にある、震災復興の象徴として開館したアールブリュット専門美術館である「はじまりの美術館」と商店街の地域を結ぶプロジェクト。しごと総合研究所の山田夏子氏による、グラフィックレコーディング(グラフィックファシリテーション)講座開催。小川町古寺地区、高齢者と若者層を繋げる「簡単スマホワークショップ」。地域課題発見ワークセッションでは山田崇氏+佐々木裕子氏による講演とワークショップ「地域・社会課題解決、変革ためのイノベーション」。母子、高齢者、障がい者、外国人など社会的弱者や様々なステークホルダーをお招きしたイベントの開催など、現在も、新座子育てネットワーク代表坂本純子氏をはじめとした新座市民8名を核としたメンバーと学生たちによる企画・運営を行っている。

人が暮らしていくうえで、良いまちにするためには、コミュニティが必要である。しかし、人と人とのつながりが、自然発生的に生まれることは、この時代、特に都市部では困難だろう。そのためには旧来の町内会や自治会のような「地縁型」と、趣味などの共通の関心ごとや目的で結びつく

「テーマ型」という2種類のコミュニティを意識しながらつくっていかなければならない。山崎亮(2012)では持続可能なコミュニティは、この2つのコミュニティの要素をバランスよく持った「新しいコミュニティ」を作り出す必要があると言っている。

いつも仲良し、いつでも一緒に、といったものではなく、興味のあることにゆるく参画する「地域型テーマコミュニティ」が求められているのだろう。現代の大学の学びも、このようなモデルが必要な時代なのかもしれない。

2 オンライン春節イベント、防災・減災ワークショップ

2022年1月24日、3月21日に開催したワークショップイベントは、文芸文化学科ワークショップ科目として配当されている「多文化スタディー」の受講生を中心に企画・運営を行った。この授業では国際学生(留学生)と日本人学生が共にチームを組み、ワクワク度の高いプロジェクトを立て学び合いの活動を行う。この協働を通して、他者、多文化の理解、共感力の向上の機会を自分たちで創りだすことを目標としたPBL型の授業である。イベントは、授業外の課外活動として履修者以外も自由に参加できるように開放している。今回、参加した国際学生の内、留学生別科の3名はコロナ禍のため入国できず、国外からのオンライン参加であった。参加者は、日本人学生14人 国際学生11人 教員2名。

前年度までの防災・減災ワークショップは消防士、防災士、医師などの専門家を講師としてお招きし、レクチャーをお願いしていたが、今回は、「多文化スタディー」の受講生たちが、国際学生たちが必要だと思われる事項を洗い出し、情報をリサーチし、資料作成からワークショップのファシリテーターまですべてを行った。

下記は学生たちが作成した資料の一部。



学生作成資料 1



学生作成資料 2

ワークショップ後の振り返りで、「災害時、危険を知らせる表記や言葉が外国人には分かりづらく、実際に言語の壁による格差が生じてしまっていることを知りました。日本に住む外国人が安心して過ごせるようにするためには、やさしい日本語、多言語表記の実施を国をあげて取り組むべきであると考えました。「あの言葉を理解出来れば助かったのに」こういった言語により命が脅かされてしまう事態は絶対に防がなければならない、一人ひとりが重く受け止めるべきであると感じます。学生1人の力で街の防災表記を変更することは出来ませんが、まずは自分の住む地域の掲示板や防災表記にどのような日本語が使われ、多言語表記になっているのか、確かめたいと思います。行動を起こすことも大切ですが、まずは現状を知ることが大切であると考えました。」「多様性の許容が進んできたといっても一部でしかないということ。日本に外国人労働者が多くいるのは、日本で働けば多く稼げると認識していた。自分の中で思っていたことが、実際にデータや状況を見ると予想にしかならず、あてにならないため、自分の目で確かめることが大事だと思った。ネットなどの情報をうのみにせず、自分が見た情報と照らし合わせてみていくのが大事だと考えるようになった。また、自分の思っていた情報が古かったため、常に情報を更新していくことが重要だと考える。」

「今まで受けた中で1番留学生の履修者が多い授業だったので最初は距離感や接し方が手探りだったが、回数を重ねていくと自然に会話が続くようになり成長を実感できた。ゼミを除けば同じ学科に所属していても留学生との関わりは薄かったのに今では身近な存在として認知するようになった。外国人労働者の問題が授業の話題に上がった際、自分のアルバイト先は異文化摩擦が少なく平和な職場であることを初めて知った。同時に、来客する人の中にはあからさまに外国人スタッフ(私の店舗にいるのはベトナム人と在日中国人の店長)を避ける人もいる現状を認識するきっかけとなった。今後もニュースサイトや新聞を通して向き合いたい問題だと気付くことができた。」

これらの参加した学生たちの気づきを、具体的なアクションにつなげてくれることを願ってやまない。また、彼女たちの今後の行動変容に期待したい。



オンラインワークショップのスクリーンショット

3 オンライン防災ワークショップでできること

今回のワークショップでは、防災・減災に関わる情報アプリを利用するためのインストラクションも多く取り入れた。このワークは国際学生だけでなく日本人学生にも有益なものだということが、事後のリフレクションから分かった。具体的には防災・減災のための情報ツールの利用についてだが、多くの日本人学生も全く使っていなかったものが使えるツールに変わったことは災害時の支援者としてだけでなく、的確な情報により自分の命を自分で守るために是非利用してほしい。



4 防災・減災ワークショップの大学での展開

災害時対応は、どうしても多様性への配慮が欠けがちになると言われている。日本語能力情報や支援が届かない、誤解や偏見に基づく差別に遭う、経済的にも精神的にも困窮するといった、災害時に外国人が日本人とは異なる困難に直面するのは、災害時対応の文化がもたらす「少数者への配慮」の欠如が背景にあることも指摘されている。

コロナ禍にある今日の状況もまた多様性への配慮を欠いていて、脆弱な立場にある人により強くしわ寄せが行く状況となっていることは想像に難くない。防災・減災ワークショップの参加をきっかけに、SDGsに関わる学び、LGBTQ、ダイバーシティに関する学びは社会に出ていく前に、自分事として捉え、「不確実な世界」を生きていくために、世の中の『正解』が見えなくなったことを知り、最適解、納得解を探求するために、多種多様なメンバーが強みを持ちより、対話を通じて「何をともに成し遂げるのか」を決めるための基礎的スキルを身につけなくてはならない。

ワークショップからの学びは、対話によるお互いの意見のずれや違いを見える化し、認識し合うようなコミュニケーションの鍛錬となる。本学の教育人文学部必修の共通科目として「人間理解ワークショップ」という科目を設けている。この授業のゴールとして「自己理解・他者理解に焦点を置き、他者との関係を大切にしながらも主体性をもって活動する上で大切に、自由の相互承認と未来を創造していく姿勢を獲得することを目指す。」「学生と教員との対話の中から自己理解・他者理解を深め、協働しながら問いを立て、新たな価値や発想を生み出す共創の力を発揮することができる。」「自律的な態度をもった協働的学習者となる。」を掲げている。また、ディプロマポリシーとしての2番目3番目として「他者に寄り添いながら、自他共に学び続けることにより、現代的な諸問題を発見し、解決する力を身につける。」「自他との深い対話を通して自己を確立し、多様な文化を認め合いながら、持続可能で豊かな地域社会の構築に寄与する力を身につける。」としている。

「人間理解ワークショップ」は今年2年目、非常にハードルが高いようであるが、確実にすこしずつであるが成長の兆しに気付くことができる。ちょっとした授業中の対話の質の向上、特に「心理的な安心安全の場づくり」に関しては、その重要性と場づくりのために時間をかけることで対話の楽しさ、また深さを求めることができることに気付く学生たちが増えてきたことが、授業後のリフレクションのコメントからも窺える。

対話の作法を身につけるといふ、最初のフェーズから、次の「決断する」「実践する」のフェーズに進む準備もそろそろはじめなければならない。遅ればせながら、授業のスタイルを導管型のティーチングからラーニングに移行することの加速化は待たないであることを、本稿を書く中で再認識することができた。自分自身の学びも次のステップに上げていくきっかけになったことも感謝申し上げたい。

謝辞

本研究は、十文字学園女子大学地域連携共同研究所の助成を得て進められた。関係各所の皆さまの支援によるところが大きい。ここに改めて感謝申し上げたい。

<参考文献>

- ・山崎亮（2012）『コミュニティデザインの時代』中公新書
- ・田村太郎（2021）「災害時における外国人対応」『住民と自治』6月号
- ・中原淳（2022）『話し合いの作法』PHP ビジネス新書



十文字学園女子大学

地域連携共同研究所年報 第7号 (2021年度)

発行日 2022年11月

発行 十文字学園女子大学 地域連携共同研究所
〒352-8510 埼玉県新座市菅沢2-1-28
TEL 048-477-0555 (代)

印刷・製本 株式会社たじま
〒357-0045 埼玉県飯能市笠縫353-3

